
JUSTICE BOY

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J U S T I C E B O Y

【Nコード】

N 4 5 1 1 E

【作者名】

i m a i w a

【あらすじ】

正義の男剣人が世の中の悪を斬る。そんな剣人の波乱万丈な物語。

序章（前書き）

はじめのファンタジー小説で、かなり未知の領域です。

更新も適当になると思うし、内容も行き当たりばったりなので
どという展開になるかも作者もわかりません。つまらない作品にな
るかもしれませんが

適当に生温く見てもらえると助かります。

序章

「俺は俺の正義を貫く!」「きにいらなえ奴は容赦しねえ」

そう青年は口にしたすと、自分の部屋のサンドバッグを叩きまくる。

「ドン、ドン、ドン」部屋の内に鈍い音がこだまする。

彼の名前は斉藤剣人、都内に住むごく普通の高校生である。

サンドバッグを無心で叩きまくる剣人は少し疲れてきたのか

だんだんそのサンドバッグを叩く速度が、スローテンポになっていく。

そして、その動きがピタッと止まった。

「ちっ」と彼は言うと、自分の部屋をでて1階の台所へ向かった。

彼は台所にある冷蔵庫を開けると、スポーツドリンクを取り出し

蓋をあける。「ゴク、ゴク、ゴク」「プハー」一気にドリンクを飲み干した。

するとまた、階段を上り2階の部屋の自室へ戻る。

「ドカツ」と言う音を立てて彼はベッドに寝転がった。

手は頭に組まれている。

(俺は俺の正義を貫きてゝどんな悪者もゆるさねえ・・・だが、力が足りねえ・・・)

彼はそう心の中でつぶやく。「あの時、俺に力さえあれば・・・」と唇をかみ締めながら

言った。

時間を今日の朝にまで遡る。

日が昇り太陽の日差しが、カーテンの隙間から彼のまぶたに直射した。

そのまぶしさに目が覚めたのか、「朝か・・・」とつぶやくと、剣人はガバッと

勢い良く起き上がる。「うーねみい、かったりい・・・」と言うと

またベッドにゆっくり沈んでいく。
トントントントン」

誰かが階段を上がってくる音がする。

「コンコン！」

「バタッ！」と大きな音がするとドアが勢い良く開く。

剣人は体を一瞬びくつかせた。

「剣人くっ！、もう朝よ、学校行く時間でしょ！さっさと起きな
ー！」

母祥子が起こしにきたのだ。

「母さんは今から仕事に出かけるから、ちゃんと学校いくんだよ！
いいね！」

「わーってるよ・」と面倒くさそうに剣人は言うと、むくつと起き
上がり

頭を掻いた。

「しゃーねーな・・」

剣人はパジャマを脱ぎ捨て学生服に着替えた。

そして台所へ向かう。

台所にあるテーブルには、パンと、ベーコン、目玉焼きがラップを
かけて

置かれている。

剣人はそれを横目に洗面所へ向かった。

水道の蛇口をひねると栓をし水をためた。

水がたまると、その中に顔をザバっとつける。

「つめて！」と剣人はいった。

顔を水中で手を使って良く洗うと、さっと起き上がり、タオルで顔
をぬぐう。

タオルで顔を拭きながら、剣人は正面にある自分の顔をぼーっとみ
つめた。

「今日も良い男だぜ・・フッ」

彼の頭は少し茶色に染められていた。

髪は寝癖でところどころ逆立っていた。少し髪の寝癖を整髪剤で整える。

髪型が丁度良い形になるまで何度も櫛を通す。

「こんなもんか・・・」

剣人は満足そうな顔をしている。きまったらしい。

剣人の頭はもともと短髪のため、すぐ髪の癖はなおった。

前のほうだけ少し上に吊り上げたかんじでまとまっている。

「フーンフーン」

剣人は髪がきまったらせいか上機嫌である。

台所へ向かい、パンにベーコン、目玉焼きを重ねるようにしておく
挟み込みそのまま囓り付く。

「うめえ・・・」モグモグ・・・ンクツ」

一瞬で朝食をたいらげた。

「ピンポン」と玄関のチャイムの音が鳴り響く。

「ん？」

剣人は外の様子をインタホーンのモニターで確かめる。

そこには幼馴染の竹下雫が映っている。

雫の髪の色は黒色で、髪を肩までで伸ばし、自然に流していた。
快活で可愛いかんじの女の子である。

モニターをオンにすると

「雫、おは、もう行くから」と剣人は言った。

「うん、早くしてね、急いでね、3分遅れたら先いくからね！」

「しゃーなーなー・・・」

そういうと、剣人は急いでトイレで用を足すと、少し小走りに玄関
に向かった。

「ふっ、かったりい・・・」

剣人は靴を履くと玄関を開けた。

「おはよう剣人！」

「あんたいつもトロイよ！」

「うっせーな・・・そんな遅れてないだろ」

「それもそうね！」

雫はそう言つと学校に向かい歩き始めた。

リーマンや学生が眠たそうではあるが、忙しそうに会社や学校へ向かう姿が

あちこちにみえる。

雫と剣人は並んで歩いていた。

「雫よ、お前、昨日出た英語の課題やったのか？」

「もちろん！」

「おお、さすが雫様だ、後で俺にみせてくれない？コピるから」

「またあんた宿題やってないの？何度目よ・・・」

呆れ顔で雫は言つと。カバンをごそごそし始めた。

「仕方ないなあ・・・次は自分でやりなよ」

「はい！」と言つと剣人にノートを手渡す。

「おお、さんきゅー！ー！さすが雫様だ、GOD！」

剣人は都合よくそう言つと、ノートを自分のカバンにしまいこむ。

「持つものべきは幼馴染だよな」と剣人は言つた。

しばらくすると二人は学校に着いた。

門をくぐりぬけ構内に入つていった。

「雫おはよ、今日も剣人君と一緒に登校か、仲いいね」

と巴が声を二人にかけた。

「おはよ、そんなんじゃないよ、ただ家が近いから一緒になるだけだよ！」

雫は少し恥ずかしそうに、しかし力強く言い切つた。

木田巴は雫の親友である。

メガネをかけ、青色の掛かった髪を背中あたりまでを伸ばして、少し清楚なイメージのある女の子である。三人とも同じ教室のクラスメートである。

3人は一緒に教室に入る。

「おはよー零ー！」

「おはよー」

「おはよー巴」

各々の友達から挨拶がとぶ。

「おう、剣人、おはよー！」

そう剣人に挨拶したのは親友の高木である。

「よっ！」

「剣人、お前この間貸した漫画いつ返してくれるんだよ」

「あ、あーわりいあれまだ読んでる途中なんだよ、そのうち返す！」

「ならいいよ、それよりさあ、今日体育柔道あんぜ」

「だるいよな・・・」

「まじか、俺柔道着忘れたぞ・・・」

「どうすっかなあ・・・」

剣人はそう言うのと、ため息をついた。

「斉藤君・・・」

後ろから誰かが声をかけてきた。

クラスメートの田中俊也である。

彼は少し大人しい感じの色白のメガネをかけた男子である。

「斉藤君、俺ね、ちょっと体の調子悪いから、見学するんだ。

もしよかったら、俺の柔道着貸すよ」

「おおおお、田中いいのか！すまん、マジ助かる！」

剣人は調子よく答えた。

「うん、いいよ、授業終わったら、俺の机の上にも置いてくれればいいからさ」

「田中お前って言い奴だなあ・・・」

そいうと剣人は田中にハグをした。

「キンコンカンコーン」

始業の鐘が構内に鳴り響く。

その鐘の音を聞いても、みんな思い思いに好きなことをしている。しばらくすると、「ガララ」と教室のドアが開いた。

みんな焦ったように、各々が席へ戻りはじめる。

このクラスの担任鬼塚がやってきたのだ。

鬼塚はこの学校で1・2位を争うほど、怖い先生である。

「お前らさつさと席につけ！」

鬼塚は怒鳴りたてた。

半そでに短パン、足はサンダル、背は高く手は毛深く足もすね気がぼーぼーと生え

眉毛もかなり太い。ゴリラに似ている。

「よし！じゃあホームルームを始めるな」

「出席とるから、大きい声で答えろ」

鬼塚点呼をとり始めた。

「太田、井上……」

次々と名前をよんでいく。

「竹下」と雫もよばれる。

「はい！」と雫は快活に答える。

「斉藤！」

「はい！」

剣人がそう言うと、鬼塚は「はいじゃねーだろ、はいと言え！」

「挨拶もできんのか、こら」

剣人に怒鳴りつけた。

「すみませんでした、はい！」

剣人は言いなおした。

「ちっ」と鬼塚は舌うちをする。

「上田」「高下」

「田中」

「はい……」

田中はぼそつと答える。

「田中〱お前めしくつとるんか」

「もつと大きな声ださんか！」

鬼塚がまくしたてる。

すこし泣きそうな顔で田中は「はい、（ぐず）」と答える。

「ああ、もういい、泣くなよな」と鬼塚は少し罰が悪そうに言った。
「クスクス」と笑い声があちらこちらから聞こえる。

「じゃあお前ら！今日は3限は体育だ、男子はまた俺と体育の授業であうことになるな

柔道をするから、体育館に集合するように！時間遅れないようにな！」

そう言うとき鬼塚は教室を後にした。

「今日柔道か、鬼塚とまた顔あわすのか、鬱だな・・・」と男子生徒の一人が言った。

1限は英語だった。

「キリーツ、レイイ！着席」

その声で生徒達は立ち上がり礼をし、またイスに座る。

英語の教師は赤木薫、女教師である。

髪は黒髪でソバージュがかかっていて、白いブラウスに黒いスカートをはいている。

「みんな、宿題やってきましたか？」

「じゃあ集めます」

「後ろから回して、前の子に渡して言ってね」と赤木はみんなに言った。

剣人も学校へきて、すぐに雫の丸写ししたノートを前に渡した。

「よし、みんなちゃんとやってきているようね」

「さあ授業始めますね、えーっと先週は・・・」

「this is・・・」

赤木は授業を進行しはじめる。

授業が始まると剣人は（さてと、寝るか・・・）と心でつぶやくと

英語の本を立てて、枕代わりに筆箱をあごの下に置き、鉛筆を持った格好で寝始めた。

目が覚めると英語の授業はすでに終わっていて、次の古典の先生が着ていた。

「キリーツレイ、着席」

その声にあわせて剣人はふらふらとたちあがりまた座った。

（かったりい・・・）（また寝るか・・・）

剣人はまた眠りについた。

2限の授業も終り、休み時間を迎えていたが、剣人はまだ寝ていた。

「剣人！もうすぐ3限よ！男子は柔道でしょ！体育館に早く行きなさいよ！」と雫が怒鳴る。

「うーん、もう朝か、母ちゃんもう少し寝かせてくれよ・・・ZZZ」と剣人はブツブツ言っている。

どうやら家で寝てるのと勘違いしているようだ。

「剣人ここは学校よ！しっかりしなさい！」と雫は言う

「ペシッ」と剣人の頭をはたいた。

「いってえええ」

「あれ・・・」

剣人はやっと目を覚まし、現状を把握した。

急いで田中に借りた柔道着を持つと、男子の着替え部屋に向かった。

みんなはすでに着替えが終わっていた。

「剣人遅いな」もうすぐ授業はじまるぜ

急がないとやべーぞ、何せ鬼塚だからな、遅れるとどっいう目にあうやら・・・」

そう言つて、高木が剣人を脅す。

「確かにやべー・・・速攻着替える」

剣人はそう言うと、急いで着替え始めた。

着替え終わると、高木や他の友達と剣人は体育館にやってきた。入り口につくと、ほぼ同時に「キンコンカンコーン」と3限の授業の開始の鐘になった。

「ギリギリセーフだな・・・」と剣人は言った。

体育館に入ると、ジャージ姿で隅に座っている田中の姿がみえた。その隣には頭が金髪の佐伯文也とその佐伯の友達4人が座っていた。生徒達は好き好きに友達としゃべったり、畳の上で受身を取ったりして遊んでいた。

和やかな雰囲気が体育館を包んでいるが、間もなくしてその雰囲気は一変した。

鬼塚がやってきたのである。

「よしおまえら、授業始めるぞ！」

「とりあえず二人ずつ組め！」

「今日はその二人組で試合してもらおうぞ」と鬼塚は言った。

「ええええー」と男子生徒がそれを聞いてざわめいた。

「いきなり試合かよ・・・」と剣人は言った。「だよな〜きついな」と高木も同調した。

周りの生徒も似たような気持ちであった。

「お前らーちゃんと真面目に試合しろよ、これは点数に反映されるからな」と鬼塚が言った。

それを聞いた生徒達は少しやる気がでたようだ。

「よし・仕方ない・俺の実力をみせるまでだ・・・」

剣人は静かに高木に闘志を燃やす。

「あはは・・・お手やらかに頼むよ・・・剣人」

高木は少し不安そうに半笑いを浮かべている。

剣人は運動能力は抜群で、スポーツには自信があった。当然体育も得意としていたが、柔道はド素人であった。

試合が始まると、剣人は欠伸をしながらぼーっと他の生徒の試合を

みつめる。

それと対象的に高木は真剣に試合を見ていた。どんだん他の生徒が試合をこなしていった。

しばらくすると、「次ー！高木と斉藤！」と鬼塚が言った。

それを聞いて高木はびくつとした。

「来る時が来たか」と高木は落胆気味に言った。

「うし！」

一と言うと剣人は立ち上がる。

「はー自信ないな・・・」

そう言いながら、高木は向こう側に猫背気味に歩いていった。

「礼！」と鬼塚が言うと、二人は向かい合って軽くお辞儀をした。

「はじめ！」

「うおおおおおお」

剣人は声をあげると、高木に掴みかかった。

高木も剣人の肩を掴んで抵抗する。

「おりゃあああ！！」

剣人が声をあげた瞬間

高木は空中を舞ってるのを感じた。

「ビタン！！！」

すごい音が体育館に響き渡った。

「一本！」と鬼塚は言った。高木は天井見ながらボー然としている。周りから「すげえええ・・・」と声が聞こえる。

「それまで！」

鬼塚のその声を聞くと、高木は我に返り立ち上がった。

「よし、良い一本背負いだっとな、斉藤なかなかやるな」と鬼塚は言った。

「ええ、この日のために激しい特訓をしてきましたから」

剣人は調子よくそう言った。

「ほお」と鬼塚歯少し目を細めて言った。

無論それは嘘である。

前に柔道の本をチラツと見たのを思い出して、真似ただけであった。

試合はその後も続いていたが、試合が終わった剣人は暇そうにしていた。

少し眠気もきていた。

「キンコンカンコン」

授業の終りを告げる鐘が聞こえる。

「よしそれまでー！」と鬼塚は皆に言った。

「じゃあ今日の授業はこれまで」

「次回はサッカーやるから楽しみにしてろ」

「解散！」

鬼塚はそう言うのと、体育館を出て行った。

剣人は、綺麗な一本背負いを決めれたのが嬉しかったのか、上機嫌である。

「剣人強いな」と高木は言った。

「ほんとだよな、剣人まじすごいよ」と他の友達も口々に言う。

「それほどでもねーよ！」

剣人は少し浮かれていた。

着替えが終わると

「じゃあ後で」と剣人は高木にいうと、「おう」と高木は答えた。
そして剣人は自分の教室に戻っていった。

「えーつと田中は」

教室をきよきよとして見渡す。

「いないな・仕方ない」

剣人はそうつぶやくと、借りた柔道着を田中の席の上に置いた。
そして、少し田中に礼が言いたくて、構内を散策してみることにした。

「いないなあ・・・取りあえずトイレにいくか」

1階のトイレに足を運ぶ

ドアを開けようとすると、中から田中の声が聞こえてきた。

「田中」

剣人は声を掛けようとドアを開けると

そこには田中と佐伯そしてその仲間4人がいた。

「ん？」と佐伯は言う。「何しにきたんだ？あ？」と剣人に威圧的なおももちで言ってきた。

「いや、俺その田中にさ。柔道着の礼を言おうと思ってさ」

「礼だ？こいつにか？ウハハハ」

佐伯は憎たらしい顔で笑った。

佐伯の仲間も「ヒヒヒヒ」とせせら笑う。

田中の顔を良く見るとなんか殴られたあざのようなものが出来ている。

それを見て、「あんた等何してるんだ？」と剣人は少し怒りをあらわにして言った。

「みてわかんねー？田中と遊んでるんだよ」と佐伯が言う。

「そうだよな？みんな」

「そうそう」

佐伯に同調するように仲間も笑いながら頷いた。

「俺には田中が楽しそうには見えないんだが・」

それを聞くと、佐伯の顔が鬼のような形相に変わって言った。

「ああ？ごちゃごちゃうるせーんだよ、そうだよ、遊んでるんじゃないよ」

田中をいじめてるんだよ、それがどうした？文句あるのか？あ？」

佐伯は開きなおり剣人を威圧してくる。

「文句あるにきまつてるだろー！！！」

剣人は佐伯に飛び掛った。

「ドカツ」と右ストレートが佐伯の右頬に炸裂する。

「ぐはっ！」と声をあげ佐伯は壁に倒れこんだ。

「コラアなにしゃがんだ」

他の4人が剣人に襲い掛かる。

「羽交い絞めにしてフクロにしる」と佐伯が言うと、二人が剣人の右腕と左腕を抑え、

佐伯が剣人の腹にパンチを数回当てる。

「ぐふ」と剣人は言った。

その後は殴る蹴るの一方的な展開になった。

田中はただおびえながら、その間片隅に縮こまっていた。

顔が切れてあちらこちら出血した剣人は、腹のダメージがあるせいか地面に倒れこむ。

「ハハハハハ、ざまあねーな」

「よし行くぞ、おまえら」

佐伯はそういい残すと、トイレを後にして去っていた。

田中は地面に伏す剣人に駆け寄る。

「ごめんねー・俺のせいで・斉藤君・」

田中は泣き声で言った。

「おまえのせいじゃねーよ・」

剣人は軽く微笑みながら言った。

しかし、その目は笑っていないかった。悔しさと殴られた痛みで顔は歪んでいた。

「くそ・俺にもう少し力があれば・あいつらなんか・」

「く・・・そ」

「・・・・・」

剣人は消え入るような声でそういうと、眠るかのようにゆっくり、まぶたを閉じていった。

「!??」「剣人君!どうしたの!しっかりして!」田中が必死に呼びかける。

「・・・・」剣人の返事は返ってこなかった。

「誰かきてー!誰かー!」田中はトイレのドアを開け廊下にとどくと

大声で助けを求めた。

胎動（前書き）

時々修正いれることがあります。

胎動

剣人は夢を見ていた。

剣人はどこかの川の前に佇んでいた。

川には濃い霧がかかっており、かなり視界が悪く

向こう岸の影がかるうじて、ぼーっとみえる程度だ。

「ん？」「ここはどこだ？川のようではあるが・・・」

足元を剣人を見ると

地面には土や砂利や雑草そして、無数のタンポポが生えていた。

「この景色・・・何かで・・・」「んー」「うーん・・・」「・・・」

「

剣人は何かひつかかるのか、必死に何かを思い出そうとしていた。

「！」「まさか・・・」と剣人は言った。

「もしや・・・これは・良くテレビの心霊特集とかで出てくる、三途の川って奴か？」

「ふ・・・まさかな・・・」剣人は動揺は隠せない。

しばらくすると、向こう岸から、どこかで聞いた事がある声がしてきた。

「剣人・・・」「まだこっちにくるのは70年早すぎるぞ・・・」

とその声の主は言った。

「うん？なんか聞いた事あるな・・・」

「！？・・・あれ・・・この声って3年前に死んだじっちゃんの声じゃ・・・」

「

そう言うのと、剣人は背筋に冷たい物が走った。

「ちょ・・・俺・・・まさか・・・死んだんじゃ・・・？」

剣人は目を白黒させている。

「確か、佐伯達に俺ボッコボッコにやられたけど、死ぬほどじゃないよな・・・」

「まさか、脳内出血でも起こしたのかな・・・いやいや・・・内臓破裂・

「？いやいや・・・ガン？・・・」と剣人は死因を考えながら、ぶつぶつ言っている。

しばらくすると、剣人は背後に何かの気配を感じた。

「剣人・・・」

真後ろから不気味な声がする。

「じ、じつちゃん！まだ俺はそっちへ行くつもりはねえ！」と剣人は言った。

剣人の肩を祖父らしき手が掴んだ。

その瞬間・・・

「~~~~」

「おりゃあああああ」と剣人は反射的にその手を獲り一本背負いの体勢に入っていた。

その手の持ち主は川原の地面に強烈に叩きつけられた。

「や・・・やっちまった・・・つい反射的に・・・」と剣人は言った。

「アイタタタ・・・」

「おんどりや・・・年寄りになんばしよつか！」と声の主は声をあらげてそう言った。

「ごめん、じつちゃん・・・！」と剣人は言う

「わしはお前に気安くじつちゃんなどと言われたくないわー！」とその主は言う

剣人に飛び掛り、顔面にパンチをいれてきた。強烈なパンチだ。

「うわああああ・・・いってえええ・・・ぐは」

「何つつ強烈なパンチだよ！！！」

「この妖怪じじい！！！」

「いい・・・・・・」

「い・・・・・・」

「ん？」と剣人は言う

「あれ？ここどこだ・・・じつちゃんは・・・」

「俺確か、三途の川で・・・」

剣人は周りをきよるきよる見渡した。

「ん？ここどこかで・・・学校？保健室・・・」

剣人は顔を触ってみた。

「イタッ！」

顔にはガーゼが3つくらいテープで張られていた。

「この痛み・・・」

「もしかして・・・」

「さっきのは夢・・・」

「・・・」

やっと自分の状況を剣人は把握したのか

「・・・お、俺生きてる・・・！！！」

「よかったー、俺が死ぬわけないよな！！ははは夢か！」

剣人は立ち上がり、ベッドの上で喜びのあまり、小躍りし始める。

その騒がしい音に気がついたのか、カーテンの向こうから誰かが近づいてきた。

「ジャラー」

カーテンが開く音がする

「斉藤君、気がついた？」

そう声を掛けてきたのは、学校の保険の先生常盤ひなこである。

長い黒髪にパチっとした大きな瞳保健医の白いつなぎを着ており、その下にクリーム色のブラウス、黒っぽいスカートがみえる。

足はすらっと長く、スタイル抜群で美形の20代の女性である。

「斉藤君、大丈夫？あなたトイレで倒れてたのよ、心配したわよ・・・」

「顔はあざだらけだし、出血も所々出てたし・・・」

「でも、元気そうね。立てるようだし」

「よかった」

ひなこはそう言うと、少し顔が緩み優しい笑みを浮かべた。

「それにしても、その傷、ケンカでもしたのかな？」。

「いえ・勝手に転んで・・・」

剣人は下手な言い訳をする。

「ふーん・・・」

ひなこは疑いの目で剣人を見つめる。

「まあ、いつか」

「とりあえず、目を覚ました事を担任の鬼塚先生に伝えるわね」

「ちよつと待っててね」

そう言い残すと、保健室を静かに出て行った。

「ふー・・・」

剣人はそう深くため息をつく。薄い布団を顔の辺りまでひっぱり、体を右向きにしてベッドに横になった。

「ピンポンパンポーン」

「鬼塚先生、鬼塚先生、至急保健室まできてください・・・」

しばらくすると、ひなこ先生の声で鬼塚への呼び出しの放送が流れた。

「あいつがくるのか・・・面倒くさいな・・・はあ・・・」

剣人はため息をついた。

数分後、ひなこが帰って来た。

「ガラッ」

「斉藤君、もうすぐ先生くるからね、横になってまってね」

ひなこはそう剣人に言っていると、机のイスに座り足を軽く組むと、ペンで何かを記帳しはじめた。

「ガラガラッ！！！！」 「ドカ」

しばらくすると、力任せに保健室のドアを開ける音がした。

「斉藤！！！！」 「大丈夫か！！！！」

鬼塚の荒々しい野太い声が保健室に響き渡る。

「ジャラー!!」 「おおここにいたか!」

「大丈夫か?」

「剣人・大丈夫?」 「剣人くん・」 「斉藤君・」

（ん?この声は・）

（雫!巴、田中也きたのか）

（・・・）

（仕方ないなあ・）

（寝たふり決め込もうと思っていたが、あいつ等が来たんじゃ・
そうもいかないな・）

剣人は意を決したように起き上がった。

「ん?みなさん、お揃いで・」

雫は起き上がった剣人をマジマジとみている。

田中と巴も心配そうに剣人を見つめる。

剣人はそんな三人をみて

「ほ、ほら・!大丈夫!余裕だぜ、心配ないよ、ほら!」

立ち上がり、右腕を軽く回し、ベッドの上で屈伸運動をしはじめた。

「ふう・・・」

「よかった!」

「ほんとによかった・・・」

雫は剣人の元氣そうな姿をみて、安堵したようだ。

巴も笑顔がこぼれている。

田中はその二人とは対象的に泣きそうな顔をしていた。

「お!斉藤!元氣そうだな!!あんまり心配かけるなよな!」と鬼塚が言った。

「少し裂傷やアザがあるけれど、問題ないみたいですよ、鬼塚先生」

「そ、そうですか、ははは、剣人よかったな!」

ひなこに声をかけられた鬼塚は少し顔を赤くしている。

（ははーん・鬼塚の野郎、ひなこ先生に・）

（しかし美女と野獣・・・）剣人は思った。

「剣人！！あんなにやってたのよ」

「いや・・・別になんにも・・・」

「何にもないわけないでしょ！」

「いやそれは・・・」

剣人は雫にどう言おうか迷っている。

「まあまあ、斉藤にもなんか事情があるんだろ、そのへんは担任の俺が後でじっくり聞いとくから」と鬼塚は言った。

「そうですか・・・分かりました・・・」

雫は気持ちを抑えるように答えた。

「まあ、斉藤も元気そうだし、良かったじゃないか」。

「ああ、そうそう、剣人、あんなが出れなかった授業のぶん私がコピーしといたよ！」

雫は剣人にコピーした紙を渡した。

「おお、ありがと！雫助かるわ」

「あんだ感謝しなさいよ、田中君に！」

「田中君倒れてるあんだをみつけて、助けを呼んでくれたのよ！」

田中は突然自分に話題を振られ少し、オタオタしている。

「そんなあ・・・とんでもない・・・僕が・・・」

田中は真相をいいかけたが、剣人の目配せをみて、言葉をとめた。

しばらくすると、蛍の光の音楽が構内に流れ始める。

鬼塚はその音楽を耳にすると

「おお、もうこんな時間か・・・」

「じゃあ、もう学校もそろそろ門を閉めるし、お前ら帰れ！」と鬼塚は3人に言った。

「そうですね・・・私帰ります、巴もかえろ！」

「そうだね・・・じゃあ・剣人君、私も帰るね」

雫の呼びかけに巴はそう答えると、

二人とも先生にお辞儀をし、保健室を出て行った。

「じゃあ僕も帰るね、また明日・・・」

もじもじしながらも、田中も帰ることを剣人に告げた。

「おう、また明日！」

田中も先生達にお辞儀をすると部屋を出て行った。

鬼塚は三人が出て行くのを確認すると、「ふう」とため息をついた。

しばらく沈黙したのち、真剣な顔で剣人をみて言った。

「さてと、斉藤、俺になんかいうことあんだろ？」

「・・・」

剣人は黙って目を下に向けている。

「あ、鬼塚先生、私ちよつと職員室へ行つて来ます」

「斉藤君の事宜しくお願いします」

「はい、ま、任せてください！！どうぞどうぞ！」

ひなこの突然のその言葉に、鬼塚が少しどもりながら答えた。

ひなこ先生は鬼塚に笑顔で軽くお辞儀をすると、保健室を出て行った。

「べ、別に、何にもないですよ・・・」と剣人は言った。

「そうか？その顔の傷、誰かに殴られた後にしか見えんが」

鬼塚は少し息を吐くと、ベッドの横に保健室の予備のイスをもってきて、静かに座り

剣人に語り始めた。

「俺はな・・・」

「別にケンカが悪いとは思ってないぞ」

「ただ、どういいうきさつでそうなったか知りたいだけだ」

鬼塚はいつになく、真剣な目で語り続ける。

「俺は、この1年担任としてお前を見てきて、少しはお前のこと理解してきてるつもりだ」

「お前は容易く、他人と殴り合いのケン力をする人間じゃないことも分かってる」

鬼塚の話は剣人は静かに聞いている。

「そんなお前が、ケン力に踏み切ったいきさつに興味があるんだよ」

「どうだ？男同士だ、腹をわって話してみないか？ここだけの話で収めておくから、

安心して話してみる」と鬼塚が言うと

「・・・じゃあ・・・少し・・・」

剣人は鬼塚に今日トイレであったこと

田中の事、佐伯のことを話し始めた。

「ふむ、なるほどな・・・」

「田中が苛められてるのをみて、助けようと殴りかかったわけか」

「そして返り討ちにあったと・・・」そう鬼塚がいうと、剣人は悔しそうに拳を握る。

「お前なんで負けたんだと思う？」と鬼塚が剣人に聞いてきた。

「そりゃあ・・・相手のほうが数おおいし・・・」

「それは違うな・・・」

「ただ、お前がそいつらより弱かったただけだ」と鬼塚は言い切る。

剣人はそれを聞いて、納得いかない様子だ。

「え？あいつら5人いたんですよ、負けても仕方ないじゃないですか！」

「俺もタイマンならあんな奴等に・・・」剣人は唇をかみ締めながら言った。

鬼塚は静かに語り続ける。

「それでも、お前が弱いから負けたんだよ」

「数も強さのうちだ、その数の強さの前に、お前は完膚なきまでに負けたんだよ」

「お前は弱いのに、自ら負け戦に飛び込んでいったんだよ」

「そして・・・」と鬼塚は言うと、剣人を厳しい目で見つめた。

「その誰かを助けようと挑んだケンカに負けた。その後

その誰かはどうなる・・・？」

それを聞いて、剣人は少しはつとした。

「誰かのためにケンカをするのなら、絶対に勝たなければならない
！」

「俺はそう思ってるよ」と鬼塚は静かに言い放った。

剣人は静かに俯いて色々考えていた。

その剣人の様子を鬼塚は見て

「ま、まあ・・・あれだ・・・俺も偉そうなことだったが、ケンカで負けることも

何回もあったし、あんまり気にすんな」

（鬼塚でも負けることあるのか・・・）

「あんまり佐伯達がひつこいようなら、俺があいつ等こっぴどく叱ってやるよ」

「俺の強さはこの腕力とそして担任という地位だ！」

「奴等には絶対負けなйдらう、アハハハ」

（そりゃ・・・あんた・・・あたりまえじゃん・・・）

剣人は呆れ顔で鬼塚を見た。

「そつえば、お前、今部活何にもしてないよな？」と鬼塚はきりだしてきた。

「はい、そうです」と剣人は答える。

「あれだけの運動センスあるのにな、もったいよな」

「実はな、俺んち柔道教室やってるんだよ、最近門人減っててなあ・・・」

「学校の柔道部もいいけど、俺のそこはすごいぞ、強くなれる事間違いない」

「お前も力持て余してそうだし、なんなら、一回覗いてみないか？心身共に強くなれるぞ。まあお前の気分次第だがな」

鬼塚はそう言うのと、おもむろにポケットから、くしゃくしゃの紙を取り出す。

「ほら、これだよ」鬼塚はその紙を剣人に手渡す
(なんだこれ・・・鼻紙かよ・・・)

剣人はその紙を引き伸ばしてみた。

鬼塚柔道道場

そこのおねーさん！最近お腹はたるんでいませんか？

そのこのメタボのおっちゃん！うちに来れば健康になれるよ！

この言葉にピンと来た人は、こちらへお気軽に！

t e l x x x x x x 住所・・・・・・・・・・

剣人のその紙を呆然として眺める。

(そりゃ・・・門人減るわな・・・てかこれで来る奴って・・・)

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあ・・・き・・・気が向いたら・・・」

剣人は取りあえず、そう答える。

「そっかそっか」「まあ気が向いたらいつでもきてくれ、歓迎するぞ」

「じゃあ話は以上だ」

「長々と話してすまなかつたな、もう日も暮れかかってるしお前も帰れ、なんなら俺がうちまで送ってやるうか？」

「い・・・・・・・・・・いいいいいえ、大丈夫です、ピンピンしてます。」

平気です！」

剣人は少し焦りながら靴を履き、ベッドから立ち上がり、保健室の出口へ向かうと、鬼塚の方を向くと

「先生、今日は色々ご迷惑おかけました。ありがとうございました」
そう言うのと鬼塚にお辞儀をし、足早に保健室をでた。

「ハア・・・ハア・・・」

剣人は息を切らせながら、全力疾走で校門まで走った。

門まで来ると、足を止め、後ろに誰もいない事を確認すると

「プハー・・・冗談じゃねえ・・・あいつに付き添われて家に帰るとか勘弁・・・」

額は汗びっしょりである。

剣人は帰宅すると「ただいま・・・」と少し疲れた様子で言った。家には明かりがついておらず、無人のようだ。

「母さんまだ帰ってきてないみたいだな・・・」

玄関で靴を脱ぎ、階段を上がっていった。

そして自分の部屋のドアを開け、電気をつけた。

明かりは部屋全体を照らした。

8畳の部屋には、液晶TV、机、テーブル、ベッド、下が固定されている、上へ伸びるかんじの

簡易サンドバッグ、ノートパソコンなどが所狭しと置かれている。

剣人は携帯を開き、メールをチェックし始めた。

メッセージが3件入っていた。一つずつ剣人はチェックし始める。

高木：「剣人大丈夫か？俺体育の後調子悪くなってるな

早退しちゃったんだよ、お前倒れてたんだってな、後で友達から聞いてびっくりしたよ

帰ったら、電話くれよ（・・・）

（後で電話かけるか・・・）

どっかの宣伝メール

（なんだこれ、うざいな、見るまでもない、削除！）

雫：「ひとりあえず帰ったらメールください。」

（仕方ないな・・・送っとくか）

剣人：「今帰ったよ、今日は遅くまでありがとな、そのうちなんか

礼するよ」

「まあこんなもんか・・・」と剣人は言うと、雫に送信した。

「次は・・・高木に電話しとくか・・・」

携帯を打ち始めた

「9 x x 2 x 6つと・・・」

「プルルル」「プルルル」「カチャ」高木が電話に出た。

「お、剣人か、大丈夫か？びっくりしたよ」

「いやーわりいわりい、ちょっと色々あったんだよ、大丈夫！元気だよ！」

「まあ詳しい事はまた学校で明日話すから」

「そつかそつか、まあ元気そうだし、よかった！じゃあ明日また学校でな」

「おう、また明日！」「ツー」

剣人は疲れていたので短めに電話は終わらせた。

「ふっ・・・疲れた」と剣人は言うと、ベッドに仰向けに寝転がった。

「なんか色々あったな・・・」

剣人は目を閉じ、頭の中で今日有った事を回想し始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「くそっ！」

突然、剣人はそういうと立ち上がり、上着を脱いで壁にかけるとサンドバッグに近寄り叩き始めた。

「ドン、ドン、ドン、ドン」乾いた音が部屋に響き渡る。

（俺がもう少し強ければ・・・5人くらい・・・）

（俺は俺の正義をつらぬいた・・・が・力が・足りなかった・・・・・・）

一心不乱にサンドバッグを叩き続けている。

（しかし、鬼塚のやろう無茶言ってくれやがる・・・）

（まあ・アイツのいい分も一理あるけど・・・）

(うーん・・・)

(そういえば、あいつんち柔道道場やってるって言うってたな・・・)

(しかしまともに教えられるのか・・・あの紙みるとな・・・)

(でも、柔道でもやれば・・・相手が5人とかでも勝てるんかな・・・)

(うーん・・・)

(・・・でも別に柔道じゃなくても・・・空手とか・・・テコンド
ーとか・・・合気道とか・・・

斗 拳とか・・・)

(・・・)

剣人は色々頭の中で考えながら、サンドバッグを叩く。

しかし、だんだん、手が重たくなってきたのか

サンドバッグを叩く手を止めた。

「ああ・・・ごちゃごちゃ考えても仕方ないわ!!」と剣人は頭を両
手でゴシゴシ搔くと

台所へ向かい、冷蔵庫を開けドリンクを取ると、一気にごくごく飲
み干した。

「ピンポーン・・・」チャイムの音がする。

(ん？母さん、帰って来たか、ああ、腹減ったな・・・)と剣人は思
うと

一応インターホンの画面で外を確かめる。

画面を見ると、そこには雫が立っていた。

「あれ、雫・・・なんだ今頃・・・？」

剣人はホンをオンにした。

「ん？雫、どうした？」

「こんばんわ、剣人、大丈夫？」

「おう、大丈夫だ、なんか用か？」

「あのさ、ちょっと肉じゃが作りすぎて、余っちゃってね・・・」

「お母さんが剣人にもって行ってあげたらっていうから、持ってきた
ただけ・・・」

雫の家は剣人の家から左に三軒目である。

剣人は肉じゃがの文字を聞いて、唾が口にたまるのを感じた。

「おおおお、そっか、ありがとな、じゃあ・中はいる?」

「うーん・・じゃあ少し」と雫は答えた。

剣人はホンを切ると、玄関へ向かいドアを開けた。

「雫すまねーな、じゃあ・中はいつて」

「うん、じゃあ、お邪魔しまーす」

そう言う雫は玄関に入っていった。

「台所きてくれる?」

剣人は言うつと、先に台所のほうへ向かう。

雫も後ろからついていく。

「ちよつと待つてくれな!」

剣人はそういうつと、少し乱雑になっている台所を片付け始めた。

雫はその様子を静かに見ている。

「よし、このイスに座つてくれ」

「うん、ありがと、はいこれ!」

雫はそう言うつと、ベージュの布に包んで持ってきた肉じゃがを剣人に手渡した。

剣人は布を静かに取り去り、中のラップに包まれた肉じゃがを見る。

「おお、これが肉じゃがというものか!なんて旨そうなんだ!」

「あはは、剣人の口に合うか分かんないけど、たぶん美味しいはずよ!」

剣人は丁寧に隙間なく包まれたラップを外し、肉じゃがをテーブルに置いた。

「いただきますーす!」と剣人はいうとガツガツ食べ始めた。

「んまつんく、ごく、雫!お前料理うめーな!」。

「あたりまえよ!」

雫は剣人がとても美味しそうに食べてるのを、微笑みを浮かべ見つめている。

「あーうまかつた。最高!」

剣人は全部食べてしまった。

「雫、ありがとな」

「うん！」

剣人が爪楊枝を使って歯を掃除している。

雫はさつきまでの笑顔は消え、テーブルを静かにみつめている。

剣人はその様子をみて

「ん？雫どうした？」

「別に何にも？」

「何にもないんだけど・・・ちょっと気になって・・・」

雫は少し言いくそうにしている。

「剣人さあ・・・今日なにがあつたの・・・？」

「ん？別に・・・」

剣人は少しはぐらかすように言った。

雫は思い切つて聞いてみる。

「剣人・・・苛められたんじゃないよね・・・？」

剣人は雫の意外な言葉に気後れした。

「はあ・・・？俺がか・・・？そんなわけねーよ！」

「な・・・なんだ・・・雫そんな事気にしてたのか・・・！アハハハ！！」

剣人が笑っているのをみて雫はムツとした。

「な・・・な・・・何よ！！それでも心配してたんだからね！」

「ああわいりわいり！でも、俺が苛められるはずないだろ？俺だぞ

？俺様だぞ！」

「はあ・・・心配して損した・・・」

雫は気が抜けた様子で息をふくと吐いた。

「なんだ・・・やっぱりそうよね・・・そんな事あるわけないか・・・」

雫は自分に言い聞かせるよう言った。

雫は少し安堵したのか、力が抜けた感じで立ち上がる。

「ふー・・・じゃあ、剣人、私帰るね」

「ちょいまちな！」

剣人はそう言うと、急いで弁当を丁寧に洗い蓋をし布で包み雫に手渡すと

「ほんとにありがとな・正直いうと、少し落ちこんでたんだ」

「でも雫と話してたら、元気になったよ、ありがとな!」

剣人のその意外な言葉に雫は少し顔を赤くした。

「そつか・・・よかった・」

剣人は雫を玄関まで見送る

「じゃあな!」

「うん」

「じゃ、お邪魔しました」

「おやすみ〜また明日」

雫は自分の家へ帰っていった。

剣人はその夜、ベッドに横になり悩んだ。

(やっぱ悔しいぜ・・・)

(俺が例えどんなに武道や何か学んだとしても・・・
やっぱ一人じゃ・・・数の強さには勝てねえ・・・)

(くそ・・・)

(相手がゲームカック奴でも俺は勝てないのかよ・・・)

(それが、世の中の道理っていうんなら、おかしいぜ・・・)

(俺は俺の正義をつらぬきてえ・・・でも力が足りねえ・・・)

(どうすりゃいいんだよ・・・)

(くそ・・・くそ・・・くそ・・・)

剣人はいつになく頭は混乱していた。

自分の非力さに絶望さえしていた。

(~~~~~)

(ああ・・・むかつく・・・もう寝るか・・・)

剣人はいつの間にか深い眠りについた。

深夜2時、草木も眠る丑三つ時。

外は静まり返り、人通りがない。

風はざわめき、月は怪しい光を雲の間から差し込む。

剣人はぐっすり寝ていた。

その様子を暗闇から見ているものがいた。

闇の深淵から湧き出たその謎の物体は、剣人の寝姿をみつめていた。

その黒い物体は、剣人のにじり寄る。

そして、ベッドをつたい、剣人の足元までくると

足に被さる。

その物体は伸縮を繰り返しながらも大きくなり。

とうとう剣人の全身を覆い尽くした。

（ん……）

剣人は苦しそうに寝言のような言葉を発した。

その謎の物体は、剣人の口から静かに体内へ侵入していった。

「ふあゝふ……」雫は目が覚めると大きな欠伸をした。

カーテンの隙間から、日差しが差し込んでいる。

静かに上半身だけ起き上がると、左の鏡台の棚に置いている時計を
体を少しねじって見る。

時計はAM 6:50を映し出していた。

雫はそれを目にすると、ベッドから這い出て

鏡台の前の椅子に座りブラシを手にとると、髪を軽く梳き始めた。

「ふー……眠い……」

「顔あらわなきや……」

雫は静かに立ち上がり、自室のドアを開け、洗面所に向かった。

「バシャ・」

顔を軽く洗うと、タオルで水を拭きとり、洗面所の鏡を見ながらま
た髪を梳き始める。

「おはよゝ、雫」

雫の父守が起きてきた。

「おはよゝ……」

雫は少し眠そうに返事をする。

「おはよう」

しばらくすると、母敏子も起きてくる。

それほど広くない洗面所は、3人くると、ごった返した状態になる。雫はそれを嫌ってか、また自室へすすご戻っていった。

雫は制服に着替えると、台所へ向かった。

台所の調理場には敏子が立っており

忙しそうにフライパンでベーコンと目玉焼きを焼いている。

トースターにはパンが3つ既に焼けていて、香ばしい匂いを漂わせていた。

「はい、パパ」

「はい、雫」

敏子はそう言っていると、あらかじめテーブルに用意した更に順番に置いていった。

「ありがとうママ」

「さんきゅーママ」

二人はそれぞれの席に座る。

敏子はダイエツト中なのか、コーンフ레이크を持つと

皿に移し、牛乳をかけ始めた。

守は食べ終わると、新聞を読み始めた。

敏子は食器の後片付けをはじめている。

そうしているうちに時間は過ぎ時計の針は7:50を刺していた。

「こりゃいかん」

「じゃママ、雫、会社に行ってくるね」

そう言つて、守はカバンを肩から提げる

「いつてらっしゃーい」

雫は紅茶を皿に置くと、父に声をかけた。

「いつてきまーす」

父は玄関の方へ歩いていった。

それをみた敏子も一緒についていった。

雫は時計が8時を刺すのを横目で見ると

自室に上がっていった。

カバンの中身を確認する。

「うん、完璧！」

玄関に向かうと靴を履き、立ち上がると

「ママいつてきまーす」

「いつてらっしやーい」

敏子は雫を玄関から見送った。

「ピンポーン」

「ピンポーン」

雫は剣人の家のチャイムを押す。

「ピンポーン」

「あれ・・・」

「誰もいないのかな・・・」

しばらくすると、ドアが開く。

「おはよー剣人！」

雫が声をかける。

「・・・・・・」

「おはよ・・・」

剣人はいつもより低調な声で答える。

「どうしたの？元氣ないじゃん」

「別に・・・？」

そういうと剣人は、ドアに鍵をかけ、門を開けると

雫を置いて、学校の方へスタスタ歩き始めた。

それを見て剣人の横に駆け寄り、横目で剣人を観察する。

（剣人、どうしたんだろ・・・いつもと何か違う・・・調子悪いのかな・・・）

（何か悪いもの食べたとか・・・）

（まさか・・・私の肉じゃがに・・・）

（そ・・・そんなわけないよね・・・私も食べたけどなんにも・・・）

（そうすると・やっぱり昨日の・・・）

雫は心配そうに剣人を見つめながら、色々原因を考えていた。
剣人は急に立ち止まった。

「雫・・・あんまりべたべたくっつくなよ・・・」

「！！？」

「くっついてないわよ！、何いつてんのあんた！」

「そうか・・・」

そう剣人は言うのと、空ろな目でまた歩き始める。

（何～～～今の～～～！？）

（何なの一体・・・）

（昨日あんなに・・・）

（どうしたんだろ・・・機嫌悪いのかな・・・）

（うう・・・）

雫は少し混乱気味である。

胎動その2

剣人と雫は教室につくと、それぞれ自分の席に座った。

教室内は生徒たちが、友達同士でしゃべったり、走り回ったりして騒がしい。

雫は剣人の方をじっと見ている。

剣人は右手で頬杖をつきながら、ぼーとした様子で窓を見ている。

「雫、おはよ！」

「雫!？」

「どうしたの？」

「ねえ、雫ったら！」

（剣人どうしたんだろ・・・？）

（・・・・・・）

「ねー！」

「あ・・・」

雫はやっと巴が自分に必死に声を掛けている事に気がついた。

「ごめん！おはよ！巴」

「どうしたのよ、雫・」

「え？」

「なんか悩み事でもあるの？」

「別にないよ・・・」

「えーと、1限は化学か・予習しないとね！」

雫はそう言くと、化学の教科書をパラパラめくり始める。

巴はその雫の様子にいつもと違うものを感じていた。

（どうしたんだろ・・・雫・・・）

「ガラッ」

教室のドアを開け、誰かが入ってきた。

「佐伯よ、お前この間あの女に声かけてたよな」

「おう、あいつのことか」

「実はもう別れたんだよ」

「ヒハハハ、どうせ振られたんだろ」

「ふられてやんの」

「違うって、俺がふったんだよ!」

「アハハハ」

「よく言うぜ!」

汚い口調で騒がしく教室に入ってきたのは、佐伯とその仲間だ。

佐伯は自分の席に座る。

その周りには友達4人がたっていた。

周りの生徒達は、少し緊張した様子で本をみたり、机に顔を伏せて寝た振りをしている。

剣人は佐伯達が来ると、机の上に両手で握りこぶしをつくり肩をいかせていた。

「キンコンカンコーン」

教室の鐘が鳴る。

しばらくすると、鬼塚が教室に入ってきた。

「ガラッ!」

「きりッつ、れい!着席!」

「じゃあホームルームはじめろ!」

そう言うのと鬼塚はいつものように点呼を獲り始めた。

「・・・井上」 「岸田」

「・・・」

「斉藤」

「斉藤」

「いないのか!」

「あれ?いるじゃねーか、返事しろ!」

剣人は呼ばれている事に気づいたのか

「はい・・・」と答える。

鬼塚少し首をかしげた。

点呼が終わった。

「今日は、得になんにもないが、みんな気をひきしめて授業受けるように」

暑いからってだらけるなよ！以上！」

そう言くと、鬼塚は教室を後にした。

鬼塚がいなくなると、また教室に騒がしさが戻る。

「雫、今日、帰り一緒にケーキ食べに行かない？」

「いいところつけたんだ」

「美味しいケーキあるんだよ」

「へーうんいくいく！」

「やったー！」

雫は巴と会話をしながらも、ちらつと剣人の方をみた。
そこには剣人はいなかった。

「あれ？」

「どこいったんだろ？」

「巴剣人知らない？」

「剣人君？あれ〜どこいったんだろ」

雫は妙な胸騒ぎがしていた。

「俺たちになんか用か？」

佐伯とその仲間は剣人に呼び出され学校の屋上にいた。

「用・？別に・ただ昨日の借り返しておきたくってな・」

佐伯達はそれを聞くと、笑い始めた。

「なんだよ、昨日あんなけ痛い目にあって、何かと思えば

それかよ！ヒヤハハハ」

「昨日分かっただろ？俺たちに関わるとどういう目にあうか」

「まだ殴られ足りないのか？」

「ふん！」剣人はそう言くとファイティングポーズをとる。

「なんだあ、俺たち5人とまたやるつもりか？」

「いいだろ、とことんやってやるよ！」

佐伯達は剣人を取り囲むと臨戦態勢に入った。

「フクロにしろー！」

剣人を四方から襲う。

「やつちまえー！」

佐伯は剣人に殴りかかる。

剣人は佐伯の右ストレートを軽々避けると、しゃがみこみアッパーをあごに叩き込む。

「ぐあ」

佐伯は宙に舞う。

「やろー！」

佐伯の仲間が剣人を押さえ込もうと、右手をつかもうとした。

その瞬間剣人が視界内から消えたかと思うと、後ろから回し蹴りを浴びせた。

3人目、4人目と次々に倒されていく

最後の一人も剣人の右ストレートもらうと、地面に倒れこんだ。立ち上がるうとする佐伯に、剣人はすかさず蹴りをいれる。

倒れてる仲間にも同様に蹴りを入れた。

「どうなってるんだ・・・」

佐伯は動揺を隠せない。

仲間たちも苦しそうに倒れこんでいた。

「もうやめてくれ・・・」

「うるせー・・・しね・・・」

剣人はそう言う佐伯達を更に暴行を続けた。

「アハハハ・・・どうだ、ざまあみろ」

剣人は悪魔のような顔で罵った。

佐伯の頭を髪を引張りもちあげると右拳で殴打した。

そして佐伯を地面に仰向けに転がした。

「ヒヤハハハ！」

「とどめだ」

そう言うのと剣人は足を大きく振り上げた。

「ヒーーーーー！」

その瞬間屋上のドアが激しい音をたて開いた。

「ドカーン！」

鬼塚がドアを蹴破って入ってきたのである。

「斉藤・・・！」

「お前なにしてるんだ・・・？」

その声に剣人は反応すると、足をとめ、鬼塚の方をふらつと向いた。

「先生・・・何って・仕返ししてるんですよ・・・」

「先生言ってたじゃないですか・・・？」

「ケンカには絶対勝ちにいけ・・・って・・・」

「おまえ・・・」

「何かに取り付かれてるな・・・？」

その剣人の様子を見て鬼塚は目を細めて言った。

「はぁ・・・なに言ってるんですか・・・？」

「先生が言ったん・じゃないですか・・・？」

「勝てって・・・お前は負け犬だって・・・」

だから・・・俺・・・勝ったんですよ・・・」

「勝者は・・・敗者殺しても・・・いいで・・・すか・・・？」

「先生・・・せんせい・・・」

「せ・・・」

剣人はそう言いながら、だんだん鬼塚の方ににじり寄ってくる。

佐伯達は剣人の矛先が鬼塚に向くと、悲鳴をあげながら、少しこける様にして

屋上から逃げていった。

突然剣人は前かがみになると、すごい踏み込みで鬼塚に飛び掛ってきた。

「は・・・はい！」

剣人は鬼塚に飛び掛ると右ストレートを鬼塚の顔面に放つ。

「くっ・・・」

皮一枚の差で鬼塚は避ける。

剣人は左足で地面に踏ん張るようにしてスピードを殺すところと体を回転させ鬼塚の方を向いた。

「先生・・・なかなか・・・やるじゃないすか・・・」

「じゃあ次はこんなのどうです・・・？」

剣人は薄笑いを浮かべながらそう言う

鬼塚の視界から消えたかと思うと

一瞬で、鬼塚の懷に飛び込んで、強烈なボディを鬼塚に入れた。

「ぐはああ・・・」

鬼塚は倒れこむと、転がるようにして、地面で腹を抱え悶絶している。

「ヒハハハハ・・・あの強い先生も俺にかかれば・・・こんなもんだ」
(く・・・)

(人間の・・・出せるスピードじゃない・・・このままでは・・・やられる・・・やるしかない・・・)

鬼塚は腹を押さえ、苦しそうに立ち上がると、何か吹っ切れた目で剣人を見た。

「斉藤、いや、お前を操る何者かよ」

「退け・・・」

「はぁ・・・？」と剣人は答える。

「ふ、無理か・・・」

「なら・・・やるしかないな・・・」

鬼塚はそう言うのと、どこから出したのか、手に何枚か護符のようなものを出して構えた。

「はあああああ！」

それに火がついたかと思うと、一瞬にして散り散りになり消える。煙のようなものが、鬼塚にまわりつき姿を一瞬みえなくした。しばらくすると、煙がはれてくる

そこには戦国武将の甲冑のようなものをつけた鬼塚が仁王たちしていた。

剣人はぼーっとそれを見つめている。

「さてと・・・とりあえずお前を斉藤から取り除かないとな・・・」

そういうと鬼塚は、両手の指を使って、人差し指と親指で三角形のような形をつくり

剣人の方へ構えた。

「ふん！！！！」

剣人は衝撃のようなものを受ける。

「ん・・・なんだ・・・ぐわあああ」

剣人から何か黒いものが剥がれ落ると、壁に激突した。

剣人は糸がきれた人形のようにその場に崩れ落ちた。

「さてと・・・」

「お仕置きタイムだ！」

鬼塚はそういうとニヤリと笑った。

「斉藤！！」

「しつかりしろ！」「剣人！大丈夫？」

「ん・・・ん？」

剣人が目を覚ますと、鬼塚と雫がしゃがみこんで見下ろしていた。

「斉藤大丈夫か？」と鬼塚は言った。

「大丈夫って・・・俺・・・なんかあつたんですか？」

剣人は状況が飲み込めない。

雫は剣人を不安そうに見つめながら、少し涙を浮かべている。

「大丈夫そうだな！」

鬼塚のその言葉に雫は少し安堵した。

剣人はきよろきよろし始める。

「ここどこだ・・・？」

「屋上よ、」

雫が答える。

「屋上〜〜？何で俺こんなところいるんだ？」

「うーん・・・しかも体あちこち痛いし・・・」

「なんか頭も痛いな・・・」

「俺なにしてたんだ・・・」

剣人は仰向けになりながら、記憶をたぐっていきが
思い出せない。

「ん〜〜」

「ん？」

良く見ると、雫がしゃがみこんでるため、
スカートの間からパンツが見える。

「パ・・・」

「どうしたの？なんか思いだした？」

「パ、パンツ・・・」

「え・・・？」

雫はゆっくり剣人の視線の先をみる。

「！！！！！！」

「きゃあー！！」

顔を赤くしながら、雫はスカートでパンツを隠す

「あんた！こんなときに、なに考えてるのよ！」

「パシ！」

「イタ！」

剣人は雫にビンタされた。

右頬には紅葉のような跡がくつきりついてる。

「さて、斉藤、色々と話さないといけないのだが・・・」

鬼塚は真面目な顔で剣人をみた。

「ここは場所が悪い、放課後、俺と来て欲しいところがあるのだが・・・」

「は、はあ・・・どこへですか？」

「前渡した俺の柔道教室の紙、あそこは俺の実家でもあるんだよ」

「あそこに俺と来て欲しい」

剣人は鬼塚の突然のその言葉に少し戸惑ってる様子だ。

「な・なんでですか？」剣人は言った。

「詳しい事情はここでは言えないんだが・」

「そうだな・お前強くなりたくないか・？」

「そう思うならうちへ来い・」

「悪いようにはせん！」

鬼塚のいつになく真剣な目に、剣人は何か只ならぬものを感じた。

（これは、ただごとじゃないな・・）

（断ると殺されそうだ・・）

「じゃあ・一応・行ってみます・」

剣人は諦め顔で言った。

「そうか・」

「じゃあ校門で4時に待ち合わせよう」

雫は鬼塚に駆け寄る。

「先生！」

「ん？なんだ竹下」

「私も行つていいですか・？」

鬼塚は雫を見て、少し考え込む。

「んー・・」

「まあいいだろう、斉藤がいなくなった事を、俺に知らせてくれたのはお前だからな」

「じゃあ斉藤は放課後まで、保健室で寝かせる。」

「竹下は最後まで授業ちゃんと受けるように」

「はい！」

そういうと鬼塚は剣人を起き上がらせ、剣人に右肩を貸すと二人で歩いていった。

雫は教室に帰ると、授業中ずっと剣人の事を考えていた。

（うーん・・・）

（剣人に何があったんだろ・・）

(朝も様子おかしかったし・・・)

(・・・)

雫は今日有った事を回想しはじめる。

(私が職員室へ剣人がいなくなった事を先生に伝えに行つて・・・)

(その後・・・しばらくしたら・・・鬼塚先生が屋上の方にすごい勢いで駆け上がっていて・・・)

(屋上へ行つてみたら・・・剣人が倒れてて・・・)

雫は鉛筆をくるくる回し始めた。

(あ・そう言えば、途中で佐伯君たちが怯えたかんじで降りてきたんだよね・・・)

(佐伯君顔にアザとかあつたきが・・・)

(まさか・・・剣人とケンカでも・・・?)

雫は鉛筆をまわすのをとめた。

(佐伯君なら何かしつてるのかな・・・)

(よし、後で聞いてみよう!)

(・・・)

「雫!」

「雫つてば!」

「ん!」

「あ・・・」

雫は巴の声にやっと気づいた。

「ああ、また・・・」

巴は少しため息をついた。

「ごめん、巴」

「もう授業とつくに終わつてるよ・雫」

雫は周りを見渡した。

既に休憩時間に入っていて

教室は友達同士で集まり談笑をしたり、走り回ったり騒がしい様子を呈していた。

「休憩時間か・・・」

「あ・・・」

「そうだ・・・」

雫は教室をきよろきよろ見渡し、佐伯たちを探す。

「あれ・・・？」

「いない・・・」

佐伯の近くに座る男子に雫は聞いてみる。

「佐伯君、どこ行ったか知らないかな・・・？」

「ん？ああ、なんか鬼塚に呼ばれたとかいって職員室行ったよ」

「あ、そうなんだ・ありがと」

雫はそう言つと、すぐ自分の席へ戻る。

「？」

「雫どうしたの？」

「なんでもない・・・」

そう言つと、雫は机に手を枕代わりに頭をおくと、前かがみに伏した。

剣人はその頃保健室のベッドで仰向けに寝転びながら考えていた。

（しかし俺なんで・・・あんなところに・・・）

（てか、昨日の夜からの記憶がねえ・・・）

（どうしたんだ・・・俺・・・）

（どうやって学校きたんだ・・・）

（わけわかんね・・・）

剣人は頭を右拳で叩いた。

（・・・・・・）

（考えてもしかたねーか・・・）

（分かんねーもんは分からん・・・）

（こういうときは寝るに限る・・・）

剣人は布団を頭からかぶり寝始めた。

雫は巴と談笑していた。

しばらくすると、佐伯達が帰って来た。

席に座るといつもの仲間と騒がしい感じで喋り始めた。

雫はまた立ち上がる。

「ん？雫？どこ行くの？」

「ん？」

「佐伯君に話があるの」

「ちよつと行つて来るね」

そう言う佐伯の方へ歩いていった。

（なんで・・・佐伯君たちと・・・）

（ちよつと怖そうな人たちなのに・・・）

巴は不安そうに雫の動向をみつめている。

「佐伯君！」

「ちよつといいかな・・・？」

雫は佐伯達の談笑にわけいりように言った。

「ん？」

「なんか用？」

雫を佐伯達が一斉に見た。

「えつと、さつきさあ・・・屋上から降りてきたよね」

「屋上・・・？そんなところ行った覚えない・・・」

佐伯は狐につままれたような顔をしている。

「え？」

「なにいつてんの？」

「え・・・確かに・・・」

「あれ？」

「・・・・・・」

「ごめん、勘違いみたい！」

雫はそう言つと、足早に席に戻つた

「なんなのあれ・・・」

佐伯達はそう言つと仲間とまた談笑をはじめた。

（うう、どうなってるの・・・）

（なんかわけわかんない・・・）

雫は少し混乱していた。

「雫？佐伯君たちと何話してたの？」

「ううん・・・勘違いみたい・・・」

「??」

巴は不思議そうに雫を見つめる。

「ああ・・・もうどうでもいいや・・・」

雫は机のなかから、教科書を取り出し静かに読み始めた。

放課後、授業が終わると、雫は剣人のいる保健室へやってきた。

「案の定・・・寝てる・・・予想通りの奴だわ・・・」

「剣人！剣人！置きなさいよ！」

「ううん・・・うーん」

「ほら、先生と待ち合わせの約束してるでしょ！置きなさい！」

「んゝzzz」

「こらー！バシ！」

雫はカバンで剣人のお腹のあたりを叩いた。

「ぐえ・・・」

「んゝ・・・」

「お・・・雫！おはようさん」

剣人は目を覚ますと、眠そうに雫の方を見て言った。

「ほら、いくわよ！校門に4時に待ち合わせでしょ」

「おお・・・そうだった・・・」

「今何時？」

「3時45分よ」

「まずい・・・急がないとな」

そう言つと、剣人は立ち上がりひなこ先生を見て言った。

「先生、お世話になりました」

「帰りますんで・・・」

「うん、そっか」

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「はい」

「さようなら！」

ひなこがそう言うのと、剣人と雫はお辞儀を軽くすると、保健室を出た。

校門まで二人はやってくると、鬼塚が既に待っていた。

「お！」

「来たか！」

「先生お待たせしました」

雫と剣人は軽く頭を下げる。

「よし二人揃ってるな」

「じゃあいくか！」

「はい」

三人は鬼塚の実家である鬼塚柔道道場を目指して歩きはじめた。

「少し歩くぞ」と鬼塚は言った。

学校の門をでると、坂道を上がっていく。

住宅地を通り抜けると、道沿いには草木がちらほら見え始め、だん

だん山道のような場所に

にさしかかって来た。

「先生・・・どこまでいくんすか・・・？」

「もう少しだ・この坂道を登りきったところに俺の家はある」

（うへ・・・まだ坂道のぼるのかよ・・・）

剣人はため息をついた。

鬼塚は慣れた感じで、ずんずん歩いていく。

雫は疲れているのか、無口になっている。

坂道をぬけると、高台に大きな塀がみえてきた。

周りは木々が生い茂り、さしずめ、山間にひっそりある寺に似た様

相を呈していた。

「よし着いた！」

「ここが俺の家だ！」

「うはーでけえー」

「先生大きな家に住んでるんですね！」

「うひゃー」

剣人はその大きく、長く続く塀をみて驚いていた。
かなりの敷地面積である。

「ほんと大きいね・・・」

雫も呆然と見ていた。

「ははは、生徒で連れてきたのはお前等がはじめてだ」

鬼塚はそう言くと、門を開けた。

「さあ、はいつてくれ！」

「お邪魔します」

二人はそう言うち中へ入っていった。

門をくぐり、石畳の階段を上ると玄関が見えてきた。

「ここが母屋な」

「母屋の右の方に見えるあの建物が道場だ」

母屋の三角屋根には無数の瓦が隙間なく置かれていて、白い壁

杉で出来た格子の引き戸、土を押し固めた地面に細かい石や砂利
が転がっている。

旧家といった外観である。

「ほえ」

剣人と雫はあまり目にしたことないその家を、珍しそうに眺めてい
る。

道場の淵は少し緑がかっていて、雑草やたんぽぽが無数に生えてい
た。

「ん・・・初めて来たんだけど、なんかどこかで・・・」

剣人はこの家に初めて来たはずなのに

一度来たようなことがあるような不思議な感覚を覚えていた。

「ガラガラガラ」

「ただいま」

鬼塚は玄関の引き戸を開けると、大きな声で言った。

すると、奥から誰かが出てきた。

「守ちゃんお帰り」

その声を掛けたのは鬼塚の母留子である。

「あらあら、守ちゃん、その子たちは？」

「ああ、俺の学校の生徒だよ」

「斉藤剣人と竹下雫だ」

鬼塚は二人の方をふりむいて母に言った

「ああ・・・えつと・・・斉藤です。はじめまして」

「はじめまして、竹下です。お邪魔しています」

二人は挨拶をした。

「はじめまして、鬼塚守の母留子です。斉藤君、竹下さんよろしくね」

留子はそう言う二人にお辞儀した。

「まーまー堅い挨拶はそのへんで、さあさあ二人ともあがってくれ」

「お邪魔しまーす」

二人は靴をぬぎ、中へ案内されると、奥へ入っていった。

突き当たりの部屋までやってくると、留子は障子をあげた。

「ささ、ここでゆっくり寛いでね」

三人は10畳ほどの畳の部屋に入り、テーブルの脇に並べられている座布団に座った。

「外は暑かったでしょう、何か飲み物もって来るわね」

「母さんありがとう」

留子は障子をゆっくり開けまた閉めると、飲み物を用意しに部屋を後にした。

「まーお前等ゆっくり寛いでくれ」

「もうすぐ母がお茶と茶菓子もってくるからな」

「有難うございます」雫は鬼塚に頭を下げた。

（ふゝしかし、守ちゃんか・・・ちゃん・・・）

剣人は鬼塚の顔を見つめながら、「ちゃん」に違和感を感じていた。
「どうした？斉藤？」

鬼塚は剣人の視線に気がつく。

「いえいえ・・・別になんにも。」

「お待たせ」

留子は冷たい麦茶を全員に配りテーブルの真ん中に茶菓子を置いた。

「さあ召し上がれ」

「おお、ありがと、母さん」

「有難うございます」

「ども」

剣人は出された麦茶をごくごく飲み始めた。

「じゃ〜ごゆつくり」

留子にはこやかに微笑むと部屋を出て行った。

「プハ〜良く歩いた後の冷たい麦茶は最高だ」と鬼塚は言った。

「そうですね」雫は笑顔で答えた。

「俺はウーロン茶が好きだ」

「もう、剣人！」

雫は剣人を睨む。

剣人はその顔をみてすぐに

「ああ、ごめん、やっぱ麦茶いいよな！」と言葉を一変させた。

「アハハ、お前等仲いいな」

鬼塚はからかうように言った。

「そ・そんなことないですよ！」

「そうだよな・いつも俺なんか殴られてばかりだし」

「こら、剣人！」

「ヒ〜！」

鬼塚は二人の様子をみて笑っていた。

しかし、だんだんその顔から笑顔が消えていく。

「さてと・・・」

「話は変わるが」

鬼塚はさっきまでと違う真剣な顔で語り始めた。

「今日お前達、特に斉藤を呼んだのには、訳がある」

「別に斉藤をうちの道場に入門してもらおうとか・

いや、それもあるが、もっと重要な話をするためにうちに来てもらった」

「あれ・・入門の話じゃないんですか・・」と剣人は言った。

「まあ、その話は後で・・」

（なんだ・・結局それもあるのか・）

剣人は目を細めて鬼塚をみた。

「斉藤、お前今日起こった事覚えてるか・？」

「ああ・・それが・・さっぱりで・・まるつきり覚えてないんですよ」

「ふむ」

鬼塚は麦茶の入ったコップを手にもち飲むと、静かにコップをテーブルに置き

ふーっと息をついて話を続ける。

雫は息を飲みながらその話を聞いている。

「お前は今日、佐伯達を屋上に呼び出し・・」

「そして奴等を相手にケンカをしかけたんだよ・・」

「なに〜〜〜〜！！」

「俺が!？」

剣人は驚きを隠せない。

雫は目を丸くしている。

「うむ」

「そしてあいつ等をばこぼこにした」

「そんな馬鹿な・・」

「俺記憶ないし・・それにあいつ等5人に勝てるわけが・・」

剣人は頭が混乱している。

「俺が行かなければ、もしかしたら佐伯は死んでいたかもしれない」
部屋の空気が凍りついた。

「気に病むことはない・・それはお前の意思でもなく

ましてや夢遊病といった類でもない」

「お前は操られていたんだよ・」

「え??」

剣人と雫は鬼塚の話が良く飲み込めないでいた。

突然部屋の障子が開いた。

「守、わしが話そう」

三人はびくつとしてその声の主の方を見た。

そこには、頭がはげた白い髭のあるおじーさんが立っていた。

「じつちゃん・」

鬼塚は言った。

「今はお前の祖父ではないぞ?」

「あ、源信様でしたか・失礼しました」

鬼塚はなにか気がついた様子だ。

「ああ・ええつと・」

「よい!わしが話そう」

源信は鬼塚にそう言うのと、剣人と向き合う席に座る。

「とりあえず斉藤剣人、よくきたな」

「は・はあ・」

剣人は生返事をした。

剣人はさっきの鬼塚の話が頭を離れないでいる。

「守の話が気になるようじゃな・?」

剣人は驚いた様子で源信を見た。

「だが、今からワシが話す事を聞けば、だんだん分かってくるはずじゃ」

「さて・何から話そうか・」

源信は頭を右に傾げた。

「わしは・お前をずっと見ていた。そう、お前がこの世に生を受けたその日からずっと」

「え?」剣人は話が飲み込めない。

「話は変わるが・・・わしは、ずっと昔・・・そう戦国の世の時代からこの世を見てきた」

「私はこの世の陰の気、そうお前さんたちの言葉でいうなら悪霊や妖怪、そういう暗い陰の気をもつ闇の住人を監視をしてきたのだ」

剣人と雫ははポカーンとしながら聞いている。

（なんなんだ・・・このじいさん・・・）

源信はそんな二人の様子を気にとめず、更に話を続ける。

「この世には陰と陽があり、世の中が悪くなると陰の気の力は増長する。その機会に陰のものはこの時とばかりに世で悪さをする。」

「陰の気が暗躍する世は、混乱に満ちた暗いものとなり、荒んでいくのじゃ」

「ワシはそれを防ぐため、この世を監視しているのだ」

源信は窓から見える外の景色に目をやる。

「ワシはそのバランスをとるため、世の中が陰の気に強く傾く時・・・」

「強い陽の力を持つ者を探し出すと、ワシの力を貸し与え、陰の者の動きを抑制させた」

源信はふーっと息をつくど、ニヤリと笑い剣人を見た。

「まー！簡単に言うんじゃな」

「悪い奴をうちのめす強い正義感のある奴をさがしてそいつにぶちのめさせるって話じゃ」

「そして・・・ワシはお前に目をつけた、斉藤剣人よ！・フオフオフオ」

三人は目が点になった。

「だからのお、斉藤剣人、いや剣人よ、その任務やってくれんかの？」

「ええ??？」

「なんか良く分からんけど、俺にその妖怪とか悪霊をやつつけろって言うんですか？」

剣人は半ば焼くそ気味に、適当に言ってみた。

「その通りじゃ」

雫はあまりの展開に目を丸くして黙っている。

「うへ・・・」

「まじですか・・・？」

「・・・」

剣人は信じられない様子で源信をみて言った。

「まあまあ、源信様、ちよつと突然すぎて斉藤も

訳分からない様子ですし」鬼塚は言った。

「それもそうじゃの・ところで剣人よ、さっきの守の話じゃがな」

「お前、今日佐伯という若者を打ちのめし、殺しかけたよな・？」

剣人はその突然の言葉に驚いた様子で、表情を強張らせる。

「といっても・・・お前は記憶はないはずじゃ」

「なにせ、操られていたんじゃないの？」

「陰の気をもつものが、お前に憑依し

お前の体をもてあそんだのじゃ」

源信は片目をつぶり、剣人を見つめて言った。

「まさか・・・」

「・・・しかし・記憶がないし・・・」

「俺が・・・やったのか・・・？」

「・・・やらされた・・・？」

「しかし・・・そんなことが・・・」

剣人は信じられない様子で、自分の手を見ながら少し震えている。

源信はその様子を見て、少し考え込むと剣人を静かに見た。

「まあ・・・突然すぎたわな・・・とりあえず、今日はもう遅い

今日はここに泊まっていけ」

「飯でも食って、風呂でも入って、良く寝てからまた答えを聞かせ

てくれ」

そう一方的に剣人に言うと、障子を開け、廊下の暗闇に消えていった。

覚醒その1

「お前達、俺もどう言ったらいいか分からないが・・・」

「取り合えずもう夜の8時だし、どうする？」

呆然とする二人を前に搾り出すように言葉を切り出す鬼塚。

剣人が口を開いた。

「ええつと・・・明日土曜日ですよね・・・」

「俺、別に明日予定何もないから・・・」

「よければ、ここで泊まっていつてもいいですか・・・？」

「ああいいよ」

「有難うございます」

鬼塚は雫の方をみた。

「竹下はどうする？」

「え・・・？ああ・・・」

雫は、まださっきの話が頭でぐるぐる回っていた。

「ええつと・・・私も・・・泊まっていつて良いですか？」

「うん、じゃあ・・・お前達、俺のところで泊まっていけ」

「母さんに今から言つて、簡単な夕食作ってもらうようにするから」

「有難うございます・・・」

「ども・・・」

「じゃあ、ちよつと行つてくるわ」

そう言い放つと鬼塚は足早に部屋を出て行つた。

さっきの源信の話が走馬灯のように頭を駆け巡っている二人。

（・・・俺・・・ほんとに佐伯達とケンカしたのは事実みたいで・・・）

（俺が・・・それは悪霊にのつとられたせいで・・・）

（あのじーさんは・・・俺をずっとみていて・・・）

（って・・・あのじーさん戦国時代とか・・・）

（一体・・・あのじーさん何歳だよ・・・）

（で・・・俺に妖怪たおせて・・・）

剣人は頭の中で必死で整理しようとするが、中々まとまらないでいる。

雫も同じように混乱していた。

「ああ・・・考えてもしかたない！」

「あのじーさんの言ったように飯くって、風呂はいつて、寝てから考えよう！」

剣人はそう吹っ切るように言つと雫をみた。

「雫・・・」

「なに？剣人」

「一緒に風呂はいる？」

剣人の突然の言葉に顔を赤くする雫。

「な・・・な・・・な・・・なにいつてんのよ！あんたは！」

「このドスケベ！」

剣人は雫に平手打ちされた。

しばらくすると、留子がやってきた。

「ごめんね・・・何にも用意してなくて・・・」

「取り合えず、コンビニで急いで買ってきたの」

「これ食べて・・・」

申し訳なさそうに、留子はオニギリ数個と弁当をテーブルに置いた。

「いえいえ・・・急に止まることになったあげく、食べ物まで・・・」

「すみません・・・」

雫は俯きながら留子に言った。

「いいのよ、こんな時間に若い二人を帰せるわけないから」
「ゆっくりしていつてね」

留子は微笑みながら雫に言った。

「有難うございます」

鬼塚が戻ってきた。

「お前達の親に取り合えず連絡つけといたよ」

「すみません、鬼塚先生・何から何まで」

「先生ありがとう！」

お辞儀をする二人。

「じゃあお前等飯くつたら、順番に風呂はいつてくれ」

「うちは風呂だけは自慢でな」

「どんな風呂ですか？」

興味深げに鬼塚に聞く剣人。

「な・・・なんと、13畳分くらいある檜の風呂だぞ！」

「ええええ・まじですか・・・？」

「まじだよまじ！」

鬼塚は誇らしげに答えた。

「わーすごい・・・」

「先生んちつてお金持ちなんですね」

「いやいや・それほどでもないよ」

「ただ、土地だけもってるだけだよ」

「いわゆる成金だ！ははは」

雫のその言葉に照れくさそうに答える鬼塚。

三人は夕食を食べ終わると、寛いでいた。

「あーくったくった！」

「しかし、人の家で飯食うのも久しぶりだな」

「うん、私も久しぶりかも」

夕食を食べおえると三人はぼーとした様子でおし黙っている。

「先生・・・」

剣人が口を開いた。

「なんだ・？ 斉藤」

「あのさ・・まだ俺信じられないんだ・」

雫はお茶を飲みながら黙って聞いている。

「俺が佐伯達を呼び出してボコボコにした・」

「これは事実みたいだけど」

「記憶はないし・・・」

「でも、それはまだ理解はできるんだ」

「ただ・・・信じられないのは・・・」

息を呑む剣人。

「この世に幽霊や妖怪がいるってあの源信って人が言った事なんだ・」

「

鬼塚は剣人のその言葉を聞くとふうっと息をつくと立ち上がった。

「そうだな・・・」

「いくら言葉で聞いても、分からないものは分からないよな・・・」

「だったら・・・見せてやるよ」

「そいつらを・・・」

その言葉に驚いたように鬼塚を見る二人。

「お前達に一つ言っておきたい事がある」

「これは俺たち三人だけの話だ・誰にも言っな」

「約束できるか？」

二人を真剣な顔で鬼塚はみつめる。

剣人と雫は静かに頷いた。

「さっきの源信様がいった通り、この世には霊や妖怪は存在し」

「それが悪さを働く事は事実だ」

「源信様はそれを防ぐため、強い陽の者を探しだし、力をあたえることで」

陽の者に陰の者を退治させている・」

「鬼塚家の家系の者は源信様が、陽の者を見つけ出すために・」

「この世と繋がるための媒体にすぎない・・・」

「ただ、極たまに、鬼塚家にも強い陽の者が現れる事がある。」

「その中の一人が俺だ！」

「そして・・・」

鬼塚はそういうと、両手のひらを胸の真ん中で合わせた。

「俺は陽の者として源信様に力を頂いた」

「これがその力だ！」

鬼塚の手から一枚の護符が現れた。

護符に炎がつき、粉粉に消し飛んだ。

その瞬間光の粒のようなものが、鬼塚の体のなかにに吸い込まれるように入る。

呆然と鬼塚を見つめる二人。

「見せてやろう」

「お前達に・・・」

「この世に跋扈する闇の住人の姿を」

そう鬼塚は言くと、胸の真ん中で指で三角形のような形を作る。

「フン！」

「どうだ・・・？」

「見えるか・・・？」

鬼塚は二人に言った。

「何が？」

「きゃあ~~~~！」

雫が叫んだ。

「剣人あそこみて・・・」

「黒いものがなんか動いてる・・・」

雫は怯えている。

「どこどこ？」

剣人は雫の視線の先をみる。

「うわ・・・なんだこれ・・・」

「なんか・・・目みたいなのがついてる・・・」

青ざめる剣人。

「それは低級な妖怪の一種だ」

「この部屋にいるのは、どうやらそいつ一人だけのようだな」

そう言いながら部屋を見渡す鬼塚。

「一定の範囲にいる陰の者をこの世に晒す力」

「これは源信様の力の一つで、発露という力だ」

「俺はさっき発露と書かれた護符を使って、その力を使用することが可能になった。」

そしてさっきその力を発動させたんだ」

二人は頭が真白な状態でその話を聞いていた。

覚醒その2

剣人は鬼塚自慢の檜風呂に一番風呂でやってきた。

「おお、すげえ・・・広いな～・・・」

「俺んちの何倍くらいあるんだこれ・・・」

剣人は桶で体を流す。

「プールみたいだな・・・」

足からちよつとずつ体を水に沈めていく。

「う～ん・・・気持ち良い・・・最高・・・」

檜風呂には窓がついていて、外の中庭を見ることが出来る。

松の木や大きな庭石、小石などが敷き詰められた綺麗な庭である。

「先生んち・金持ちだよな～・・・」

「ふ～・・・・・・」

気持ち良さそうに顔をタオルで拭くと、ふうーと息をつき静かに目を瞑る。

剣人はさっきの出来事を頭に思い浮かべている。

（あれが・・・妖怪なのか・・・）

（ほんとにいるとはね・・・）

（・・・・・・）

（しかし・・・現実離れしてるよな～・・・）

（よし、体洗おう・・・）

剣人は湯船から出ると、水道場で蛇口を捻った。

あらかじめ置かれているバケツを手にとると、それにお湯をため始めた。

「バシャ～！」

「シャカシャカ」

剣人は丹念に体を洗い始める。

石鹸が体を覆い尽くすと、バケツを頭の上からかぶった。

「ふ～・・・」

「さてと・・・あがるか・・・」
「雫が待ってるしな・・・」

剣人は風呂から上がると、はじめに案内された元の部屋に戻ってきた。

「お先〜！」
「おお、斉藤はやいな」
「どうだった？風呂は」

檜風呂の感想に目を輝かす鬼塚。

「いやあ〜・先生最高っすよ」
「あんな大きくて綺麗なお風呂初めてです」
「だろだろ！ははは！」

その剣人の言葉に上機嫌の鬼塚

「竹下も次入ってこいよ」
「肌が綺麗になるぞ」
「ええ・・・そうなんですか・・・？」
「そうだ、なんせあの風呂の水は」
「飛騨の山深くから、送ってもらっている水なんだ」
「美肌効果あるらしいぞ」
目を輝かす雫。

「すごい〜・・・じゃあ・・・行ってきますね！」
「うん、ゆっくり使っておいで」
「はい〜」

雫はそう言つと、楽しそうに部屋を出て行った。

「ふ〜風呂の後の扇風機最高！」

剣人は鬼塚が用意してくれた扇風機にあたっている。

「先生！」

「ん？なんだ？」

「先生つてさ・・・いつから・・・あの力身につけたの？」

「ていうか・・・あの源信つて人の存在を知ったの？」

「いつだったかなあ・・・物心つく頃には」

「源信様の存在は当たり前だったというか・・・」

「じつちゃんが変わるぞつて言つと、それがサインでな」

「そしたら、別人格の源信様になるんだよな」

「それが、当たり前だと思つて暮らしてきたなあ・・・」

「ただ・・・」

鬼塚は少し口調を重くする。

「俺に力を与えるつて話になつた時は、さすがに驚いたな・・・」

「俺は妖怪や霊がいるつてことは」

「源信様に言われていたから、分かつていたんだけど」

「源信様の力の説明を受けたとき、世界が変わつたよ」

「だつてな・・・この世のあらゆる道理を覆すような力を」

「自分のものにできるんだよ」

剣人は鬼塚の半ば現実感のない話に聞き入っている。

「どんな力ですか・・・？」

興味が少し沸いてきている剣人。

「どんなか・・・」

「そうだな・・・」

「でもこれは・・・」

「これ以上は言えないんだよな・・・」

言葉を洩る鬼塚。

「もしこれ以上聞きたいのなら、お前は源信様の力を頂くしかない」

「それは即ち、源信様の要求をお前が呑むということだな」

剣人は少しガツカリした顔をしている。

「やっぱりそれしかないのか・・・」

「教えてくれても・・・いいのに」
ふてくされた顔で鬼塚を見る剣人。

「うわゝほんと大きい」

雫は目を見開きながら、檜風呂全体を見渡した。

「最高〜！」

「気持ち良い・・・」

雫は体を洗い終わると風呂をでた。

雫は廊下に出ると、暗がりに入影をみた。

「あれ・・・あの人・・・さっきのおじいさん・・・」
その人影が近づいてくる。

「おお、守が連れてきた生徒じゃな」

「あ・はい・・・」

「はじめまして・守の祖父の実です」

「はあ・・・」

（さっき会ったんだけどなあ・・・）

「じゃごゆつくり」

「有難うございます」

守は廊下の右側の部屋の障子を開けると

雫にお辞儀し、障子を閉めた。

（何だったんだろ一体・・・）

雫は少し怖くなって足早に元の部屋に戻っていった。

「ただいま・・・」

「おお、竹下おかえり」

「檜風呂どうだった・・・？」

また感想を聞く鬼塚。

「え・・・ああ・・・よかったですよ・・・」

「そつかそつかゝやつぱりな」

鬼塚は顔満面に笑みを浮かべている。

「さてと・・・もう遅いし」

「お前たちもう寝なさい」

鬼塚が二人に言った。

「ええ・・・先生まだ早いよ・・・」

「バカ、もう0時だぞ」

「子供は寝る時間だ」

「ちえ・・・」

舌打ちをする剣人。

「悪いけど部屋は同じ部屋で寝てくれ」

「布団はその押入れにあるから、俺が出しとく」

「はい」

（雫と同じ部屋で寝る・・・！？）

少し戸惑った様子の剣人。

「大丈夫！俺もお前達と寝るからな」

「斉藤！変な事するなよ！」

「するわけないって・・・」

剣人は少し顔を赤くしながら言った。

雫はそのやり取りを笑っている。

覚醒その3

「さてと寝るぞ」

「お前等もちゃんと寝ろよ」

「はい」

二人にそう言うと、鬼塚は立ち上がり電気を消した。
自らも床に着くと、5分も経たない内に眠りに着いた。

剣人はまださつきまで起こった出来事が頭から離れないでいた。

（妖怪、幽霊・・・っているんだな・・・）

（今、俺がこうして寝ている間にも・・・）

（俺の真横にいたりして・・・）

剣人はその事を考えると一瞬背筋に寒い物を感じた。

その頃雫も同じような事を考えていた。

（さつきの・・・何だったんだろう・・・）

（怖いよ・・・）

（寝れないじゃない・・・）

雫は布団を顔に押し付けると、体を小刻みに震わしている。

（剣人は怖くないんだろうか・・・？）

ふと雫の頭にそんな疑問が浮かんだ。

雫は布団から少し頭を出すと
剣人が寝ている方向に目をやった。

（寝てるわ・・・）

（なんて図太いんだろ・・・）

（あんな信じられない事あったのに・・・）

雫は剣人の寝姿に少し腹立たしいものまで感じている。

（いいなあ・・・心臓に毛が生えてる人は・・・）

（ああ・・・もう・・・無理やり寝よ！）

雫は布団の中に体全体を潜り込ませた。

二人は悶々としながらも、いつしか眠りにについている。

「グゴォーガッ」

鬼塚の大きい鼾が部屋に響き渡っていた。

「チュンチュン・・・」

カーテンを透して、太陽の日差しが部屋全体を薄っすら照らし始める。

「ンゴォッ」

物凄い鼾の轟音を部屋に垂れ流す鬼塚。

「ん・うッ」

雫が目を覚ました。

（眩しい・・・もう朝ね・・・）

「うっくん・・・」

朝の存在に気づきつつも、体が中々動かない雫。

剣人はその雫の声にも、動じることなくまだ睡眠の奥深いところにいる。

（起きるか・・・）

（今何時だろ・・・？）

寝る前に、腕から外して枕の横に置いた腕時計を持ち上げる。

（7時30分・・・）

（うっくん・・・）

（しゃーない、起きるか！）

雫は意を決したように、半身だけ体を起こす。

（良く寝てるわ、二人・・・）

（はっあ・・・）

（着替えなきゃ・・・って・・・）

（ここで着替えるわけには・・・）

自分が女であり、横に野獣が二人寝ていることを刹那の瞬間に脳裏に思い浮かべる雫。

寝る前に鬼塚に用意してもらった浴衣を来た場所がふと思い浮かぶ。

（そうだ・・・部屋を出て右に三つ目の部屋で着替えたんだっけ・・・）

雫は静かに立ち上がると、二人が寝ていることを確認すると

忍び足で出口の障子に近付き、音を立てないようにスーッと開ける。

（よし・・・！）

（脱出成功・・・）

軽くガッツポーズを右手を握りこんで決める。

廊下は静寂に包まれ、まだ薄暗い。

雫はそんな事を気にする暇を自分に与えないように
有無をいわさず、三つ目の部屋にさっと入った。

（ふっ・・・さてと・・・）

（服はどこだろ・・・）

（あった・・・）

雫は暗い部屋に浮かび上がる黒い服の影を、どうにか見つけた。

（さてと、着替えて、二人起こしに行かないと・・・）

ゆっくり服を肌に着けていく。

着替え終わると、もとの部屋に戻った。

雫はふう〜と息をつくとき、剣人たちに言った。

「もう朝ですよ、先生も剣人も起きて〜！」

部屋に感高い声で雫の声が響き渡ったものの、二人の耳には届いていない。

（・・・起きて欲しいんだけどな〜・・・）

一階から何か物音がする。

（あ・・・鬼塚先生のお母さん起きてるんだわ。）

（一階に行ってみよう）

雫は静かにドアを開けると、忍び足で静かに一階へ降りていく。

（広いなあ・・・）

「トントントン」

（これって・・・マナ板を叩く音だわ・・・）

（行ってみよう・・・）

音のするほうへ歩いていく雫。

台所にやってくると、確かにそこには留子が立っていた。

（やっぱり・・・）

「おはようございますー」

「あら、おはよう」

「竹下さんだっけ、早いわね」

「今、ご飯つくってるから待っててね」

留子は一瞬包丁を止め、雫の声に振り向くと笑顔でそう答えた。

「はい、有難うございます」

「あの・・・手伝える事ないでしょうか・・・？」

「いえいえ、お客様にそんなことさせられないわ・・・」

「部屋でゆつくり御待ちください」

「すぐお呼びしますから」

「そうですか・・・」

「でわお言葉に甘えて・・・」

「失礼します。」

留子の優しい言葉に雫は安堵すると、部屋に戻っていった。

「んっ・・・うが・・・」

鬼塚が目を覚ました。

「はっ、良く寝た・・・」

「あれ・・・竹下もう起きてたのか？」

「早いな・・・もう着替えてるし」

鬼塚は雫が既に着替えて、テーブルの椅子に
俯きながら座っている姿を驚いた様子で見つめる。

「ああ、すまないな、こら、斉藤起きろ！」

雫の様子に後ろめたさを感じ、斉藤を起こしに掛かる鬼塚。

「う・うーん」

剣人は鬼塚の野太い声に目を覚ました。

数分後、剣人も鬼塚も着替え終わってテーブルについていた。

「もうすぐ母さんが呼びにくるだろうから」

「俺はらぺっこぺこ・・・」

「剣人ったら・・・」

「もう8時だしな・・・」

剣人は後ろに倒れこむと、お腹をさすり始めた。

誰かが階段を上がってくる音がする。

「よし、お前等、ご飯食べに行くぞ」

鬼塚はその音を発する主を、留子と断定してそう二人に言った。

「おはよう、おまたせ、みんな一階の台所きてね」

留子は部屋を開けると、三人を見渡す様にそう言った。

覚醒 4

「いただきます」

「どうだ・・うちの母の手料理は？」

「おいしいです！」

「うん、おいしい！」

「そうだろ、そうだろ」

玉子焼き、お味噌汁、ご飯、漬物、アジのひらき

純和風な心のこもった留子の手料理に零と、剣人は大満足である。

「どんどん食べてね」

「ご飯はまだありますから」

自分の作った料理を、とても満足そうな顔で食べてくれる二人の様子をみて、留子は笑顔が自然とあふれてくる。

30分後、三人は留子の料理のほとんどを平らげていた。

「うん、おいしかった」

「しゅちそうさまです」

「有難うございます」

「母さん、ごちそうさま」

三人はお腹の空腹感が完全に消えて
それに変わって清しい満足感が心を満たしている。

「よし、じゃあ部屋に戻るぞ」

「はい」

お腹をさすりながら、少しがに股な足取りで部屋へ向かう剣人

三人は部屋へ戻ると、テーブルの近くにある座布団に
それぞれ座った。

「さあーと、飯も食ったし、ゆっくりするか」

「TVつけていいですか？」

「いいよ」

「何見ようかな」

剣人は、歯の間に爪楊枝を挟みながら

片手で、TVのリモコンを使って番組を物色し始める。

「ニュースばかりだな。」

「ああ、この漫画こんな時間にやってる」

「あら、ほんと！」

剣人は昔好きだったアニメが、朝の時間に再放送でやってるのを見て

少し懐かしさと驚きを感じながらも見入る。

雫もそのアニメは好きだったので、一緒になって見ている。

「朝からアニメかよ、お前等いい年してるのにな」

「何言ってるんですか？僕達アニメで育ったんですよ」

少し皮肉った鬼塚の言葉に、軽く切り返す剣人

皮肉を言っていた鬼塚も、いつしかそのアニメから目が離せなくなっている。

三人がTVに見入ってる間に、何者かが、障子の外で立っている。

障子がすーっという静かな音を立てながら

徐々に関いていく。

「おはよう」

三人は気づいていない。

「む・・・」

「おい！おはようって言うてんじゃろ！」

その声の主は声を荒げて存在をアピールする。

最初に鬼塚が気づいた。

「あ・・・あ・・・ああ・・・」

鬼塚はその声の主の雰囲気で、誰であるかを悟った。

「源信様！！おはようございます！！」

「え？」

「ん？」

鬼塚の突然のおおきな声に、二人はTVからそちらへ視線を向ける。

「源信様、どうされましたか？」

「どうもこうもないじゃろ」

「ワシは昨日の答えを、剣人に聞きにきたのじゃ」

「あ、ああ・・・」

頭の中で昨日の話を思い浮かべる剣人。

しかし、まだ決心がついていない様子で下を俯く。

「飯くって、風呂入って、良く寝たと思うんじゃないが」

「その顔振りだと、まだ決まっていないうんじゃない」

源信は剣人の表情を見てそれを悟る。

「ん……………」

何か剣人に「うん」と言わせる方法は無いかと頭を捻り、考える源信。

雫はぱーっとしたかんじで二人の様子を見ている。

「そうじゃー!」

「剣人よ!」

「はい」

源信は何かいい案を思いついたようだ。

「お主、とりあえずな、妖怪や霊をやっつけろ!とは言わん」

「ワシの力を与えるから、試しに使ってみないか?」

「使ってみた後に、また答えを聞かせてくれればいい」

「なぐに、断るっていうのなら無理強いはいしない。」

「その時は、力を返してくれればいいぞ」

剣人は力自体には興味があったが、妖怪や霊を相手に戦う事には

踏ん切りがつかなかった。しかし、源信の提案で敷居が低くなった
おかげで

心が揺らいでいる。

「どうしようかな」

剣人はもう力を使ってみたい衝動が押さえ切れない。

「お・俺その力使ってみたいです」

「おお！」

剣人の決意に鬼塚は感嘆の声を上げた。

「フオフオフオ、やっと使う気になってくれたか」

「じゃあ、さっそくワシの部屋に来てくれるか？」

「はい」

「じゃ来てくれ」

源信は自分が先頭にたつと

「こっちじゃ」

先導をして剣人を部屋に引き連れていく。

雫も興味津々で後をつけようと立ち上がる。

「まて、竹下」

「え？」

「付いて行つてはならない」

「何ですか？」

突然の鬼塚の呼びとめに、戸惑う雫。

「力を与えるという神聖な儀式に」

「本人以外は、立ち入ってはいけないんだよ」

「源信様と斉藤の帰りを静かに待とうじゃないか」

鬼塚は目を細め、少し渋い表情で雫に語りかける。

（うーん、私も気になるんだけど・・・）

（仕方ないか・・・）

（でも、気になるわ・・・）

どうしても、見てみたい衝動に駆られる。雲。

少しそわそわしている。

覚醒 5

「そこに座ってくれ。」

「はい」

剣人は源信の部屋に通された。

8畳ほどの部屋には、畳が敷かれていて片隅にはタンス、真ん中には、檜のテーブルが置かれている。少し外側に凹んだ壁には掛け軸が掛かっていた。

「さて、取り合えず、決心したお前に礼を言っとくか」

「礼なんて、それに俺・」

「分つておる」

「陽の者としての任務を引き受けるかどうか・・」

「その答えはいつでもいい・それに無理強いは、なしじゃ」

剣人は自分の不安を打ち消す、源信の的確な言葉に少し安堵の表情を浮かべた。

「じゃあ、今から力を与える儀式を行うのじゃが・・」

「覚悟は良いか！」

「はい」

剣人は自分に迫るこれから起こる、未知の出来事を考えると心臓が高鳴る。

「さてと・・・何にする？」

剣人はその言葉に不意をつかれ、どう答えたらいいか分らない。

「実はな、ワシの力を与えるのだが、その方法はお前次第なんじゃ」

「え？」

剣人はその言葉が良く飲み込めない。

「なんて言ったらいいじゃろうな・・・そうじゃ」

「守の例を出そう。」

「あいつがワシの力を使うところを、お前はみたはずじゃ」

「はい」

鬼塚が霊を自分に見せた時のことを、思い浮かべる。

「あいつは力を使うとき、どうしてた？」

「確か〜・・」

「何か手に護符？のような物もって、それに火をつけてた気が。」

剣人は記憶を探り、目に焼きついたビジョンを拙い表現で言葉にした。

「うむ、その通りじゃ」

「ワシが人間に力を与える時に、神字というものを使う。」

「要はワシが書いた文字じゃな」

「ワシの力の名前を何かに書き示す。」

「その書き写す媒体は何でも良い。」

「無論、お前の体に直接書いてもいいのじゃ」

「その神字が書かれた媒体を受け取った者が、力を利用できるんじゃない」

源信の言ってる事の半分も、理解できずに黙っている剣人。

「ワシは守のために、護符にワシの力の名称を一枚一枚墨で書いた。」

「これは結構面倒くさい作業じゃぞ」

「書き終わると、その護符を束ね、守の魂がある場所へ投げ入れ

た。」

「そうすることによって、護符は普通の物体から、ワシの力を宿した神物へと変貌する。」

「要は、ワシの力の名称を示す物体を何にするかってことだ」

剣人はなんとなく、その意味が分り始めてきた。

「それってつまり・・・護符じゃなくても良いって事ですね」

「そうじゃ、お前の体に書いてもいいんじゃないぞ」

「ただ、それをする、力を使うとき体に文字が浮かぶ上がるがな」

「複数の力を使えばまるで・・・そうじゃの・・・」

「耳無し芳一みたいになって、格好悪いじゃろうな、フオフオフオ」

「だから、体に直接書くよりは、何か媒体を使った方がいいのお」

「何が良い？」

「うーん・・・」

剣人は何にしようか、迷っている。

「そうだ、携帯でもいい・・・？」

「携帯とな・・・」

「面白い事思い浮かぶ奴じゃ」

源信は今だ経験のない物を言われて、試したくなった。

「よっしゃ！やってやろう！」

「お前の携帯かしてみな」

「はい、これ」

剣人は源信に自分の携帯電話を手渡した。

「えーっと、こうじゃな・・・」

鳴れた調子で文字を打ち始める源信。
普段から携帯は使っているようだ。

「ちよつと全ての力の文字うつまで、時間かかりそうじゃ」

「そのへんで寝ててもいいぞ」

そう良いながら、夢中で文字をうつ源信。

剣人は言われたとおり、横になると鼻をほじっている。

1時間経過した頃、源信は全ての文字を打ち終えた。

「さてと、試してみるか！」

剣人はその言葉に、体を起こすと源信の持つ携帯を眺めた。

覚醒6

「さあてと．」

「剣人よ、ワシの前に座れ」

「はい」

剣人は言われたとおり、源信と向き合うように、座布団の上に正座する。

「ええつとな．．」

「取り合えず、お前に一つ聞いとくな」

「携帯にワシの神字打ったんだけどな」

「ワシの力を携帯で使うときの、なんていうかな．．」

源信は頭で言葉がイメージできない様子で、俯き加減で、首を捻ると、声にならない声で一人呟いている。

「そうそう、ゲームでよく言うじやろ、エフェクトじゃ」

「は？」

「携帯でワシの力を使える様になるまでの、見た目というのかのお」

横文字にあまり強く無い、剣人はその言葉にピンと来ない様子。

「ほら、守が力を使用する時な、あいつの護符は燃えて・」

「その後、粉々に散って、初めてアイツは力が使用できるんじゃない」

「あのエフェクト、つまり、力を使用できるまでの演出じゃな」

「力を使うものに、ワシがどんなのが良いのか聞いて・」

「そのイメージをワシがプログラミングしてあーいう風に演出が決まるんじゃない」

見た目はかなりの年寄りではあるが、その風貌とは対象的に、横文字がバンバン飛び出してくる。

「だから、お前が携帯でワシの力を発動するときの、演出はどんなのがいい？」

横文字を揃めて、拙い言葉で丁寧に説明してくれる、源信の言わんとする事がようやく

剣人にも理解でき始めた。

「じゃあ、そうだなあ・・・」

頭の中で力の使用の時のエフェクトを練り始める剣人。

(・・・そうだなあ・・・)

(・・・携帯が手から、浮き出るようにでてきて・・・)

(・・・俺が携帯に文字うつつてのは・・・?)

(・・・いやいや・それだと、時間掛かりすぎだろ)

(・・・いざって時間に合わねーぞ・・・)

両手を胸で組み、頭を右に左に捻りながら考え続ける。

(・・・頭に力を思うかべると、携帯のディスプレイに文字が一瞬で表示されるかんじ)

(・・・で・その後、携帯が空気に溶け込むように消えると力を使用可能になる)

(・・・これで行こう！)

大体のイメージを頭で描き終わると、源信をまっすぐ見つめて、剣人は口を開いた。

「源信様、俺決めました。」

「おお、なんなりと言ってみ」

「ごによごによごによ」

「ふんふん・なるほど」

「それでいいんじゃない？」

「うん」

剣人は自分の考えたエフェクトを、源信の耳傍に顔を近づけ、ひそひそと語る。

二人の頭の中のイメージは一致したようだ。

「よっしゃ・・・」

源信は剣人のイメージを頭で描きながら、右人差し指を軽く頭にのせると

少しぶつぶつ言いながら、目を閉じる。

何かが終わったのか、人差し指を頭から離すと、携帯に人差し指を当てた。人差し指の先をしばらく携帯に当てながら源信は目を瞑っている。

しばらくすると、カツと目を見開き、携帯から人差し指を離すと言葉を口にした。

「これでいいはずじゃ！」

「じゃあ、最後はお前の魂のある場所へ・・・」

源信はそう言うと、剣人の心臓の辺りに、携帯の頭の部分を垂直に押し当てる。

「いれるぞ？」

「……痛くないだろうな？」

そんな不安が頭の中によぎると、源信の目を怯えたかんじで見る。

剣人のその様子を気にも留めず、源信は心臓に携帯を押し付ける。

その瞬間……

「スポッ」

不安の大きさは対象的に、源信の持つ携帯が、体の皮膚を通り抜け中にあっさり吸い込まれるように、入っていった。

「ええ……」

驚きとともに、携帯の入った辺りを、手で撫で回す剣人。

「これで、儀式終了じゃ！」

源信はニヤリと笑うと、今までの作業の疲れが出たのかふーっと息をついて、テーブルに置いてあるお茶の入っている容器に手を伸ばす。

「疲れた……」

「とりあえず、お前試しに、なんか力使ってみ」

「え？もう使えるんですか？」

「もちろんじゃ」

まだ半信半疑ながらも、剣人は力を使用したい衝動が先にたち
力を使用を試みたが、良く考えると、力の文字が頭に思い浮かばな
い。

（・・・・・・俺全然しないじゃん・・）

その事実には剣人は気づくと、源信に何かいいたそうに口をもごもご
させる。

「ん・・？何だ？早く力使ってみるんじゃない？」

「あ・・・・」

「そう言えば、説明書手渡してなかったな！」

「アハハ・・こりやうつかりしたわい」

源信は、少し苦笑いを浮かべ、禿げ上がった後頭部を右手の手のひ
らで
軽くはたく。

「えーと・・どこやったっけ・・」

「あつた。」

戸棚の引き出しを探り、巻物のような物を見つけると
源信は剣人に手渡した。

「ほい、これじゃ」

「その中のどれでもいいから」

「今使ってみるのじゃ」

剣人は巻物を開くと、ずらりと墨で書かれた文字の列に
一通り目を走らせる。

（・・・・・・これ使ってみるか・・）

覚醒 7

「よし源信様、俺これ使うよ」

剣人はそう言うと、地面の広げている巻物に墨で書かれている多数の文字の中から一つを指差した。

「守身の力か・・・」

「それはそこに書かれている通りだが・・・」

「簡単に言えば、自分の身を守る力じゃ」

「まあ、物は試しじゃ、使ってみ」

源信の言葉に静かに頷くと、剣人は立ち上がった。

「・・・えつと、さっきの文字を思い浮かべるんだったな・・・」

剣人が頭に文字を思い浮かべると、突然、手の中から携帯が浮かび上がると

守身の文字が携帯のディスプレイに赤い発光色で表示される。

そして、その後携帯は、空気に溶け込むように光の粒となって消えていく。

その光の粒は剣人の体に吸い込まれていった。

「うーん、これで使えるのかな？」

「そうじゃ」

「使ってみ」

・・・そう言われても、どうやって使うんだろ・・・

剣人は使い方が良く分からないといった様子で、源信を見つめる。

「イメージするんじゃ」

「お前が外からの攻撃から、身を守る時のイメージをしてみい」

「まあ、受動的な力だから、やりにくいわな」

「よし、今からワシが、お前に剣で切りかかるぞ」

「え・・・ええええ・・・!?!」

源信はそう言つと、目を瞑り気合のような声を短く発すると何も持っていない手に突然日本刀が顕れた。

「もう、お前はさっきの力の発動で、守身の力は備わっているんじゃない」

「見事ワシの剣を防御してみ」

有無を言わず、剣を振りかぶると、剣人に襲い掛かる。

「うわ・・・わ・・・」

突然、日本刀で切りかかれた剣人は、咄嗟に反射的な人間の持つ防衛反応に従って、両腕を頭の前で構えて身を守ろうとする。

「ガキーン」

源信の持つ剣の刃の部分が、剣人の腕に触れる数センチ外側で、何か目に見えないものに阻まれる。

「そうじゃ、それが守身の力じゃ」

「へ・・・？」

咄嗟に襲われた剣人は、目を閉じていた。目を開けると、なにか腕の部分を覆う、目に見えない鎧みたいなものに剣の刃が当たって止まっているのが見える。

「これが・・・」

「そうじゃ」

「ただ、お前はイメージが出来ていないから」

「透明なものとなっているがな」

源信は剣を引くと、剣人の目を見て静かに語り始める。

「一つ言っておくと、ワシの力は大体全てに言えることじゃが」

「使うものの、精神力、慣れ、イメージする力、陽の力の強弱で」

「同じ力でも、その形や効果の大きさは全く違ったものなる」

「例えば・・・守の場合は・・・」

「アイツは戦国物の話が好きでな」

「守が守身の力を使うと、戦国時代の武将が着てるような、甲冑を体に纏うんじゃない」

「へっ・・・ぷ」

まだ鬼塚のその姿をみていない剣人は、その格好を頭に連想すると少し噴出しそうになる衝動に駆られた。

・・・見てみたい・・・

「まあ、大体今ので分かったじゃろ」

「な・・・なんとなく・・・」

その自信のなさそうな剣人の答えに、源信は片目をつぶり観察するように見つめる。

「まあ、イメージトレーニングは自分でやってもいいし」

「守とでも一緒に訓練すればいい」

「あ・・・一つ言い忘れておった」

なにか思い出すと、軽く自分の頭をはたく。

「ワシの力の効果はその日限りじゃ」

「その日の0時から次の日の0時までじゃな」

「いつ使おうが、0時を過ぎるとリセットされるから」

「次の日にまた同じ力を使う時は、発動しなোসないと駄目じゃ」

「そのへんはきっちり覚えておくように」

「はい」

源信は一通りの説明を終えると、座布団を枕代わりにして横になる。

「あ・もう全部言ったんで、出て行っていぞ」

「話しは終わりじゃ」

「分かりました、えーっと・有難うございます」

剣人は、あまり力を得たという実感がないまま、終りを告げられ少し戸惑った様子できよろししながら、部屋をでていく。

障子を開け、横になっている源信に会釈すると、源信は左手を挙げ横にふらふら振った。

部屋を出た剣人は両腕を組んで、俯き加減になにやら考え込んでいた。

・ ・ ・ さっきの力は使えたけど ・ ・
・ ・ ・ 他は良く分からないし ・
・ ・ ・ 色々試したいな ・ ・
・ ・ ・ そうだ ・ ・ 先生に聞いてみよう。

剣人は鬼塚と雫がいる部屋へ、少し胸の高鳴りを感じながら帰っていった。

覚醒 8

剣人は鬼塚達がいる部屋へ戻ってくると、音を立てずに軽く障子を開けると

中の様子を隙間から窺っている。

雫はテーブルに頬杖を付きながら、俯き何かを考えるように、静寂を保っている。

・・・いるいる

「あ、おかえり」

雫が剣人が覗いてるのを見つけると、言葉を投げかけた。

「ただいま」

「お、斉藤帰ってきたか」

二人の声を耳にすると、座布団を折りたたみ、枕代わりにして横になり、

半分夢の世界の住人だった鬼塚が、朧気な意識の中、剣人に枯れた声で言葉を掛けた。

「ただいま先生」

「どうだった？」

2時間ばかり、この部屋を空けてた間に剣人が体験し、それによ

って受けた心の変化を聞く事を鬼塚は待ちわびていた。雫は良く分らない儀式で、剣人の性格まで変わっていないか
剣人の口調や喋る内容で確認しようと、息を呑んで聞いている。

「ん、別に大したことなかったよ」

「大したことないってお前」

「ちゃんと、力を受け取ったんだろ？」

「はい、確かに」

「じゃあ、お前はもう力の自由に使えるわけだ」

「そういうことになりますね」

鬼塚の率直な言葉を受け取り、それに返すたびに、力が備わっていると
言う事を
徐々にだが、着々と心に刻んでいく。

「まあ、ということは、もうお前は俺と同等であり」

「そして…普通の人間では既に無いわけだ」

「え・・・？」

「そうかもしれませんが・・・」

・・・普通の人間ではない

剣人の心にその言葉は鋭く刺さってきた。

非現実的な力を手に入れるということは、現実の世界の外へ足を踏み出すと言う事を、実感せずに入られなかった。

「剣人、あなた・・・何か変わった？」

「ん、特に・・・？」

「そっか」

鬼塚とのやり取りを聞き、自分との会話の感触で、性格自体は変わってなさそうだと

分かり始めると、ほっとした顔を浮かべ、雫は少し不安が和らぎはじめていた。

「ただ、先生やっぱり俺、今のままじゃ」

「良くわかんないんだよ」

「どうしたら良いと思う？」

この世に存在しないと思っていた、非現実的な力を手にしてその力をどういう風にこれから使えばいいのか、既にその力を持っている

鬼塚に問いかけるような目で、剣人は鬼塚に言葉を発した。

「そうだな・・・」

「取り合えず、普通に暮らしたら良いよ」

「飯くって、風呂入って、朝起きて、学校行って」

「日常生活で少しずつ、力を確認していくことが重要だ」

「分からない事があれば、俺に聞けば良いし」

「なんなら、俺が指導してやってもいいぞ？」

「できれば、お願いします」

剣人は力の先輩である鬼塚の、淡々とした齒に衣をきせない言葉に思ったほど、大したことじゃないような気持ちになつてくると段々、地に足がついていくような感覚を覚え始めた。

「じゃ、取り合えず、お前達帰れよ」

「そうですね」

「うん」

二人は静かに頷くとゆっくり立ち上がり、横にしているカバンを持ち、障子を開けて、出ようとした。

「待て待て！」

「普通に帰るな」

「は？」

二人は帰りかけた足を止めると、鬼塚の放った言葉に少し戸惑いを見せる。

「源信様の力の中に、瞬移という力がある」

「それを使って、帰ると良いよ」

剣人はその言葉を聞くや否や、源信からもらった巻物をカバンから取り出すと、その文字を探し始める。

「あ・あつた」

「ええつと・・・」

「行った事のある場所を思い浮かべる事により」

「瞬時に移動する力」

「そうだ」

「簡単に言うと、テレポーションって奴だ」

鬼塚が少し驚いた顔を浮かべる二人を、にやつきながら眺めると更に言葉を続けた。

「気持ち良いぞ、俺なんかいつも使ってるぞ」

「今その力を使って、二人とも帰るといいよ」

二人はほぼ同時にお互いの顔を向き合わずと、ただただ、信じられないと言った表情を浮かべ、その場で固まっていた。

覚醒 9

剣人は取り合えず、瞬移の力を使ってみる事にした。

「試してみるか・・・」

そう静かに言うと、剣人の手から携帯が浮かび上がり、ディスプレイに瞬移の

文字が映りエフェクトが終わると、力が体に宿る。

「さてとこれで使えるはずだ」

「お、斉藤格好いいのにしたな」

鬼塚がそのエフェクトを見て言った。

一瞬の間に剣人が行った一連のエフェクトを目の辺りにして雫は目を丸くして黙っている。

（…剣人の手から・・・携帯浮き出てきたわ！？）

（…何今の～～！！）

「あ、そうそう、それな、お前が右手で触れる物なら」

「一緒に移動してくれるから」

「竹内に右手で触れるといいぞ」

「へっ・やってみる」

「えっとっ・・・」

鬼塚のアドバイスを受け、剣人はやってみようとするが、雫のどくに触れようか悩んでいる。

(…肩とか・・・腰・・・それってセクハラじゃん・・・)

(…無難に頭にしとくかな・・・)

「雫、頭触るな」

「え・ええ」

雫の頭に静かに右手の平を置いた。

「さてと、どこに移動しようかな・・・」

「俺の家の前でいいか」

自分の家の前の景色を頭でイメージしはじめる。

「いくぞ・・・」

「またなっ竹下、斉藤！」

座布団に胡坐をかきながら、煎餅をかじりつつ、笑顔で右手をこっちに向かって振っている

鬼塚の姿が目映る。

剣人はそれを軽く一瞥するが、何分この能力に慣れていないため

イメージすることに精一杯で、挨拶まで気が回らないでいる。

次の瞬間・・・

今いる部屋の景色が、瞬時に自分の家の玄関前の景色へと入れ替わる。

剣人は思わず、驚きの声を漏らす。

そして右手に温もりと頭の感触がある事に気がつく
と雫が隣に確かに立っていた。

「ええ、すごい、ほんとに一瞬で移動してる・・・」

驚きとともに、未知の力で簡単に移動できた事に
少し興奮気味の雫。

「こんなことが・・・」

「まあ、無事飛べてよかった」

それとは対照的に剣人は比較的落ち着いている。
一度守身で非現実的な力を使い、この瞬移の力も
それと同じ物だと理解しているからだ。

「そんじゃ、雫、またな」

「え・・・ああ、じゃ帰るね」

剣人の言葉にふと我に帰ると、雫は手を振ると
体に身震いみたいなものを感じながらも、自分の家へ帰っていった。

剣人は家に帰ると、母祥子が玄關に出てくる。

「剣人、おかえり」

「先生の家愉しかった？」

「うん、まあね」

「お昼ご飯あるわよ」

「お、ありがとう」

母と会話を少しすると、上着を脱ぎベルトを緩めると、洗面所へ行き水をため始める。

顔にざばつとその水を浴びせかけると、その清涼感に思わず、感嘆の声が口から漏れた。

タオルで顔を拭くと、首に巻き台所に足を運ぶと、祥子が椅子に座りソバをすすっていた。

「剣人のも用意してるわよ」

「早く食べなさい」

「うん」

席に着くと、透明のガラスでできた清涼感漂う皿に盛られたソバを箸でつまみ

その横に置かれた付け汁の入った青い綺麗なグラスにソバを浸すと勢い良くそこから引き上げ、口に流し込んでいく。

食べている間、どこからか、風鈴の微かな音が染み入るように耳に

入ってくる。

あつという間にソバが皿から消えうせると、剣人は母に声を掛ける。

「今日暑いね」

「母さん、今日予定あるの？」

「ああ、午後からちょっと買い物いつてくるわ」

「そつか、いつてらしゃーい」

そう言うと、食べ終えた食器を洗面台に運び、食器用洗剤を泡だたせお湯をかけると、洗いはじめる。

その間、剣人は早く自分の部屋へ行きたい衝動に駆られていた。

（…色々力試したいぜ・・・）

全て洗い終わると、部屋へ繋がる階段を音を立て駆け上がっていく。自室のドアを開けると、荷物をドカッと大きな音を立てて置きさっそく巻物を中から取り出した。

（…さてと、何を使おうかな…）

（…ある意味これって、愉しいよな）

（…未知の現実社会でありえないとされた魔法みたいな力）

（…それを俺が自由に使えるなんて夢みたいだ…）

剣人は鼻歌交じりに、巻物に書かれた色々な力の説明を読んでいる。

「これ使ってみようかな！」

「対象となる人、物、場所などを思い浮かべると」

「今のその状態を目であたかも間近にあるように見ることが出来る力」

「視感・・・」

「よし使ってみるぞ」

またいつもの携帯のエフェクトが現れると、ディスプレイに視感の文字が赤く表示されその力が体に宿る。

「えーっと、何思い浮かべるかな・・・」

「取り合えず、雫でも」

剣人は目を閉じ雫を思い浮かべる。
すると、映像が暗闇の中に流れ込んできた。

「おお、いるいる」

「なんか愉しそうに、家族と喋ってるな」

「ん・・・立ったぞ・・・」

「え・・・トイレ・・・？それはまずいだろ」

思わず剣人は目を開け、雫の映像を頭から排除し視感の力を一旦解除すると

息をふーっと付く。

(…危ない危ない、痴漢と変わらないよ)

意外とジェントルマンな剣人。

「次は鬼塚先生でも見てみるかな」

また目を閉じ鬼塚のイメージを、頭に思い浮かべ始める。

「庭で竹刀振ってるな」

(…鬼塚、体鍛えるのに余念がないな・・・)

剣人はこの後も視感の力を使い、様々なものを見て楽しんでいた。

日常1（前書き）

ネタ不足なので充填中。

日常1

(…まぶしい…)

剣人は目を覚ますと、生欠伸を3回連続でつくと半身を起こした。昨日の夜、深夜2時まで力を色々試していて、まだ寝たり無いといった面持だ。

「面倒くさいなあ・・・」

一言そう呟くと、半そで短パンを脱ぎ捨て、夏の学生服へと着替え始める。

着替え終わると、母と2・3会話を交わし、洗面所に行き顔を洗いきだるいと言った様子で、いつものように朝食を取り始める。母祥子が忙しそうに、スーツ姿のまま食器を洗っている。

「剣人、母さん、もうすぐ会社いくから、戸締りだけはきっちりね」

「あいよ」

剣人の家はいわゆる母子家庭で、5年前に交通事故で父を亡くし母一人の収入で生計を立てている。なので、朝から晩7時遅くて9時までは祥子は外に出かけていて、剣人が家に帰ってきてても、誰もいないのはざらだった。

「いつてらっしゃーい」

靴べらで窮屈そうな黒い靴に足をねじ込み、祥子は剣人に早口で色々話しかけると

玄関を開け、忙しそうに外へ出て行く。剣人の耳に玄関の外にあるスライド式の門が閉まる音が聞こえた。鍵を閉めると、虚ろな気だるい瞳でテーブルに座り、朝のTVをぼーっと見ている。

「今日も夏日になるでしょう」

朝の番組で、爽やかな笑顔でアナウンサーがそう言う
と剣人は顔をげっそりさせて、一つため息をつく。

(…やだな…しかし、もうそろそろ夏休みだし…)

剣人は夏休み何しようか頭で色々巡らせている。

(…やっぱり、海かプールいきてーよな…でも、男友達と行くのもいいけど
なんか、むさ苦しいよな…)

しばらくすると、その夢から我に返り、まだ夏休みまで5日あまりある事を思い出すと

取り合えず、今日学校である夏休み前の期末試験の準備をし始める。
今日行われる科目は4科目、剣人はそれぞれの教科書や、ノートを
ちらちら

読み始める。勉強は何日か前からしていたおかげで、ちら見程度に
見終えると

それをカバンに詰め、肩から紐を提げると、玄関に歩いていく。

(…今日は雲向かいにこないな…俺からたまには誘ってみるか…)

剣人がだるそうに、ドアを開けたかと思うと、ほぼ同時にチャイムの音がした。

「お、雫、おはよ〜」

「おはよ〜…」

雫もなんだか眠そうな顔をしている。少し目の下に黒いくまが出来ているのが分かる。
それを見て、雫に問いかける。

「どうした雫、眠そうな顔して」

「う〜ん・・・昨日眠れなかったの」

雫は先日までに見て感じた想像を絶する体験を、夜思ひ浮かべているうちに

興奮状態に陥り、中々眠れなくて、朝4時まで起きていた。
雫のその様子をみて、剣人は薄々そうということだと悟ると、一言発した。

「まあ、とりあえず行こうか・・・」

生気なく学校へよたよた並んで歩く二人。

その間欠伸が止まらなくて、大口開けそうになるのを、雫は手を当てて押さえ込む。

剣人は普通に何回も大きく口を開けて、欠伸をしている。
ふと、雫が何か思い出すと、剣人に言葉を掛ける。

「剣人、昨日のあれで、学校行かない？」

「あれってなんだ・・・？」

雫の抽象的な発言の意味を気だるい頭で考え始める。
しかし答えを導き出せない剣人。

「あれって言われてもなあ・・・」

「昨日帰った時のあれよ」

「ああ・・・」

雫の言葉でやつと思い出す剣人。

力の種類が色々ありすぎて、全てを覚えているわけではなく
まだ体に馴染んでいなくて、臨機応変に使えるところまで至っていなかった。

「分かった、じゃ使ってみるか」

剣人はそう言うと、雫の手をひっぱり人気のない路地へと入っていく。

右手を突然ひつぱられ、剣人の行動が理解できない雫は
路地で立ち止まり剣人の右手を払うと、少し訝しげな目で言葉を発する。

「ちょっと、何すんの・・・剣人」

「何するって、瞬間移動するんだろ？」

「あんな目立つところで使えるかよ・・・」

剣人はそれなりに考えていた。あの派手なエフェクトと、そして突然人前から消えるイメージを考えると、とても人前でそれをするわけにはいかなかった。

「それもそうね」

「じゃ行くぞ」

雫が納得すると、剣人は頭で学校のどこに飛ぶか色々イメージし始める。

(…えーっと、人に見つかる場所は駄目だよな・・・いきなり飛んで人がいたら

驚かせてしまうからな。トイレ・・・それはまずいな・・・入っていたら・・・)

(…うーん…そうだ…体育館の階段の下にある空間にしよう、あそこなら

体育館の壁で死角になっているし、上から見られることもない)

剣人は無言で一人頷くと、少し冗談めかしで、雫の細いきゅっとしまった腰に手を回し触れる。

突然の剣人の奇行に虚を突かれ、体を一瞬びくつとさせると、顔を赤くしながら

雫が言葉を口にする。

「ちよっと・・・剣人いきなり・・・」

「まあまあ・・・」

剣人の手から携帯が浮き出ると、エフェクトの後力が宿る。それを慣れてきたとは言え、まだ少し驚きの目で雫はみていた。剣人は頭にさっきの場所のイメージをし力を発動させると

一瞬でイメージそのままの場所に移動した。

景色が急に変わった事に雫が気づくと、思わず驚きの声が漏れる。しばらく、呆けていたが、腰に撒きついた剣人の手がいつまでも、離れないのに

気がつくとき大きな声で怒鳴る。

「剣人・・・それセクハラっていうのよ!!!!」

「バチ!!!!」

「イタ~~~~!!」

二人は教室に向かうため、運動場を横切り、別館へと移動し始める。もちろん、さっきの雫の強烈なビンタで剣人の頬は赤くなっている。苦笑いを浮かべながら右手を後ろ頭に当て、雫に軽く頭をさげる。少し揉めながらも、二人は館内に入っていくと、教室までたどり着いた。

夏休み前。

「おい、剣人今日の試験いけそうか？」

高木が剣人が席に座るなり駆け寄ってくると、朝の挨拶を交わし、次に出たセリフがこれだ。

眼鏡を掛け、黒髪の短髪に少し長い顎、その顔立ちからは知性の高さが滲み出ている。

今日の試験も相変わらず自信ありそうな顔をしている。

「まあな・・・でもお前ほどじゃねーよ・・・」

高木は剣人と小中高と全て同じ学校で過ごしてきている親友だ。

剣人は十分高木の頭の良さをこれまでのテストの結果で思い知らされている。

未だに点数で高木を上回った科目は一つも無かった。

「今日は試験頑張るように！」

HRで鬼塚がいつものように、独自の蘊蓄を述べた後、そう最後に生徒達に

励ましのような言葉を送ると、部屋を出て行く。

その姿を見つめる剣人の目は、この所の一連の鬼塚との交流で少し前まで外から見ていた

ただ、怖いだけのイメージとはまるで違うものに変わっていた。

一見長く感じる4時間という試験時間は、受けている生徒たちからすれば

あつというまの時間であつて、釣瓶式に試験は終わって行き、気がつけば、HRの時間を迎え
教壇の前には鬼塚が立っていた。

そして、それから何日か試験が続いたものの、光陰矢のごとしと言われるように

あつというまに日にちは過ぎていき、夏休み最後のHPを迎え生徒達は笑顔を絶やすことなく

鬼塚の暫く見ることができなくなる顔を眺めていた。

「じゃあ、お前達、また新学期な、宿題忘れんなよ！」

鬼塚が一言生徒達にそう言つと、全ての前期の課程は終了し、長い長い夏休みに

突入していく。

鬼塚がいなくなった後、すぐに帰宅するものもいるが、教室に残つて友達同士で

暫く雑談する者もいた。剣人達はは後者だ。

「高木よ、夏休みどうするよ？」

「俺か？特に決めてないな・・・」

「海でも行かない？」

「お、いいね」

剣人達が二人で、男同士の海への計画を練っていたところ突然、その会話に分け入ってくる二人がいた。

「剣人君、高木君なんの話してるの？」

「あ、もう・・・」

木戸巴が帰ろうとしていた雫の右手を引っ張りながら
剣人達の所にやってきて話題に無理やり混ざってきた。
帰宅を邪魔され、すこし怪訝な眼をしている雫。

「海行こうかって話してたんだよ」

「いいねー！」

「私達も一緒に行ってもいい？」

「え・・・？良いけど」

巴の突然の想定外の言葉に男どもの目の輝きが一層強いものとなる。

「ちよつと私達って私も？」

「あつたりまえでしょー！」

強引に『私達』の中に引きずり込まれ、後ろで困惑しながら俯いて
いる雫。

巴はその雫の方を振り向き、したり顔で笑みを浮かべている。

悩んでいる雫に巴は近付き右手の平で壁を作り、二人でぼそぼそ話
し始める。

「・・・チャンスじゃない 煮え切らない剣人くんと関係を变えれ
るかもよ？」

「ちょっと…何言ってるのよ…別に私と剣人は…」

「いいの！いいの！はい決まりね！」

しどろもどろしている雫を押し切ると、巴は剣人達と話しをとんとん拍子にまとめて

7月25日に近くの海へ一緒に行くことになった。

4人はその後一緒に帰路を辿る。

高木と巴は二人で絶え間なく楽しげに話していたが、そのテンションの高い二人に

ちよつとずつ会話を投げかけながらも、剣人と雫は比較的大人しめに歩いていた。

やがて、巴が家路が別れ、剣人たちに笑顔で手を振りいなくなり、高木も同じように

いなくなると、結局家路が同じ二人は並んで一緒に帰ることになる。

「海か・・・」

少し憂鬱そうな顔で、一言口にする雫。

雫は少し剣人の事をいつもより意識する気持ちが高ぶっていた。

巴の言葉が頭に残っていたからだ。ずっと幼馴染として小さい時から近所で遊んできた二人。まったく恋心に似た気持ちが無いかと言えば嘘になるかもしれない。

剣人はいつもと違って、少し雫が静かすぎるので場を和ませようと悪戯に言葉をかけてみる。

「海楽しみだな」

「雫と海行くななんて何年ぶりかな」

「そういえば、小学校以来ね」

「そんなに経つか」

会話が途切れると、剣人は口笛を吹きながら間を保っていたが昔、雫と海へ行ったことを頭で思い浮かべているうちに、ふと氣になった事を言葉にしてみる。

「そういえば、あの時お前変わった事言ってたよな？」

「海の中に変なおじいさんがいたって」

「ああ・・・」

…そういえば、あの時私海の中で…

雫がその言葉に反応すると、歩きながら頭の中で昔起こった奇怪な出来事を回想しはじめる。

修行 1

「剣人どこいつちゃったんだろ・・・」

幼い雫は、剣人を追いかけて海の中へ足を踏み入れたが見失ってしまった。

「あの岩場辺りに隠れていたりして・・・」

「行ってみよ」

近付いていくと、海から突き出た岩場の影に、何か丸い人の頭のようなものが浮かんでいた。

それを見て雫は笑うと、静かに平泳ぎで距離を縮める。

「剣人！！みつけた！」

小さな手で掴んだその頭の持ち主は、頭に薄っすら白い毛が生えていて

黒い髪が鬱蒼と生える剣人と違う事に幼い雫はすぐに気がついた。

やがて、その頭が手を離れ、海面に沈んだかと思うと、視界から完全に消えうせる。

雫は何か怖くなって、砂浜へと戻ろうとした時、足に海草のようなものが絡みつくのを感じて

感覚で捉えると、水面の中へ顔を浸し中の様子を覗き見る。そのとき雫は見てしまったのだ。

海草と思っていた、絡みつくものの正体、それは朽ち果てて骨をむき出しにした

人の手のように見える。それを見て慌てて視線をずらした先に、額

からドス黒い血を流し、目の周りに骨を露出させているお爺さんの不気味な顔があった。

その目のくぼみにある灰色がかった目玉が雫の視線とかち合う。

「~~~~~」

雫は過去に見た鮮明な記憶の臨場感に、思わず体をふらつかせた。

「ん？なんだいきなり」

「え・・・いえ・・・別に・・・」

（…あれ、怖かったわ・・・、たぶん幽霊みちゃったんだわ・・・）

（…思い出しただけでも寒気が奔る・・・だけど・・・）

（…かなり前の話だし、今更ね・・・）

気分を変えるように、顔を両手の平で挟むように軽く叩くとふっきたような表情を浮かべ、剣人の横顔を見つめ囁くように言葉を掛ける。

「剣人、今度はいなくならないでね」

「はあ？」

剣人は突然の言葉に首を傾げていたが、雫の方に視線をやると、優しい微笑みを浮かべ見つめ返してくるので、少し照れ臭くなり顔を上にむけた。

(…雫は笑うと可愛いな…)

剣人は雫と別れ家に帰ると自室に閉じこもり、源信の巻物に目を凝らし張り付いていた。

まるで、試験前の勉強でもするかのような必死さを漂わしている。色んな力の存在を知り、それを自由自在に使えるようになるまで体に馴染ませるのが

しばらくの剣人の課題というか…楽しみでもあった。

「今日はこれ使ってみるかな…」

「霊視か…霊を見ることが話しを交わす事が出来る力が…そのまんまじゃん…」

(…なんか怖いな…だけど、全ての力を身につたいし…避けては通れないな…)

剣人は正直なところは、まだ霊的な存在と向き合えるほどの度量は持ち合わせていなかった。

しかし、徐々にではあるが、慣れて行きたいという前向きな気持ちもあって

そついう意味では今回の力を使う意義は大きい。

なぜ、霊的なものに慣れて行こうと思いだめたかと言えば…

佐伯達の一件で意識を奪われ、人を殺しかけた事実が、ずっと心

の底で燻り続けていた。

目に見えない陰の者の姑息な行動に、元々陽の力を体に宿す剣人は、普段あまり意識はしていないが、潜在意識の中でそれに対して燃え盛るような憤りと正義感のようなものが溢れていて、それに抗う術を見につける事を意識する心へ投げかけ始めていた。

「よし使ってみるぞ．．！」

剣人の手に携帯が現れ、赤い霊視の文字がディスプレイに浮かび上がると

携帯は瞬時に消え、眩い光の粒が体に吸い込まれていく。

「えっと．．説明書によると．．」

巻物を見ながら、使い方を学ぶ剣人。

「人に見えない霊を見ることが出来、言葉を発せずに心で語りかけ、霊の言葉を受け取ることが出来る力」

「ふむ．．声に出さなくてもいいわけだ．．」

「力を宿すと同時に自然に力は発動し、霊を見れる状態になると．

」

「え．．．」

剣人は既に力を宿しているので、周りに霊がいれば目に映る事に気がつく
自分の部屋をまるで幽霊屋敷でも見渡すように、慎重に視線を流していく。

(…とりあえず、この部屋にはいないみたいだ…)

強張った体を弛緩させ、胸に手をつき軽く息を吐いた。

(…一階にも降りてみるか…)

剣人は立ち上がると恐る恐る扉を開け、隙間から廊下を見渡した。何もいないことを確認すると、静かに歩み出て、前屈み気味に歩をゆっくり進める。

こめかみに冷たい汗が滴り落ち、体は小刻みに震えていた。

四方八方に素早く視線を飛ばしながら、ホラー映画でありがちな背後から突然現れる霊をイメージしてか、時折、激しい勢いで、体を180度回転させて振り向く。

その一連の動きを繰り返しながら、一階へと階段を降りていった。

(いないな…)

(ここは…!)

剣人が見据える先に部屋の扉があった。

ここは以前祖父が使っていた部屋だ。

その祖父も亡くなり、今は応接間として使われていた。

(なんか、この扉開けるの怖いぞ…いそうなきがする…)

(馬鹿…これから慣れようって時に、しょっぱなから怯えててどうするんだ…)

剣人は自分に考える暇を与えないように、勢いよく扉を開いた。

日の光がほとんど通らないこの部屋は、まだ昼の3時だというのに暗闇が覆い尽くしていた。

目がなれない剣人はしばらく、暗がりを恐怖に押しつぶされそうになりながらも

見据えたまま佇んでいたが、やがて目が慣れてくると、部屋の隅に人影のようなものを捉える。

(・・・いる・・・何かいる・・・と・・・当等ご対面ですか・・・)

静寂が奔るこの部屋で、自分の喉を鳴らす音だけが剣人の耳に届いていた。

幽霊との遭遇。

（何かいる…）

剣人は暗闇に目が慣れてくると、部屋にある照明の紐を手繰り寄せ、ゆっくり下方に引っ張り明かりを灯す。

小さな金属音と共に部屋全体が光に照らされ、そこにある全ての物を浮き上がらせた。

（ん？誰…）

先ほど影を捉えた場所に視線を下ろすと、中腰で座り込む若い男性の姿があった。

黒い制服を着ているところから、学生のようにも見える。

その面長な横顔にはどこか悲壮感が漂っていた。

さっきの剣人の心の声が、彼に届いたのだろうか。

しばらくして、その姿勢のまま、頭だけ横に振りその哀愁に満ちた眼を向けてくる。

剣人はその眼に見据えられ、一瞬生きた心地を失い体を強張らせた。

『お前、俺が見えるのか？』

目の前にいる学生が、幽霊である事は、第六感のようなものですぐに理解できたが

その存在を受け入れ、交信をする度胸が中々湧き起こらない。

『何か言えよ』

『見えてるんだろ？』

囁くような声を幾度か放ちながら

その体をお越し立ち上がると、畳の上から少し浮いた状態で
徐々に距離を縮めてくる。

（来るな・・・）

その顔が覗き込むように接近してきた時
何かが剣人の中で大きく弾けた。

「近寄るな―――！」

心だけではなく外にもその声が大きく漏れ響くと
その幽霊は驚いた様子で、後ろへすーっと素早く水平移動した。

『びつくりするじゃないか…』

少し怪訝そうな眼をして剣人をみつめ呟いた。

しかし、剣人の様子がさっきまでとは違う。

恐怖を許容する限界を超えてしまったのだろう。

破れかぶれとも言つような強気な気持ちを全面に押し出し

眼を血走らせながら、踵を浮かせた状態で幽霊に詰め寄り始める。

今にも襲い掛かりそうな雰囲気醸し出していた。

「このゝ、気持ち悪いやつめ！人が大人しくしてれば
いい気になりやがって！」

息は荒く火照った体に怒りの様なものを充満させながら

自分を睨みつけてくる剣人に、恐れを成したかのか、幽霊は慌てた様子で言葉を投げかける。

『お、ちよつと、落ち着け！待て！話せば分かる！』

「あゝ？」

剣人は血が頭に上ってしまつて、まともな思考ができない。そんな剣人の様子を見て、危険を感じたのか、壁に尻を押しつけ土下座しだした。

『ほんと、ごめん、つい調子扱いちゃつて…』

「何様のつもりなんだよ」

『悪かつたつて、ごめんよ、取り合えず落ち着いて…深呼吸してごらん…』

何故か幽霊に宥められる剣人。

その低位な姿勢を見ているうちに、だんだん、落ち着きを取り戻してくると

荒くなつた息をゆっくりにした物へと変えていった。

そして、一回深く息を吐き、その幽霊を静かに見下ろすと、さつきまでの恐怖が消えうせ

冷静に見れる事に剣人は気づいた。

「ふー、しかし幽霊っているんだな」

剣人は額に汗を滲ませ、力が抜けた様子で後ろに体を軽く逸らす。

『はい、貴方の前にいますよ』

剣人の足元で正座をして、静かな口調で話す幽霊。さすがに幽霊だけあって、既に死んでいるせいか、気持ちを整えるのも早い。

失う物が無い余裕とも言っべきか。

「ところで、えーっと、取り合えずなんでここにいるの？」

自宅に不法侵入していた幽霊に、ごく普通の疑問を投げかけた。

『空を漂ってましたら、2階の窓が空いてたものですから』

『なんとなく、そこから入ってきました』

「虫じゃないんだし、なんとなく入ってこられてもね…」

『そうですね』

暫く、お互いを探るように、言葉のやり取りをする二人。

幽霊の屈託ない率直な物言いを聞いているうちに、剣人も地面に胡坐を掻いて座り

腹を割って話し始める。しばらくして、二人は微妙に心が打ち解けてきたのか

友達とでも話すように気軽に言葉を交わしていた。

『なるほど、あなたは特殊な力を持っていて』

『それで私を見たり、話を交わす事ができるんですね』

「うん、これ内緒な」

「そーいや、お前名前聞いてなかったな？俺は斉藤剣人だ」

『私は森大路浩太と言います』

「仲よくって言ったら変だけど、まあ気楽にしてくれ」

剣人はそう言うと、部屋の隅に置いていた座布団を持ってきて幽霊に座るように顎で促した。

その丁寧な対応に笑顔を浮かべると、ちょこんとその上に座るといふよりは、風船がのっかかるみたいに、正座のままふわっと移動した。

「お前何か飲む？」

『いえ、幽霊ですから』

『できれば、お線香など炊いてもらえれば』

「そっか、ちょっと待っててな」

剣人は香皿と線香、ライターをこの部屋に置いてある仏壇から持ってくる、浩太の前に皿を置き線香を挿して、ライターの火を先端に近づけた。

線香の先が紅く燃えたかと思うと、ふーっとそれに息を吹きかけ煙を漂わすと

辺りに独特の匂いが立ち込める。

『いいかんじ…心が洗われるようだ…』

何か悦に入った調子で呆けた顔を浮かべる浩太。
剣人はその反応に満足げに笑顔を浮かべていた。

「ところでさ、こんな事聞いちゃ悪いかもしれないけど」

『なんででしょうか？』

「お前なんで死んだの？」

その言葉を聞いて、急に顔を曇らせ俯く浩太。

剣人はその様子を見て、言い放った言葉に後悔の念を禁じえなかったが

取り合えず聞いてしまったものはしょうがないという事で、更に言葉が続けた。

「なんていうか、取り合えずこれも縁だと思うし」

「話してしまえば、楽になるって事もあるんじゃないかな」

いじめられっ子を諭す教師のような剣人。

浩太はしばらく押し黙っていたが、やがて剣人の優しい眼に促されるように

押し込めていた感情を放ち始める。

『じゃ、聞いてください』

幽霊の秘話。

「何から話してよいやら・・・」

「そう、私は半年前に死にました」

「高校三年の冬です」

浩太は視線を下方に向けたまま、幽霊になった今微かに残る現世の記憶の断片に身を浸しながら、それを剣人に漏れ伝える。

・・・

私には病院を経営する父がいます。病院の後釜に私を据えようと考える父は

私に医学の道を強制しました。その期待はとてつもなく大きくそして重いものでした。

医学系トップクラスの大学に受かるため、それはもう、毎日毎日勉強していました。

しかし、思うように成績が伸びない。そんな私を父は勉強不足だと一蹴しました。

私は落ち込みました。こんなに頑張ってるのに、なぜ成績は伸びないんだろう。

そして、結果が出ない自分を責めました。落ち込む私を見て、母はただ頑張れと

言い続けます。日を重ねるごとに、私の中でどうしようもない不安と悲しみ、やりきれなさが増大していき、私を着実に追い詰めていき

ました。

ある日、私はその重圧に耐え切れなくなりました。限界でした。もう自分の存在意義すら

曖昧になるほど、何もかもが嫌になっていました。

そうだ、このまま死んでしまえば・・・

いつそ楽になれる。そんな風に思い始めたんです。

私は天井に横たわる梁にロープを垂らし自殺を図ろうとしました。

しかし、私は臆病だった。とても自ら命を絶つことができなかった。毎夜毎夜、何度もそれを繰り返すも失敗に終わります。そうしているうちに死ぬのも

なんだか馬鹿らしくなってきたいました。

・・・しかしある夜、私は父に成績が悪い事で2時間くらい説教を受け罵られました。

私は部屋に戻ると、枯れ果てたと思っていた涙がまたあふれ出てきて散々泣きじゃくりました。やがて、その涙も止まり抜け殻のようになった私は、また机の中に仕舞い込んでいたロープを手にしていました。

もう駄目だ、生きていても仕方が無いって静かに心で呟きました。電灯をつけず、ただ机の光だけが部屋を薄っすら灯しています。上方に暗く映る梁を見て、ロープを投げかけようとした時・・・

「ん？」

「あれ、なんだろ」

梁の下に視線を落とすと、何か人影のようなものを視界に捉えました。

三角の帽子、淵がギザギザに擦り切れた袴のような物を来た

謎の人影。私はそれを見て恐怖しました。

私の部屋は3階に有ります。部屋の鍵は閉めていました。泥棒が上がってくるのは不可能に近いです。窓の外側には足をかける場所もなければ

隣接する家ありません。

その人影が私に近付いてくると、机の微かな電灯に照らされ、その正体を浮かび上がらせました。そして私は見てしまったんです。

青白い顔をしたお坊様の顔を。

黒い袈裟に身を包み、深編み笠を頭に被った虚無僧のようなその姿。右手には黒い錫杖を握っていました。

私は腰が抜け、その場に崩れ落ち震えていました。

その坊様が急に錫杖を持ち上げたかと思うと、地面に突き立てました。

その際、錫杖の上部の丸い金属の飾りが擦れあい、不思議な音を部屋に奏でました。

そして私を静かに見下ろし、地から響くような低い声で言っただけです。

「首を吊らんのか？」

そう言われても、私は恐怖に体が竦み言葉を発する事ができません。息をぐくりと飲んで様子を窺うことしか・・・

そのお坊様は更に錫杖を床につき、同じ質問を何度も繰り返してきました。

「首を吊らんのか？」

「首を吊らんのか？」

「首を吊らんのか？」

私は恐怖のあまり目を瞑り体を震わせ黙る事しか出来ません。しかし、しばらくしてその音が止んだんです。

それに気づいた私は、恐る恐る瞑っていた目を慎重に開こうと努めました。

徐々に部屋の様子が映し出されました。全てを目に映そうと瞼を完全に

開け切ろうとした時、急に首を絞められる感触を覚えたんです。

その力はとても強く、そしてあつという間に私の意識を現世から遠ざけていきました。

「眩しい」

朝日の光が瞼に直射したのでしょうか。眩しさに意識を取り戻した私は半身を起こし

周りを見渡しました。朝日の強烈な日差しが部屋全体を照らしていました。

私のその時の気分はとても爽やかなものだったんです。

体も軽く絶好調でした。

勢いよく立ち上がり部屋の中心に視線を送りました。

しかし、何か目の前に遮るものがある事に気づきました。

「なんだこれは？」

「足？」

私は一瞬驚いて体を逸らしました。

そのせいで上の方に視界がずれた事で、足の先にあるものを確認できました。

梁に結び付けられたロープの輪に首を吊って、青くなって死んでい

る自分の姿を・・・

私は呆然とそれを眺めていました。初めは理解できませんでした。その不思議な光景に、ただ視線を置いたまま呆けていました。

中々私が降りてこない事に気づいたんでしょう。

母が大きな声をあげ扉を叩く音がします。鍵を回して過激な金属音を垂れ流していました。

しかし鍵が掛かっていて開きません、そして母は諦めたのか一階に降りていきました。

時間が流れていきます。日が高く上り、徐々に西に傾くと夕日が空を染め始め、そして夜の闇が辺りを包み込みました。

父が帰ってきたのでしょうか。チャイムの音が上まで聞こえてきました。

下で騒がしい声が聞こえてきます。暫くして、階段を大きな音を立てて誰かが上がってきました。扉の外まで来ると、またあの金属音と共に大声で中に怒声を浴びせ続けています。

その声が止んだと思ったら、突然扉が開かれました。

父が蹴破って入ってきました。

そしてその後は・・・

私は葬式で棺おけに横たわる青い顔をした自分の姿を、空に浮きながら上から

眺めていました。この時私は死んだんだなって強く実感しました。

私はその後は家に戻らず、あちこち漂っていました。

ふわふわと空中を舞い、空の上からあらゆる景色を眺めていました。ぼーっと浮いている間、ある事を思っていました。

死んだら天国か地獄に行くはずなのに、なんで現世に残っているのか？

暫く考えましたが、その答えは出ませんでした。

その後も、一向にあつちの世界からのお迎えは来ないし、行く当ても分らないので

雲が流れるように、自分も気まぐれに流れていました。

「なるほど、そうしてる間に」

「おれんちの窓から侵入したという事か？」

「そういう事になりますね」

剣人は幽霊の長い話を、静かに聞いていた。

とても不思議で非現実的なその話は、ある意味、源信から聞いた話と重なるような気さえしていた。

浩太の憂鬱。

「まあ、長々とご静聴有難うございました」

「さてと、僕はそろそろお暇しますかね」

浩太は取りあえず話を全て聞いてもらった事で、さっぱりしたのか表情から曇りが消え、さばさばした表情で言った。

「ちよつと待てよ」

立ち上がるうとした浩太を呼び止める。

さっきの話を全部聞いた後、剣人の脳裏に何かひつかかるものがあった。

「お前、これから先もずっと空を漂っていくのか？」

「はあ……、たぶんそうなりますかね」

「いやさあ、それは良いと思うんだけど」

「よく言っじゃん、現世に残る幽霊って何かこの世に未練というか……」

「やり残しみたいな物があつて残ってるとか、ＴＶで言ってるよな」

「お前、自分でも言ってたけど、この世に残っている事に疑問があるんだろ？」

剣人は浩太の目を真直ぐ見つめて、彼の心に残る闇、たぶん彼自身でも

自覚していない暗い部分を掘り下げるように言葉を重ねた。

「は、疑問……、疑問か……」

浩太は腕を組み頭を右に左へと傾けながら、悩む素振りを見せる。

「でな、俺が思うには、お前の話聞いたかんじじゃ」

「その坊さんの幽霊か妖怪か知らないけど……」

「たぶんそいつに殺されたのだと思うんだよ」

「はー、なるほど！」

浩太は左手の平を水平に出して、その上を右握りこぶしでポンと一度叩いた。

剣人はその様子を見て呆れた表情を浮かべていた。

まあ、幽霊だし、多少ずれてるのかな……。思考能力も生きて
いる時よりは

あれなのかもしれない……。

気を取り直して剣人は更に話を続ける。

「お前はたぶん、その事で無意識のうちに現世に縛られてるんじゃないのか？」

「だから、あっちの世界にもいけないんだよ」

「なるほど……………」

剣人の話を聞いているうちに、なんとなくそうなのかと思い始めた
浩太は
頭をうな垂れ、絶望にくれた表情をしていた。

「そうだったのか……、私は被害者なんだ」

「殺されたんだ……………」

浩太は完全に膝に顔を埋めてしまい、泣き始めた。

「おいおい、何もそこまで落ち込まなくても……………」

その言葉を聞いて浩太は突然、泣き止んだかと思うと背筋をピンと
して

剣人に向き直り平然とした顔で口を開く。

「それもそうですね」

「今更ですね」

「死んじやったもんは仕方が無い」

こいつ…、相変わらず変わり身早いな。
幽霊ってみんなこんなのか……………？

浩太を顔を歪め見つめながら、頭の右側を掻き耄る剣人。

「しかしな、ちょっと俺は気になり始めたぞ」

「そんな危険な奴がうろろしてちゃ」

「怖いしな……………」

剣人は顎に人差し指を当て、何かを考え始めていた。

たぶん悪い霊か妖怪、正体は不明。

だけど、現に浩太はそいつに殺されていて被害は出ている。

果たしてほつといていいものだろうか？いや良い訳ないよ…………。
でも、居場所も分からないし、俺にはどうにも出来無さそうだ…………。

困った時は…………、源信のじっちゃんだ！

剣人は浩太の話をまとめているうちに源信に行き着いた。

彼ならそういう類の事には詳しいはずだ。

鬼塚って線もあるけど、鬼塚がそういった霊と
会ったことがあるか、分からないわけで。

「よし、浩太」

「俺と来いよ！」

「え、どこへですか？」

キョトンとした表情を浮かべる浩太。

剣人は立ち上がり、浩太を見下ろしながら自信に満ちた笑みを浮か

べていた。

「言っても分からないだろうから」

「ただ、お前の悩みが解決されるかもよ？」

「黙ってついて来てくれないか？」

「悪いようにはしない」

表情から笑みを消し、真剣な表情で浩太を見つめる。

浩太は今までのやり取りから、剣人の人となりをそれなりに理解し始めていた。

なんか良く分からないけど……、この人は私みたいな野良幽霊の話

とても親身に聞いてくれた。それにどこか頼もしい。

この人について行けば、何かが変わるかもしれない……。

「私行きます、憑いて行きます！」

剣人は浩太の決心を聞くと、静かに頷いた。

そして、携帯を手から浮び上がらせる。ディスプレイに瞬移の赤い文字が

浮かび上がると、携帯は消え、光の粒が剣人の中に吸い込まれていく。

この間 0・5 秒。

「うわぁ、なんですかそれ……」

「俺の力だ！」

「すごい……」

剣人は得意げな表情を浮かべ言った。
驚いた様子で剣人を見る浩太。

「ふ、すごいのはこれからだぜ」

剣人はそう言うと、浩太の幽体に触れようとするが
すり抜けてしまう。

「あれれ、幽霊はどうなのかな……」

「まあ、肩の辺りに手を置いてみるか」

幽体の肩に触れるというよりは、手の中にいれたかんじで
瞬移を試してみる剣人。

浩太は少し怯えた目で、剣人を見上げている。

「大丈夫、俺を信じろ」

「は、はい！」

頭の中で鬼塚家の玄関前をイメージすると、剣人が一言呟いた。

「行くぞ！」

驚嘆。

「着いた」

剣人は触れていた右腕の先に視線を送る。

「うわ、ここどこだ？」

浩太ちゃんと憑いてきてるな、幽霊でもokと……。

瞬移は触る対象がいかなるものでも、一緒に連れてくることが出るようだ。

「さーってと、中入るぞ」

「ん、開かねえ」

「留守か？」

剣人が立派な大きな木の門を何度も揺するが、鍵が掛かっていて開かなかった。そんな様子をよそに浩太が得意げに、門をすり抜け向こう側に行ったかと思うと、また帰ってきて更に行ってと往復を何度も繰り返す、優位性を見せ付けていた。

「はいはい……幽霊はいいね」

これみよがしに見せ付ける、浩太の無邪気な姿に呆れ気味に目を眇める。

「門にチャイムついてないぞ」

剣人は門を見渡すがどこにもホンが設置されていない。

なんでないんだよ……

「誰かいませんかー……！！！」

大きく息を吸うと中へ向けて大きな声を放った。
しかし返事は帰ってこなかった。

「うーん、仕方ないなあ……今日は帰るか」

剣人は諦めて家に帰ろうと、浩太に手を振って呼びつけようとした時

突然上空から聞こえた老人の声で足を止めた。

「あ、すまなんだな」

その声のする方を見上げると、源信が地上から十メートル程の高さに浮いている。

「うわ……」

その姿に驚き思わず尻餅をつくと、口を開いたまま源信を見上げた。

「源信様！ な、なんで空に浮いてるの……？」

震える指先を源信に向けた。

「ふん、馬鹿たれ、勉強不足な奴だ」

「せっかく力与えてやってるのに、空舞の力も知らんのか」

「空舞？」

剣人が急いで巻物を調べようとするが……

「それは後でいいから」

源信は剣人を諫めて玄関前に下りてきたかと思うと、右手で剣人の肩に触れた。

瞬移で中に入れてくれるのか……あ！

「あ、あそこにいる幽霊をお願いします」

「ん？ あいつか？」

「そう」

剣人は浩太を指差すと源信に瞬移の対象に加えてもらおうよう頼んだ。

源信は視線を幽霊に向けると、大きな声で浩太に呼びかける。

「おい、その幽霊」

俺の事か？と言わんばかりに、自分の鼻を右人差し指で差す浩太。

「そうじゃ、こっちゃんこい」

源信が左手の平を幽霊の方向に翳し、手をひらひらして呼びつける。

浩太は静かに頷くと、滑るように源信の真横までやってきた。その左手がそつと浩太に宛がわれる。

「二名様ご案内」

源信の間延びした口調を皮切りに、瞬時に畳みの部屋へと三人は移動した。

「はい到着、御二人様1000円になります」

おどけた調子で源信は言つと、手の平を二人に差し出す。

「じっちゃん……なに遊んでるんだよ」

剣人は余程暇こいてるんだなと暗に思った。

「か、必ず払いますから！」

「私の母に言えば……」

浩太……、涙浮かべながら……冗談通じない奴……。

「こらこら、間に受けるな、幽霊」

源信は罰の悪そうな顔を浮かべて、持っていた節くれだった杖の先を浩太に軽く当てた。

「いて」

その先が当たると、浩太の頭が少しだけ下にずれる。
剣人はそれを見て、思わず源信に言った。

「じつちゃん、幽霊に触れるのか？」

「触れるぞ、はぁ……しかし、お前本当に勉強不足じゃの〜」

目を瞑り頭を左右に振って、剣人の無知に呆れていた。

「なあ、じつちゃん」

「話があつて来たんだ」

「聞いてくれるか？」

源信は剣人の言葉に返事をせず黙ったまま、お茶っ葉を湯のみに
入れて、ポットのお湯をそれに注ぐ。

向かい側に座る剣人と更にその横に座る浩太に、時折細い眼で視線を飛ばしていた。

「剣人、ちよつとこつちこい」

「ほい」

源信の言葉に頷くと、立ち上がりテーブルの向かい側に回りこんで、傍らに来て正座した。

右手で陶器の茶碗にお茶をいれながら左手を剣人の頭に当てる。

「幽霊は線香でいいか？」

「僕は特に……」

「遠慮するな」

お茶を注ぎ終わると、剣人の頭から手を離れた。

古びた木箱から線香と香皿を取り出し、線香を皿に挿すと、指先からライターみたいに火が出たかと思うと、それを線香に近づける。炎が線香に燃え移り赤くなると、皺くちやの唇を細くし、ふつと息を吹きかけた。

周りに立ち込める線香の匂いに、浩太はうつとりとした表情を浮かべている。

「源様ってマジシャン？」

その様子を見ていた剣人が思ったことを口にした。

「ふー、お前って奴は……」

「まあ、修行不足は目を瞑るとして、取りあえず、お前の言いたいことは分かったぞ」

「へ？」

「お前はこの幽霊を殺した影坊主の事を聞きにきたわけじゃろ？」

影坊主？ 浩太を殺したかもしれない坊さんの事が……しかし、まだ何にも言っていないのに、何で分かるんだ？

「た、たぶん、そうだよ」

確信がきつちりもてないが、剣人は取りあえず肯定を試してみた。

「で、お前はこうも思ってるだろ？」

「出来れば影坊主を倒したいと」

源信は目を眇めて剣人の反応を見ていた。

剣人は初めは源信の全てを見透かした言葉に驚き、啞然とした顔を源信に向けていた。

しかし、徐々に太い男らしい眉毛を吊り上げ始めると、真剣な表情に変わっていく。

「俺、許せないんだ……」

「浩太の命を奪った奴を絶対許せない」

「それに、放っておいたら、第二、第三の被害者が……」

「そんな事させるもんか……」

正座した太ももの上で両拳を握り締め俯く剣人。浩太は空を見つめながら、静かにそれを聞いていた。

そんな剣人の姿を目にして、源信は何か確信めいたものを直感した。

こいつは、やはり……だが、まだまだ未熟、さてどうしたものか

源信はふーっと深い息をつき、目を一度細めた後、かっと大きく見開き

剣人を見据え一際大きな声で話し始める。

「剣人よ、はつきり言っぞ」

「今のお前では影坊主にはどう転んでも勝てない」

源信は剣人に厳しい目つきで現実を語った。

剣人は動揺した様子で、源信に力ない目を向ける。

「奴は妖怪の中でも底辺に位置する下級妖怪」

「わしは妖怪や霊体の強さによってランクをつけていての」

「SS、S、A、B、C、D、E、F、それ以下に分けている」

「ワシが見立てた影坊主の強さは、F級、そうF級妖怪じゃ」

「そして、そのF級妖怪にすら、今のお前では勝てない……」

源信の言葉が胸に突き刺さる。

視線を太ももに置いた握りこぶしに向け、体を強張らせた。自分の非力さに体を震わせ憤りを顕にしていた。

その様子を見て取り、源信は表情を緩めて柔らい口調で言葉を切り出す。

「取りあえず、お前、基本を覚えていくか？」

「うちで今日一日修行していけ」

「うまくいけば、F級クラスくらいなら倒せるようになるかもしれないぞ」

「え、本等ですか？」

「うむ」

右拳を持ち上げ内側に力強く握りこむ。

失いかけた自信を取り戻したのか、強気な表情を浮かべていた。

俺はやる……絶対強くなる……

「あら、剣人も来てたの？」

まさかの声に慌てて振り向く剣人。

見ると、雫が柔道着を着て、顔に汗を滲ませながら立っていた。

「あれ……、お前なんでここいるの？」

「ああ、今日ね、私も源信のおじーちゃんに力もらったの」

「ええええええ」

目を大きく見開き、源信と雫の両方へ素早く視線を往復させる。
源信は口端を右上に引っ張りやけていた。

雫。

「源信様、どういふことだよ」

「力は陽の力を持っている奴にしか与えないんじゃないの？」

剣人は半ば混乱気味に源信に問いかけた。

散々長話を交わし色々言われて、やっと力を手にした剣人。

手にするまでの時間はさほど長くは無かったが、その過程がとても重く感じられたのも事実。

そんなやつと手にした特別な力を、あっさり雫にも分け与えたと言う。

軽いんじゃない？って剣人が思っても不思議ではなかった。

「まあ、二人座れ」

源信がそう言っただけでその場に自ら先に座った。

剣人は源信に顎で促され、立ち上がりかけた体を、座布団の上にお尻からゆっくり落としていく。

道場でさっきまで稽古でもしていたのだろうか、雫は顔や手に汗が滴り落ちていた。

首に掛けていたタオルでその汗を軽く拭いさると、剣人の横に静かに座った。

二人が向いに座るのを確認した源信は、真剣な表情を向けて語り始めた。

「雫はな、自ら力が欲しいと、ここへやってきたんじゃない」

「しかも、力を得るためになら陰の者とも戦っていいと」

その言葉を聞くや、雫の方へ振り向きざまに、強い口調で剣人は言葉を投げかける。

「雫、なんで力欲しいんだよ」

「それに陰の者と戦うってどういうことだよ？」

剣人は真剣な表情を向けて、強めの口調でその真意を問いただす。

「私……」

雫は何かを言いかけたが、言葉をすぐに引つ込め下を向いた。

その真意は実は単純なものであったが、今、剣人の前では言いづらかった。

「わ、私の勝手でしょ、ほつといて……」

雫はその理由を今は言いたく無かったので、剣人と反対方向に顔を背けて

突っぱねた。

「なんだよ……」

多少不機嫌そうに低い声で言ったが、雫の性格は良く知っていた。これ以上言っているとケンカになるのは目に見えている。

「ま、いつか……」

剣人は問いただすのを止めて、その場で軽く頭をうな垂れた。
言いたいことは山ほどあったが、それを敢て感情と共に抑え込んだ。

源信はその二人の微妙な空気を、意に介せず話を続ける。

「ワシも初めは面食らったぞ、だが、雫が本気なのは一目で分かった」

「そして、その時雫の体に溢れんばかりの陽のオーラが湧き立つのを見てしまった」

何！？ 雫にも陽の力が……？

剣人は雫の横顔に思わず目を向けた。

「ワシが力を与える者の条件、それは性別でもなければ、力の大小でもない」

「要はいかに、本気であるか、そして、陰の者に立ち向かえる心の強さを持っているのか」

「その二点がとても重要なんじゃない、そしてワシは雫がその二点を兼ね備えていると判断した」

雫が……

雫は真面目な顔で宙に視線を置いたまま、黙って話を聞いていた。普段のどこかおっとりとした、雫の雰囲気とは何かが違う。

剣人は凜とした表情を覗かせるその横顔から、それをひしひしと

感じていた。

源信は二人の様子はなんのその、マイペースで次々に言葉を並べ立てていく。

「雫はな、お前ほどじゃないにしろ、陽の者としてのポテンシャルは並ではないぞ」

「こいつが？」

「なによー!」

目を丸くしながら、雫の横顔に疑念の目を向けた。

雫は多少蔑が含まれた剣人の言葉に、不機嫌な顔を向け口を尖らせる。

目を細くして剣人を観察していた源信が、おどけ気味に口を開く。

「ははーん」

「お前あれか、雫より陽の力はずっと上だと思ってるんだな」

「いや、そんなこと……」

押し殺し気味に言葉を発する剣人。

テーブルに視線を下ろして、手を足の太ももの上で遊ばせていた。

雫より力を先に使ってるんだし、今日使い出した人間よりは、自分の方が上だと言う気持ちは諫めない。

「確かに、先に力を使い始めたのはお前だし、ポテンシャルじゃお前の方が遥かに上だが……」

「雫の吸収力と勤勉さは大したものじゃぞ」

「現にここに来て能力を使えるようになってから、5時間しか経っていないが」

「その間ワシの話を真剣に聞き、主たる力の名称とその効果を頭に叩き込んで、それをワシとの組み手で実践した事によって」

「既にその実力はF級妖怪を軽く凌ぐじやろうな」

源信に色々褒められて、雫は照れ臭そうに微笑んだ。

しかし、その雫とは対照的に剣人の心中は、大波が激しく浜に押し寄せるが如く、荒々しく揺れ動いていた。

剣人はなんといても男だ。そして保守的な父母から、男は強くあるべきという理念を植えつけられていたため、今の源信の言葉に火がついたのは言うまでもない。

「それってつまり俺よりこいつが強いって事ですか？」

「そうじゃ、今のお前よりずっと強いぞ」

「なんなら、組み手でもして試してみるか？」

「そんな……」

その流れを聞いて一番驚いて、そして困惑を見せたのは雫だ。

じよ、冗談じゃないわ……なんで剣人と……

雫は源信の顔を見つめて、手を合わせて苦悶の表情を浮かせる。
言葉は発していないが、剣人と戦う事に対する強い拒否を源信に送っていた。

「はー、仕方ないの〜」

「じゃ、それは無しにするか、それじゃあ……」

「いや!!!」

源信が雫の意を汲み取り、違う話を切り出そうとした時、剣人が立ち上がって叫んだ。

「雫、俺と戦ってくれ!!」

「ええ……」

「お前の力が見たい……」

剣人の目に熱い炎が渦巻いているかのように、やる気を全面に押し出していた。

男の意地みたいなのを滲ませている。

その暑苦しい視線を一身に受ける雫。

困惑気味に顔を引きつらせ、両手の平を宥めるように、剣人の顔の前に力なく出していた。

苦笑を浮かべながら、源信の方にちらちら視線を送る。

ちよつと……本気だわ、剣人。どうしょー！？ 源信
様なんとかして……！

「雫、もう男がここまで言うては、止まるもんじゃない」

「返り討ちにしてあげなさい！」

雫が困っているのは分かっていたが、剣人のこの高ぶった様子はとても治まる様なものではなかった。

源信は半ば諦め気味にそう伝え、最後には口元を綻ばせ、雫にやけっぱち気味な言葉を飛ばしていた。

「そんな……」

「これはワシの命令じゃ！」

「拒否すれば力返してもらうぞ？ いいのか？」

その言葉を聞き、雫の表情が一瞬曇る。

そんな、せつかく力を得て、結構分かってきたって言うのに……でも剣人と……

しばらく雫は困った表情を浮かべ、顎に人差し指を当てて頭の中で葛藤していた。

そうだ！ すぐに負けちゃお……

「雫、本気でかかってこいよ！」

「手加減したら絶交だかな」

剣人の言葉でさっきの案が、早くも打ち崩される。
窮地に追い込まれ、苦悶の表情を浮かべる雫。

どうしよーーーー！？

地獄界、セラ洞窟。

「よし、お前たちこっちょこい」

源信の部屋の壁に立て掛けられた古めかしい大きな鏡台。

真正面に接近して立つ人間の姿が、すっぱり入るくらい大きな鏡の前に、源信は真直ぐ向き直りその場で足を止めた。

「じゃあ、この鏡の中に入るぞ」

「はい……」

雫はその源信の突飛な言葉に、慌てる様子もなく頷いた。

「え？ 鏡の中って何だよ？」

剣人は雫が源信の言葉に何の動揺もなく頷いたので、驚いて周りにその意味を問いかけるも返事は返ってこない。

「ほんじゃわしから」

「お邪魔しまーす」

源信は鏡に向ってひょいと小高くジャンプしたかと思うと、鏡の中へ小さめの体が吸い込まれていった。

その後を他人の家の門口で挨拶するかのようにして、続いて中へ雫も入っていく。

「うわ、なんだそれ」

二人が鏡の中へ淡々と入っていくのを目の辺りにした剣人。

呆気にとられた表情を浮かべる。

そして、鏡の正面で右往左往しながら、踏ん切りがつかない様子でその場に留まっていた。

「まあ、あの妖怪じーさんの家だし、これくらいあっても不思議じゃないよな」

剣人が源信に聞こえてないだろうと思って、その場で言いたいことを言つと

「ちゃんと、鏡の中にも声届いてるぞ」

「ごちゃごちゃ言っていないで入ってこんかい」

「よ～～わ～～～む～～し～～け～～～む～～し～～～ウヒヤヒヤ」

鏡の中と外の世界は密接に繋がっていて、音は鏡の内からも外からも聞こえるようになっていた。

中々警戒して入ってこない剣人に向って、怒りの琴線に触れるだろうと思われる言葉を源信はおどけて外へ投げかけた。

案の定、剣人はそれに顔を真っ赤にして反応した。

「弱虫だ～～～～、言わせておけば～～～！」

「浩太！　ちよつと中いつてくるから、その辺散歩しててくれ」

部屋で静かに正座したまま動かない浩太に向ってそう告げると、浩太は何も言わず、静かに頷いて、壁をすり抜けどこかへ飛んでい

った。

「さーって、行くぞ〜、オラー〜！」

部屋の後ろに3歩下がると、助走をつけて中へ踏み込む剣人。鏡に当たる瞬間思わず、胸の辺りで身を守るように手を交差させ目を瞑る。

中に入ると、何か地面にある出っ張りに足を引っ掛け、前のめりにこけそうになったが、右足で持ちこたえ、たたらを踏みながらも、倒れこむのを拒否した。

「welcome」

源信は相変わらず軽い感じで、英語で剣人に話しかけた。

「ようこそ、地獄の3丁目、セラの洞窟へ」

剣人は地獄という物騒な言葉を耳にして、真顔で源信に問いかける。

「地獄ってなに？ 洞窟ってなんなのさ」

「なーに、簡単なこつた、ここは地獄にあるセラ洞窟の一部を間借りした空間なんじゃ」

「閻魔大王に頼んで、あの部屋とここの空間を大鏡で繋いでもらってある」

剣人は相変わらずなんでもありだなって思ったが、今までの経験上、さもありなんつと納得し、大して動揺を見せなかった。

もう妖怪だろうが、地獄だろうが、天国だろうが、何でも来いといった心境で開き直っていた。

「外で修行すると、建物やら、地面やら、石燈籠やらが壊れてしまふんでな」

「激しい戦いや修行は、ここでする事になっている」

「なるほど」

剣人は話を聞き終えると、まじまじと周りに視線を這わせながら、この場所の全体像を把握しようと努める。

赤い岩肌が地面や周囲から天上まで覆うドーム上の広い空間。

大きさ的には学校の運動場くらいはあるだろうか。

小さな岩が地面にあちこち伸びているのが分かる。

足場悪いな……こけないようにしないと。

#

「さあ、お前たち夫婦喧嘩始めなさい」

源信がいやらしい笑みを浮かべながら、二人に視線を巡らし言った。

「夫婦喧嘩って……」

「お前たち両思いじゃろ？」

「え……」

剣人が源信の唐突な言葉に反応したかと思うと、更に源信は真顔で二人に鋭い言葉を投げつけた。

次の瞬間、お約束の言葉が二人から、ほぼ同時に源信に向けて放たれる。

「そんなわけないです、ただの幼馴染ですよ！」

「んなことあるかよ、ただの幼馴染！」

ほぼ、同内容の言葉を同時に言った事に気づいた二人は、少し罰が悪そうに周りに顔を向けたり、口笛を吹いたりしてごまかしていた。

「おほん……、それより雫勝負だ！」

今の雰囲気嫌ってか、先に剣人が雫に向って口を開いた。

「ええ、うう、本気でやるの？」

「当たり前だ！」

剣人は鏡に入る前の熱い闘争心を思い出したのか、急に顔つきを変え雫に強い口調で言った。

駄目だわ……これは何言っても聞かない目よ、仕方ないな。

「ああ、雫よ、お前『陽力』と『守身』の力だけ使用しなさい」

「今の剣人に『神器』まで使つと死んじゃうかもしれないからな」

「分かりました」

源信は怪我でもされては困ると思い、力を二つに絞るよう雫に指示した。

剣人は二人の会話の中で聞きなれた力の名称一つと、知らない力の名称二つがある事に気づいた。

しかし、今巻物を調べてる時間も無さそうだし、取りあえず聞き流して、雫の動向に目を向けていた。

「仕方ないけど、剣人……いくよ」

雫は低い声でそう剣人に告げると、覚悟を決めたのかその場で両足を隙間無く閉じて、足元を揃え神妙な面持で佇む。

剣人は雫が力の発動のエフェクトをどういうものにしたのかが気になり、その発動の瞬間を逃さないように目を凝らしながら、その時をじっと待っていた。

雫は両手を前に突き出し、まるで、水道の蛇口から流れる水を溜めるような感じで手の平を合わせた。

その受け皿のように模った両手の平を水平にしたまま口元にもつてくると、そこへふーっと思を吹きかける。

すると、手の中から2枚の小さな紙ふぶきみたいな物が空に放たれると、空気に溶け込むように消えて、光の粒が雫の体全体に吸い込まれていく。

なんか、地味だけど、かつこいいぞ……

剣人はその美しささえ漂わず、雫のエフェクトに目を奪われていた。

光が雫の体に吸い込まれると、光の蛇みtainなものが雫の足元から伸びてきて、幾重にも雫の体に巻き付き、やがてその姿を完全に光で包んで隠してしまう。

次の瞬間、雫を覆っていた光が体から離れ、無数の小さな光の粒子となって四方に飛び散ったかと思うと、雫の姿が剣人の目に飛び込んできた。

「　　巫女さん？」

雫の姿を見て直感で剣人は言った。

「うん、そうだよ」

白い小袖に緋袴、足袋に草履、典型的な巫女装束を雫はその身に纏っていた。

「お前なんで巫女？」

剣人は雫のその姿を見た第一印象は、『とても似合っていて、かわいい……』だった。

取りあえず、巫女ルックを選んだ理由を尋ねてみる。

「私、子供の時から毎年正月に神社参り行くんだけど、そこにいる巫女さんの姿を見て、いいな〜ってずっと憧れてたの」

「ほー」

「まー、あれだ、やろっか……」

剣人はあまりに清楚で可愛らしい巫女さん姿の雫に、どこか戦意を削がれてしまっていた。

落胆。

「じゃ俺も」

剣人はそう言うと、力を発動しようとした　が、一旦でた携帯のディスプレイに赤い文字が一つも灯らないうちに、すぐに携帯が消える。

能力発動を途中でキャンセルしたようだ。

剣人はそれなりに力の種類を知ってはいたが、戦闘系の力の知識がほとんど無かった。

これから雫と戦うにしても、守身以外思いつかないのである。その事を能力の発動中に気づいた剣人は途中でそれをキャンセルし、その場で腕を組んで小首を傾げていた。

「何してるの？」

剣人のやるきがあるのか、無いのか判別つかない様子に、少し不機嫌そうに雫は言った。

実際の所、本当は剣人と戦いたくは無雫。

剣人の強い要望に合わせて、力まで発動させてるのに、その雫の目の前で力の発動を止め、あまつさえ、背中をこちらに向けて悠長に物思いに耽る剣人に、温和な雫でもさすがにいらいらしていた。

そうだ！　取りあえず守身は当たり前として、あれも追加だ！
これでいこう。

「雫悪い悪い！」

剣人は何か思い出したのか、顔をあげて向き直り、呆れた顔を浮

かべる雫に愛想笑いをふりまき手を振った。

そして、一転して真剣な表情に変えると、両足を開き気味に地にどしっと構え、力の発動を試みる。

携帯が剣人の右手の平から、開いた状態で浮かび上がると、ディスプレイに赤い文字が映される。

それが手からふわっと離れ、空気に溶け込むように消えると、光の粒が剣人の体の中へと吸い込まれていく。

「OK！」

剣人はその場で屈伸運動をすると、あっけらかんとした顔を雫に向けた。

一応守身は発動しているものの、イメージが曖昧でその姿に変化がなかった。

透明な防御壁が、体を纏っている状態だ。

雫の巫女姿を眺めながら、今度この力を使うまでに「格好いい戦闘服」でも考えておかないといけないなっと思暗に思う。

「さてやろうか」

前屈み気味に対峙し、多少緊張気味に動きやすい姿勢で構える二人。

剣人は足元が気になっていた。

さつき、この世界に来たときに足を引っ掛けたような小さな岩が、そこかしこに点在していて、とても足場が悪いからだ。

「ふふふ、雫いい物見せてやろう」

剣人は雫に不敵な笑みを浮かべ言った。

足元と天井に視線を往復させながら、距離を測り何かを試そうと
しているように見える。

大体把握したのか、視線を足元に向け深い息を吐くと、意識を集中し始める。

次の瞬間 剣人の足がすーっとその場から上離れたかと思うと、
地から1Mの付近まで浮かび上がっていた。

「ははは、どうだい、見たか！」

雫をその位置から俯瞰し、得意な表情で吠える剣人。

「へー驚いた、空飛べるんだ」

「さっきワシが見せてやったからな」

雫はこの力は知らなかったようだ。

目を丸くして剣人に物珍しげな視線を向けていた。

源信は退屈そうに剣人を見上げている。

御託はいいから、さっさと戦って欲しいと言うのが本音だろうか。

#

剣人は空に浮いたおかげで、足場の悪さを気に留める必要がなくなった。

取りあえず、試運転とばかりに、地から1M付近に広がる空間を
アイススケートでもするかのように、比較的早い速度で体を滑らせ

る。

洞窟内の冷たい空気を顔で受けながら、気持ち良さそうな顔ではしゃぐ剣人。

大体空を飛ぶ感覚が掴めて来ると、雫から10メートル程離れた場所に、弧を描くようにして止まり、宙に浮いたまま向き直った。

「じゃいこうかな……」

空手のように両手をずらして構えるものの、型はでたらめだ。

ただ、やはり戦うと言っても相手は女の子、しかも雫。

躊躇する心もあるし、手加減もしないといけないかなと思いつながら、最初の一撃をどういったものになろうか頭を悩ませていた。

まー、取りあえず、守身もある事だし、ダメージなんて与えられないんだから、軽く蹴りから行くか……

「ほんじゃ、行くぜ!」

剣人は大きめの声で雫に向けてそう言い放つと、雫に向って素早く空を滑走していく。

その勢いを体に乗せて、右足を雫の胸の辺りに蹴りだした。

「うわ、ぐは」

滑走する勢いと共に全体重を乗せて放った蹴りが、雫の守身でイメージ化された巫女服に触れると、ダメージを与えるどころか、逆に剣人の体ごと反対側へ弾き飛ばされてしまった。

「なんだ今のは!?!」

剣人はこの結果は想定していなかった。

いくら守身で守られていようと、ダメージは無理にしても、その壁に蹴りこむくらいはできるだろうと思っていたからだ。

しかし、実際は雫の巫女服を蹴った感触すら覚えないまま、何か見えない力に後方へ吹き飛ばされた。

その様子を何か気が抜けた表情で眺める雫。

「どうじゃ、剣人よ」

「雫の守身の違いに気づいたか？」

空でこめかみに汗を流しながら留まり、雫に動揺した目を向ける剣人に、源信が唐突に聞いてきた。

「うーん、違って？」

「やれやれ、もっと分かるまで色々やってみなさい」

多少呆れ気味に目を眇めて剣人に言った。

「よーし、それなら！」

そう言って、雫からどんどん後方へ空を移動し離れていく剣人。

「よしこつから」

剣人と雫の距離は既に30Mくらいありそうだ。

空に浮いたまま足をがに股に開き、頭の前で腕を交差させた。

そして、雫に向き直り何かを叫びながら、さっきより幾分早めに

雫に突進する。

その勢いを目にして雫は思わず、両手を内側に引き身を固める。

「ダイビングクロスチョーップ」

何かのプロレス技の名前だろうか、スピードを乗せたまま滑走し、雫に接触する手前で、頭、背中、足の先まで水平になるように浮かして、クロスした両手の一番堅固な部分を雫の胸の辺りに突き当てた。

その衝撃は先ほどとは、比べ物にならないはずだった。

が、結果は変わらなかった。

剣人は音もなく後方へ弾き飛ばされ、その勢いで体勢を崩し、空でくるくる回転しながら、最後には地面に背中から激しく叩きつけられた。

「大丈夫……!?」

あまりに盛大に吹き飛んで地面に叩きつけられた剣人を見て、思わず雫が驚嘆の声を漏らした。

安否が心配になり急いで駆け寄る。

「糞、いてて……」

普通なら大怪我をするところだが、剣人も守身は張っているため、ダメージはない　と思われたが、背中を軽く何かに打ちつけたような痛みを感じて低く唸る。

「どっか怪我した!？」

「ば、馬鹿、真剣勝負の最中だぞ……」

剣人は仰向けに倒れた自分を、心配して体を起こそうとする雫の右手を払った。

「そんな……」

「すまね、でも自分で起き上がれる」

雫は本当に剣人の様子が心配で起こそうとしたのに、手を冷たく払われ、悲しみを瞳に浮かべていた。

そんな雫の表情を見て、剣人は後ろ指を指される思いに駆られ、罰が悪そうに頭を掻いて雫に呟いた。

剣人は震える右腕を傍らについて半身を起こすと、体を振り倒れた辺りに目を凝らした。

すると、その場所にあったであろう出っ張った岩の残骸があるのが見てとれた。

守身の壁が無ければ、背骨が折れていたであろう。

その岩の残骸の碎け具合が、それをまじまじと物語っていた。思わず背筋に寒いものが駆け抜けていく剣人。

「剣人よ、今ので分かっただろ」

「雫とお前の守身の圧倒的な防御力の差が」

相変わらずのマイペースな口調で、源信は剣人に向けて言った。剣人は二度の失敗でその意味を理解し始めていた。

その場に落ちている石を拾って、握りこみ悔しさを顕にする。

そんな萎えかけた剣人をよそに、源信は言葉の刃を切りつけていく。

「言っておくがの、まだ雫は攻撃すらしておらんぞ」

「ただ突っ立っているだけじゃ、それなのに、お前は既にボロボロ」

「力の差は歴然、これ以上戦いを続けても意味はないぞ」

剣人はその言葉に自尊心を傷つけられ、悔しさに唇をかみ締め、体を小刻みに震わせていた。

そんな様子を意に介せず、更に留めと言わんばかりに、源信の口から重大な事実が言葉を通して紡がれる。

「ワシはな、神器の力なしなら、雫の攻撃を受けたとしても……」

「大丈夫だろうと思っていたんじゃが、思った以上にお前の守身の力が貧弱すぎる」

「お前雫の攻撃受けたら死ぬわ、話にならん」

「この勝負終りじゃ、雫戻るぞ」

「はい……」

剣人は源信が吐き捨てるように矢継ぎ早に放った言葉に、強い衝撃を受け、空に視線を置いたまま固まっていた。

源信は洞窟の岩肌に出来た七色に光る、鏡とこの世界を繋げる空間に身を投じ、外へと出て行った。

「い」……」

力ない顔を浮べ呆然と、座り込んだまま動かない剣人。
心配になり雫が声を掛けるが、押し黙っていた。

「じゃ先行くね」

今は声を掛けても無駄だと判断すると、雫は立ち上がり剣人にそう告げた。

出口の空間の前までゆっくり歩み寄り手前で止まる。

雫は振り返り、俯く剣人の姿を沈痛な面持で眺めていた。

しかし、外から源信の自分を呼ぶ声が聞こえたので、仕方なくその場を後にする。

怪物。

源信と雫は茶の間に帰ってくると、テーブルを囲んでお互い顔が向き合う位置に座って、沈黙の時間を共有していた。

鬼塚守や、その母は今日は外出しているのか、この家の中に占める音源は、源信がお茶をすすする音と時計の針が動く音くらいだった。鏡の中から音は聞こえてこない。おそらく、まだ剣人は絶望に暮れ放心状態で俯いてるんだろう。と二人は暗に理解していた。

どこか元氣のない目で、雫は源信に頂いたお茶の入った湯のみを手にして、それを口に運ぶ手前で止めたまま、黙りこくっていた。その様子が多少源信も気になったんだろうか、雫の悲哀に満ちた眼の先にあるものは分かっていた。

源信は、髭を摩りながら雫に向き直り、取りあえず、重苦しい雰囲気を変えるべく、雫に軽く声を掛けてみる。

「雫、そんな心配せんでええ」

源信の不意の言葉に雫は顔を上げた。

「あいつの事じゃ、すぐに気づくじやろう」

「何にですか？」

雫の問いに源信は目を細めて、いつになく神妙な面持でお茶をすすする。

お茶を飲み終わると、多少強めに湯飲みをテーブルに音を立てて置き、雫に視線を合わせて口を開いた。

「自分の内に秘められた怪物性にじゃ」

#

剣人は洞窟の中で胡坐を掻いて、両足の関節にそれぞれの手を置いて、瞑目し何かを考えていた。

雫はまだ力を使い出して5時間しか経っていない。それなのに、先に力を使い出した俺より、守身の防御力はいつの方が桁違いに強い……それは何故か？

剣人はさっきの組み手の最中の様子を頭の中で再現していた。

複雑に交錯する思いと共に、様々なイメージが明滅する。

そんな心に浮ぶ映像のある一場面を思い出し、剣人ははっとして目を開ける。

そうだ、陽の力は俺が上、使い出したのも俺が先。ならば絶対俺のほうが有利。

その状態でこちらが劣勢を演じてしまったのは、出すものを出してないからだ！

剣人は胸の奥から何か熱いものが込み上げてくると、その場ですっと立ち上がった。

さっきまでの力ない剣人の目とはまるで違う。

懐から巻物を取り出すと、ある力の文字を調べ始める。

『陽力』

体内に秘められた陽の力を解放し、それをオーラとして練りだすことが出来る力。

剣人は源信が雫に言った言葉を思い出した。
あの雫との会話の中に出てきたこの力の名称。

「ふむ、良く分からないが、発動してみるか」

巻物をまた懷にしまいこむと、その場で仁王立ちになる。
そして手の平から携帯が現れ、そこに陽力の赤い文字が浮かび上がると、いつものエフェクト完了後、力が剣人に宿る。

さて、どうしたらいいものか？ オーラを練りだす？

剣人はその使い方が今ひとつ分からないが、取りあえずその場で立ったまま、体全体を力ませてみた が何も起こる様子がない。

「うーん、何か違うのか？」

じゃー、逆に力抜いてみるか。

その場で軽く跳ねて、両手の平を宙でぶらぶら振って、体の力を抜き、氣を楽にしてその場で立ち尽くす。

落ち着いた空気が剣人の周りを包み、静寂が辺りを覆う。
練りだすという言葉から、なんとなく、剣人は体から何かを発散させるようなイメージを頭に描いてみる。

すると 体の中心部分に何か温かい物が集まると、それが体全体に行き渡り、更には、それらが外に肌を通して、吹き出るような

感覚を覚える。

その違和感が気になって、おもむろに閉じてた目を開けると、剣人は驚嘆の声を上げた。

体全体に視線を這わせる剣人。

手や胸や足から炎のような色をした湯気が吹き出て、全体を覆うように立ち込めているのが分かった。

「こ、これが陽力？」

「そうじゃ、それが全ての力の源たるもの、陽力じゃ」

突然洞窟内に響いたしゃがれた声に驚き、その声のした方へ視線を送ると、源信と雫が七色の扉の前に立って、こちらを見ていた。

「やはり、お前はとんでもない陽の力を秘めているな」

剣人の体から溢れ出る陽のオーラを、目を細くしてみつめる源信。

その目にはどこか厳しさすら漂う。

「剣人よ、もっと意識を集中して、力をお腹に溜めるようにして、そこから対外へ放出するようなイメージをしてみなさい」

源信の言葉に剣人は静かに頷くと、目を閉じ、言われたイメージを試してみる。

思いつきりお腹に、そして一気に外へ放出するイメージ！

そのイメージを頭で描いたのと、ほぼ同時に 剣人の体から爆

風のようなものが吹き荒れ、周りへとてつもない空気の圧力を放出していた。

「なにこれ、きゃああ」

雫はその余りの風圧に吹き飛ばされそうになって、源信の肩を咄嗟に掴んだ。

源信はその風圧を諸共せず平然と佇み、吹き付ける風に一層目を細くしている。

「こりゃ、とんでもないな」

「これほどとは……まるで台風じゃ」

源信は細くしていた目を多少開いて、口元を緩ませ呆気にとられたような表情を浮かべた。

また目を細くすると、一息ついた後、堰をきったように言葉を力なく連ねる。

「お前、もう、雫と戦っちゃだめだぞ、組み手もだめ」

「雫が死んでしまうわ……」

「へ？」

剣人はその意外な言葉を聞いて、意識が散漫になるとオーラの発散が止まる。

きょんとした顔で源信を見やった。

さっき、源信が部屋を出て行くときに吐いた言葉と、まるで逆の事を言われ、少し困惑気味にその場で立ち尽くしている。

「剣人よ、取りあえず茶の間に来て、色々教えてやろう」

「陽の力と他の力の関連性についてな」

源信はそう言い残すと、またひょいと七色の扉跨いで、向こうの世界へと小さな体を吸い込ませる。

#

源信を一人向い側に置いて、剣人、雫と並んで座る。

鏡に入る前と同じ席の配置。

源信以外の二人は少し落ち着きが無い様子で、肩をそわそわさせていた。

特に剣人はさっき陽の力を使ったばかりで、興奮気味なところがあり、早くその説明を聞きたそうに、テーブルに右手の平を置いて人差し指で表面をトントン叩いていた。

「落ち着かんかい、剣人」

テーブルを叩く音を耳障りに感じた源信が、訝しげな目を向けて戒めの言葉を放つ。

剣人は罰が悪そうに苦笑し、手を膝元に即座に引っ込めた。

「まあ、話始めるか」

少しテーブルに体を寄せると、源信が二人、特に剣人に向けて長くなりそうな話の口火を切った。

「陽力とは、全ての力の源とさつき話したが、そのまんまじゃ」

「この力は発動しただけでは、余り意味を成さん」

「要はこの力は単体にあらずじゃ、他の力と組み合わせることにより、初めてその力の真価を発揮する」

一呼吸おいた後、更に言葉を紡いでいく。

「例えば、守身じゃ、初めお前と対峙した時、雫は陽力を発動した上での守身の力をその体に纏っていた」

「雫は陽の力があるとは言え、まだまだ未熟な上に、剣人ほどそのポテンシャルは高くない」

「だから、あの時お前は、雫の体から微かに溢れ出る陽のオーラを目で捉える事ができなかったはずじゃ、それほど、か細く、薄いオーラじゃった」

雫は少し恥ずかしそうな顔で下を向いた。

「しかし、その薄い陽のオーラが作用した雫の守身のパワーを、お前は身を持って味わったはずじゃ」

剣人は息を吞んで、黙って頷く。
だんだん、剣人の脳裏にこの力の意味とそれを使うことの重要性

が分かってきていた。

そして ……

「この力は何も守身の力にだけ作用するわけじゃない、他の戦闘系の力や、防御系、また別の力の大小や範囲にも影響する」

「言わば、わしの力を使う者の優劣は、陽力で練りだしたオーラの絶対量で決まるといっても過言じゃない」

「そして、剣人よ、お前の陽の力は並じゃない、いや、あのとてつもない陽のオーラを見て確信した、お前は怪物じゃ」

そして その危険性にも剣人は気づいていた。

もしあのオーラの全力を拳にこめて、相手を殴った場合、相手は

…… 剣人の背筋に冷たいものが走る。

「その陽の力を全てオーラとして練りだし、訓練を重ねたお前なら、高等妖怪にも遅れはとらんじやろうな」

あっけなく源信が放った重い言葉に、剣人は弾かれたように、顔を上げ視線を源信に向けた。

まじかよ？ 俺が…… 高等妖怪と互角に？

散々自分の非力さに嘆いて塞ぎ込んでいた剣人に、新たな思いが割って入ろうとした時 源信がそれを戒めるように楔の言葉を放つ。

「だが、心して聞け、その力決してむやみに使うなよ」

「お前はまだ未熟じゃ、力のコントロールができない」

「お前はまず力の使い方、力をセーブする方法を覚えるべきじゃ」

「その特訓にはワシが付き合おう」

源信は長い話の最後をそう締めくくると、剣人に厳しい目を向けて袖を捲くつた。

神に近い存在の源信が、これほど気合をいれて立ち向かわないと行けない剣人の実力とは？

誤算、ふりだし。

「剣人よ、遠慮はいらん、思いっきりかかってこい！」

茶室にいたまんまの和服に、細い木の杖。

とても戦うような格好に見えなかったが、前に対峙した剣人は怯えていた。

目の前にした者だけが分かる、異様な迫力に後退りさえし始める。

やっぱり、只者じゃないな。茶室でいた時とはえらい違いだ。

剣人は覚悟を決めたのか、陽の力を放出し始める。

さつきと同じように、剣人の体から放出されるオーラと共に、強烈な空気の流れが発生し、洞窟内の淀んだ空気をかき回す。

「うむ、大した力じゃ、そのオーラを拳に集中しワシを殴ってみろ」

「分かった、行くぜ、源信様！」

剣人は地を蹴ると、オーラを纏ったまま源信に向かって全力疾走をする。

あつという間に源信の前まで、間合いを詰めると、右拳にオーラを集中するイメージをし、そのまま拳を源信の腹部へと叩きつけた。

「「あり？」」

ほぼ同時に二人が同じ言葉を口にした。

オーラを纏った岩をも砕くであろう剣人の一撃は、源信の腹部にめり込むかと思われたが、

和服の表面でその威力が完全に相殺され、その動きを止めていた。

「なんじゃ？ そのへなちょこパンチは？」

「おかしいな」

剣人はオーラをその場で搾り出し、何回も源信の頭部や腹部、肩へとオーラをこめた拳で打撃を与えるものの、まったく手ごたえがない。

「剣人ちよつとお前、そのオーラ持続したまま、守身に意識集中しとけよ」

源信がそう言ったかと思うと、突然、拳を剣人の腹に突き出した。軽く前に押し当てたように見える拳。

その軽いと思われた拳の衝撃を受けた剣人が、後方へ嗚咽とも呻きとも言えない声を発しながら、背中から凄い勢いで、洞窟のかなり奥まで弾き飛ばされていく。

「こりゃ、いかん！」

源信が慌てて叫んだかと思うと、その姿を一瞬にして、弾き飛ばされていく剣人の先に移動させ、向ってくる剣人の背中に手を突き出す。

激しい勢いで飛んできた剣人の背中を、両腕で楽々と受け止めた。

「ゴボ、ゴボ」

剣人は口からドス黒い血を吐き出し、お腹を押さえたまま声ともならない声を発していた。

その目に宿る輝きがどんどん薄くなっていく。
その様子を見て、死にかけている事を源信は瞬時に悟る。

「まずい！ このままでは死んでしまう！ ならば」

虫の息の剣人を足元の地面にゆっくり置き、仰向けの剣人の体に、
屈んで右手の平を素早く置くと、裂帛の気合と共に、何か白いオー
ラのようなものを剣人の体に注いでいった。

#

「剣人しっかりして！」

「うう……」

水中で目を開けたようなぼやけた視界の中、雫の甲高い声が薄っ
すら聞こえてくる。

曖昧な意識の中それに反応し、視界をはっきりさせようと目に意
識を集中させていく。

だんだん目の焦点が合い始めたのか、ぼやけた影の輪郭がは
っきりし始めると、

「雫……？」

「源信様！ 剣人氣がついたよー！」

剣人が雫の名前を掠れる声で漏らす。

雫はそれを聞いて口に手を当て涙を浮べ、喜びと安堵が混じった面差しで、源信に振り向き、意識を取り戻した事を大声で伝えた。

布団の上でが横になっている剣人の傍らで、泣きじゃくる雫。

目を覚ますまで剣人の様子を、不安に押し潰されそうになりながら、ずっと見守っていた。剣人の無事が分かり、それまでの不安と安堵する心が入り混じって、涙が止め処なく溢れてくる。

そんな雫の隣に、源信は罰が悪そうに小さく体を縮めて座り、剣人を見下ろす。

「剣人大丈夫か？ 本当に悪かった……」

源信は声量を押さえ気味に、静かに剣人に語りかけた。

さっき源信は剣人に治癒の力を施し、瀕死だった剣人を死の淵から呼び戻した。

傷ついた体、特に腹部から伝わった衝撃で破壊された肋骨や、内臓はその力によって完治していた。

それでも、思慮浅い自分の目論見が外れて、剣人を殺しかけた事には違いない。

「源信様、俺、なぜ？」

剣人は意識が明確になってくると、体にはもうダメージは残っていないため、半身を勢い良く起こした。

「話してもいいのか？」

剣人の疑問とする内容は、源信は分かっていた。

ただ、まだ自分への嫌悪感が渦巻く中、話しづらい。

一応、剣人に話す事への許可を求める。

源信が珍しく見せる気遣いを感じた剣人は、快活にそれに答える。

「もちろん！ ぜひ聞かせてください！」

中に立ち込める沈鬱な空気を払うような、剣人の大きな明るい声が部屋に響き渡る。

その勢いのある快活な声に、弾かれたように顔を上げ、気後れる二人。

だが、剣人がニカッと笑い元気な姿を見せ付けてくるので、徐々に二人に穏やかな笑顔が戻り始める。

「じゃ、話そうか」

剣人は掛け布団を完全に体から払うと、正座をして源信に向き直った。

「簡単に言うんじゃない……お前から溢れ出るオーラの激しさに惑わされ、本質を見抜けなかった。ワシの失敗じゃ、すまぬ」

源信がまた顔を俯かせて謝るのを見て、咄嗟に元気づけようと言葉を放つ。

「良くわかんないけど、源信様謝らないでいいよ、誰にでも失敗はあるさ、人間なんだから」

しかし、その言葉尻に微妙に違和感を感じる源信と剣人。

「ま、わし、ほら、人間じゃないしな」

「はは、そうだった……」

顔を見合わせ苦笑いをする二人。

その様子を見やり、雫は頬に一筋汗を流し、きょとんとした目で眺めていた。

薄ら寒い空気が部屋を包みかけると、

「それは置いといて……」

源信は口に手を当て一度咳き込むと、一言放ち会話の舵を取り本題に戻す。

「要はじゃ、お前から吹き出たオーラは確かにすごいものがあつた。しかし、いざそのオーラを使って攻撃や防御の力に回そうとするとき、お前の未熟さが表面に剥き出しとなる」

源信は更に色々説明しようと思ったが、言葉で全て語るのは大変だと思い、大まかな言葉で剣人に伝える。

「簡単に言うんじゃない！ 練りだしたオーラを操る事に関して、お前はずぶの素人だってこつた」

それに対して、剣人が何か言いたげに口を開きかけると、それを遮るかのように矢継ぎ早に言葉を紡いでいく。

「それでな、それをいちいち言葉で説明するのは大変じゃ。実践や

修行を通して教えていくから、お前今日ここに残ってワシ等と特訓じゃ、うまく行けば、F級妖怪くらいは倒せるくらいには仕上がるじゃろう」

「ええ！？」

剣人は自分の源信の見立てが、さっきより随分落ちている事に驚きを隠せない。

ちよつと前までは、上級妖怪とも渡り合えたとまで断言した源信。納得がいかないので、源信にその事を問いかようとすると、分かってたとばかりに、

「上級妖怪に勝てるといったのはじゃな、オーラのコントロールに磨きをかけ、熟練に熟練を重ねたお前ならってことじゃ、修行不足の今のお前じゃ、とっても無理、絶対無理、F級妖怪にも雫にも勝てないわ！」

その言葉に打ちのめされ、見開かれた目が閉じていくのに比例して、ピンと伸びていた背筋も前に傾いていき、額をテーブルに付きうな垂れる。

ふりだしかよ……

そんな剣人を視界の端に捉えて、雫がくすくす笑い始めると、テーブルで頭を転がし、雫の方に顔を向け剣人が睨んだ。

閃き。

「ほら、拳が当たる瞬間、お前のオーラ消えちまってるじゃろ」

源信と剣人はセラ洞窟内で猛特訓中だった。

陽の力のポテンシャルは相当高い剣人であるが、その使い方においては、全くでたらめで、源信はそれを軽い組み手の中で、剣人に自覚させようとしていた。

「みてみい、お前は攻撃にオーラを持っていくと、根こそぎそつちに練りだしたオーラ全てが行ってしまい、守身を強化するオーラが一個も残っておらん。だから、ワシの軽い攻撃で死に掛けたんじゃ」

「そんな事いつでもよ……」

四苦八苦する剣人。

息をハアハア言わせながら、汗を顔に大量にかき苦悶に満ちた顔で、源信にふらふらした拳を投げ出していた。

「それにな、ここ入って10分で、疲労しすぎじゃ。オーラを無駄に出してるから、疲れるのも

早いんじゃ、まあ雫も似たようなもんじゃが、20分くらいならオーラ出したまま戦えるぞ」

雫の名前が出るや、剣人は眉毛の端を吊り上げ、また拳に力を入れ始める。

今のところのライバルと言った所か。

「雫に何も特別な事は教えておらんぞ、たった5時間だしな。単に、

オーラを体に均等に張り巡らせる事だけを教えただけじゃ」

「源信様、そういうことは早めに言ってくれよ！」

剣人は拳を止めると、その場で尻から落として胡坐を書いて座り込んだ。

初めに練りだしたオーラは既に切れかけていて、再度練りだすには、休憩をとるしかなかった。

剣人は座って息を整えながら、源信に不満の目を向ける。

その視線に気づいた源信は軽く受け流し、平然とした顔を保っていた。

雫と同じ方法を初めから教えなかったのは、剣人の底力みたいなものを確かめるためだった。

#

「よし！ 源信様やるぜ！」

「ん？ あ、ああ」

剣人はついさっき息切れ切れで、座り込んだかと思っていたら、3分も経たない内に力強く立ち上がった。

その様子を見て、源信は多少驚いた。

オーラを使い切った後の体の疲労は、数分くらいで回復するようなものじゃ無いと経験則で分かっていたつもりだったが、剣人は既にピンピンしていて、瞳の輝きも更に増したかのように見える。

剣人は両拳を握り締め、肩幅くらいに開くと、腰のあたりにそれ

らを置いて目を瞑った。

深く息を一回吐いたかと思うと、目をかっと思開き、気合の声と共にオーラを練りだす。

「おお、またとんでもないオーラじゃな」

最初より更に剣人を覆うオーラの厚みが増していた。

それを目を細めて、本質を見極めようと源信の鋭い視線が投げかけられる。

「うむ、確かに凄くように見えるが、散漫じゃの、所々に隙間が見えるし、体を覆うオーラのウェイトもむらがある。薄く弱いところに強い攻撃がヒットすれば、お前は大きなダメージを受けることになる」

源信は剣人に近付き、体のオーラの薄い部分を杖で指摘する。

そして更に言葉を連ねた。

「イメージとしてはな、体全体を均等に覆う服を穿てる感じがいいな、そうじゃ、お前もこの場で守身使用時に身に纏う好きな服を頭で描いてみる、あれと原理は大差ないから」

「うーん、ま、やってみる」

剣人はまだその事について悩んでいた。

どうせなら見栄えのいい、格好いい物を身につけたかった。

オーラの発散を一旦止めて瞑目しながら、頭でイメージを構築し始める。

何にしようかな？ 格好いい服ってどんなのあったっけ…

…拳法着？　みたいな、いやいや、良く知らないしな。なら、鎧？
辞めておこう……

鬼塚の格好悪い五月人形みたいな姿が頭をよぎり、すぐにイメージを消し去った。

「うーん」

小首を傾げ、頭を悩ます剣人がふと何かを思いついた。
それを試したくて、思わず笑みが毀れる。

「よし！　決まった！」

剣人が大きな声でそう言うと、オーラを練り出す時と同じ構えをとった。

深く息を吸うと、体を眩い白い光が覆いつくし、その姿を変えていく。

それをぼーっと眺めていた源信の瞳孔が一瞬大きく開く。

「な、なんじゃ！？」

白い光で覆われた剣人の体が、どんどん膨れ上がっていく。

「お、お前は！？」

白い光が消え、剣人の体が外に晒されると、それを見て源信が思わず呟いた。

源信の体に大きな影が被さる。

「熊？」

一匹の大きな熊が目の前にいた。
茶褐色の体毛に覆われた筋肉隆々の大きな体、口から覗く大きな
牙と手から伸びる鋭い爪。

しかも

「熊だよ、強そうでしょ」

しゃべる熊。

剣人は格好良い服がどうしても思い浮かばなかった。
普通の服が駄目ならと、気ぐるみに思いを馳せていると、そのうち
何かの生き物の姿になっても良いんじゃないだろうか　と閃き、
身近で強そうな動物を思い出した結果が熊だった。

「じゃ行くぞー！」

剣人が熊の姿のまま、源信に向って突進し始める。
四つん這いで走る剣人のスピードは並ではなかった。
源信の間に合いに瞬時に入ると、鋭い爪を伸ばした太く逞しい腕を
上に振り上げ、それを源信に勢い良く振り下ろした。
杖でそれを素早く受け止めるが、その衝撃は今までの剣人の攻撃
の比ではなかった。

受け止めた杖を握る左腕に思わず力が入る。
眉を潜めて、表情を陰しくする源信。

こいつは……

杖で受け止めたその腕を払うと、剣人熊のから空きの腹部に杖の
先端を突き出す。

鈍い音がして、杖の先が多少めりこんだものの、それを意に介せず、剣人熊の横からなぎ払う左手の鋭い爪が、源信の顔の間近に迫る。

源信は舌打ちをし、右腕を折りたたんでそれを防御に回す。

重く骨がしなるような衝撃が来ると、多少の痛みを源信は覚悟していた。

しかし、実際受けたのは蚊が止まったような軽い衝撃だった。

「なんじゃ？」

思わずそのギャップに声が漏れる。

前を見ると、熊でなく、人間の姿の剣人の拍子抜けした顔が目映る。

「あれ？ 元の姿に戻ってる」

剣人は源信に押し付けている左拳を離すと、両手の平を顔に向けて自分の体全体をきよるきよる見渡していた。

その様子を見て、源信が嘆息を漏らすと、呆れた顔で剣人に口を開く。

「エネルギー切れじゃな……」

「あ、そう言うことが、ハハ」

剣人は源信に呆けた顔を向けて、頭の髪を何度も搔いていた。

闇の山道。

「雫、後どれくらいだ？」

「もうちょつと登らないとね」

剣人は修行を一通り終えた　　と言うには、心細いものがあるが、取りあえず、オーラを体に均等に張る事を覚え、雫並の強さは身に着ける事はできた。

源信は修行が終った後二人に言った。

『もう、お前等さつさと影坊主倒してこい、後は実戦じゃ、慣れじや、命を懸けた戦いで力を使用せねば、何の意味もなさん』

源信はそれだけ二人に言うと、地図を渡した。

影坊主が棲みつく場所、千甲寺の場所が載った地図だった。

その地図で場所を教え、影坊主の簡単な話を二人に聞かせた。

元々影坊主は、ここの寺で修行を続ける一人の僧だった。

影坊主は努力を嫌い、真面目に修行に打ち込む事をしない坊主だったと言う。

そんな彼に腹を据えかねた住職は、彼を破門にした。

それを逆恨みした坊主は、ある日追い出された千甲寺の本堂に夜の闇に乗じて忍び込み、その中で首を吊って死んだと言う。

破門された寺に自分の死体を晒す事が彼の復讐だったのだろうか。

『まあ、こんなしょーもない理由で生まれた妖怪じゃ、死して妖怪に転じてまで、尚、その曲がった性格は直らず、それどころか、受験に苦しむ学生達をターゲットにして勘違いな逆恨みを晴らそうと

までしておる。野放しにはしておけんわな。ただこんなしょーもない奴と戦うのはワシも嫌じゃ、本来なら守に任せるとこじゃが、あいつ今留守にしてるんで、お前等で行ってちゃっちゃんと倒してきてくれ、なんとかなるじゃろ』

）

千甲寺がある寺間山は剣人の家からそう遠くない場所にある。

剣人は寺間山へ学校の遠足の時、山登りに行った事を思い出した。景色も多少覚えていて、山の中腹辺りにある三重の赤い塔の事が目に焼きついてた。

名称は知らないが、そのイメージさえあれば、瞬移は可能だ。

剣人が瞬移を使って雲に触れた時、右肩に実体のない手もかぶさっていた。

浩太も一緒に行きたいと言う。剣人は事件の当事者だし、特に断る必要も無かったので連れて行くことにした。

瞬時に源信の家からその場所へ移動した三人は、この山の頂上にある無人寺となっている千甲寺を目指して、薄暗い山道をひたすら登っていた。

「おい、しかし、もう山道も真っ暗だぞ」

「暗いし、怖いね、何か色々いるみたいだし」

現在PM6時過ぎ。

本来なら、家に帰ってご飯を食べる時間だ。

辺りは薄っすら暗くなり始め、電灯も何もない山道は不気味さを増していた。

「怖いですね」

浩太は幽霊の癖にこの暗がりには怯えていた。

雫も『霊視』の力を剣人に教えてもらい、それを発動して、浩太の姿も周りに蠢く幽霊や、妖怪の類をその目に映っていた。

「あ、また、ほらあそこにも仲間が、あそこにもほら！」

「辞めろよ！　できるだけ俺は見ないようにしてるんだから、指摘するな！」

「ひーいるわ、変なのが」

剣人は山道の土と砂利がまざつと凹凸の激しい道を歩いていたが、その脇に広がる森林や、暗がりには目を配る事をしなかった。

あちこちで怪しい影がうろろしていて、ほとんど幽霊屋敷ならぬ、幽霊山道と化してたからだ。

浩太には慣れたが、まだ幽霊や妖怪と言うものに完全に慣れていくわけでは無かった。

そんな剣人とは対象的に怖がりながらも、雫は興味深げに怪しげな者がいる方へ視線を流していた。

そんな時突然　剣人は首筋に冷たいものを感じた。

瞬時に体を硬直させる。

恐る恐る首を捻ると、白い手が巻きついているのが目に入る。

その手の先に怯えた視線を這わせると、

「お兄さん、どこいくんだい？」

江戸時代の遊女のような着物をきた女が、上空に漂いながら手を巻きつけているのが目に入る。

愛嬌のある笑みを浮かべて、気さくに剣人に話しかけてきた。

「うわぁ、気持ち悪い！」

剣人はまるで毛虫が突然、背中に落ちてきた時のように、顔に汗を掻いて体をバタバタさせる。

右往左往してその手を払おうとするが、女の幽霊は、絡ませた手を剣人から離そうとしない。

剣人は耐え切れなくなると、右手に陽のオーラをためると、その手を乱雑に振り払った。

「もう！ つれない人！」

「ごめんなさい、お姉さん、この人まだ幽霊に慣れていないんですよ」

「ごめんね」

幽霊は悲鳴をあげて後ろに弾かれると、態勢を整え剣人に体を向けてぶつくさ呟いた。

乱暴に剣人がその幽霊を振り払うのを見て、浩太と雫が代わりに言葉を付け加えて謝る。

その低い姿勢を見た女の幽霊は、ニコリと笑うと、闇に消えていった。

#

完全に闇が辺りを覆いつくし、星が瞬き始めた頃、三人はまだ山

道を歩いていた。

剣人はバッグから、源信に持っていかされた、小さな折り畳み提灯を取り出し、マッチをつかつて中の蠟燭に火を灯した。

白い提灯にオレンジ色の光が灯ると、辺りを薄っすら照らした。

多少明かりを得た事で、心に余裕が出来たのか、剣人はある事を思い出し口を開く。

「なあ、雫、お前さ、何で引き受けたんだよ」

「え？」

「やっぱわかんねーよ、お前が陰の者と戦う必要がどこにあるんだ？」

剣人は足場の悪い山道を歩きながら、隣を歩く雫に心の内でずつとくすぶつてた疑問を投げかけた。

本来なら、雫をこんな危険な戦いに巻き込みたくないのが本音だった。

雫はどう言おうか迷う。

剣人が心配だったって言うのもなんかね……

雫は剣人が力を得た時から、いずれ陰の者と戦う事を予想していた。

昔から剣人の事を良く知る雫からすれば、当然出てくる答えだった。

正義感の固まりのような剣人。

男気に満ちてはいるが、無鉄砲なところがある。

いずれ、一人で無茶をすることだってあるに決まっている。そんな事を見透かしていた雫は、剣人をほっとけなかった。

自分が傍について、彼の暴走を戒め、なんらかのサポートが出来たらと考えているうちに、それなら　やはり同じ立場に身を置くしかない、そう結論づけると源信の家に向って無心で走っていた。

「うーん、ほら、剣人一人じゃ何しでかすか分かんないでしょ！」

雫はおどけた口調で、その意味を曖昧にしながらも本音を語った。

「なんだよ、それ、俺だけじゃ心配だっていうのか？」

「その通り！　私はあんたが陽の力使って、人様に迷惑かけないための監視役よ！」

雫はうまい事言えたと心で呟いた。

「ちっ、いつまでも子供扱いしやがって、ふー」

剣人はもやもやが晴れたわけではないが、取りあえず、納得したようだ。

それは雫の強さもそれなりに知っている、今だからと言うところもあった。

今の實力は二人とも大差無かった。

強く言えないのは、そのためだ。

「あ、着いたみたいですよ」

先を浮びながら進む浩太が、一言呟いた。

その言葉を聞いた二人の表情と雰囲気が一転した。

影坊主現る。

「お堂の中に入ってみるか」

「うん」

隙間から雑草が生える石畳の地面を進み、古びた木の階段に足をかける。

一步上がるごとに軋む階段を上り終えると、賽銭箱があり、その上に備え付けられた鈴を鳴らす鈴緒が長く垂れ下がっていた。

その脇の足場をぎしぎし言わせながら通ると、眼前に格子型の古びた木の扉が目に入る。

「この中にいるのかな？」

「さ、さあ」

剣人はあまりこういった場所に踏み込んだ事がないため、どうしていいか分からない。

格子の隙間からそーっと中を覗き見る。大きな仏像が提灯の光に照らされその姿を不気味に映し出していた。

お堂の中は閑散としているかのようにみえた。

だが、一緒に覗き込んでいた雫が突然大きな声をあげた。

「お堂の天井見て！」

「え、どこどこ？ うわ！」

雫が指差す方へ剣人が恐る恐る視線を送ると、天井に胡坐を掻い

た不気味な坊さんが、コウモリのようにぶら下がっていた。

重力を全く無視したその様は、幽体ならではの芸当か。

二人は息を吞んでその坊主の動きに注意していた。

暫くして、坊主が胡坐の足を崩す。剣人たちに気づいたのだろうか。

ゆっくり立ち上がった後、天井からそのまま側面の壁をよたよたと歩き、お堂の床に降りてきて、扉越しに剣人たちに向き直ると、

「何者だ……？」

低い声で二人に囁いた。扉越しに観察するように覗き込んでいる。生気ない青い顔の細い瞳に、赤みのようなものが滲む。

坊主に見据えられた時から、二人は体を硬直させていた。

異様な雰囲気呑み込まれ、黙っていた。が、剣人が喉から搾り出すように言葉を紡ぐ。

「お、お前が、影坊主か？」

「……………」

影坊主は無反応で顔を上げ宙に視線を置いたまま、押し黙っていた。

「うん、その人ですね」

この重々しい静寂を、さくつと切り裂く浩太の言葉が、二人を束縛する絡まるような圧迫感を幾分和らげたのか、

「やっぱりこいつか！」

剣人が大きな声を放つと、途端に後ろに後ずさり、階段の下まで降りる。

足元が危うい狭い場所を嫌った。それを見て同じく雫も剣人の隣まで降りて、守身を陽のオーラで強化し巫女姿に変身した。

剣人はそのままの私服姿で身構える。まだ服装は決まっていなかったが、オーラは均等に張り巡らせる事はできていた。

影坊主は心ここにあらずといった表情で、視線を宙に置いたままにしていたが、体だけはすーっと格子をすり抜け寶錢箱の上に乗っている状態で突っ立っていた。

「なあ、雫、どうする？」

「え、どうするたって」

「一応いきなりケンカうるのもなんだし、ここに来た理由教えとくか？」

「うん、お願い」

剣人は影坊主にここに来た理由を事細かに語る。

影坊主はそれを聞いているのか聞いていないのか、見た目では判断しにくい。

「お前が受験生を狙い、逆恨みして殺している事を俺は許す事はない」

剣人は最後にここに来た唯一つの理由を、告げて話を締めくくった。

そこまで聞いた影坊主は、突然ふわっと上空に舞ったかと思うと、剣人たちを飛び越え、背後の広場に着地した。

すぐに剣人たちは体を向き直り、体を屈ませ緊張した面持で、神経を研ぎ澄ましていく。

二人は感じていた。言い知れぬ殺気のようなものが、影坊主から発散されているのを。

影坊主は右手に持っていた癩上を石畳の地面に軽く打ち立てた。その際、癩上の先の金属の輪が擦れあい、独特の神秘的な音が響く。

「……………陽の者が二人か……………」

影坊主は地から響くような低い声で、呟いた。

「雫、こいつ俺達を陽の者とか言っただぞ」

「うん、分かるんですよ」

剣人は影坊主から飛び出した言葉に、雫に顔を向けずに言葉を交わした。

動揺は多少していたが、オーラを乱さないように意識を集中している。

雫は影坊主を強く睨みつけながら、警戒を強めていた。

「陽の者は……………生かしておけない……………」

影坊主がそう言い放つと いきなり癩上の先を剣人に素早く突き出してきた。

間一髪でその攻撃を右に避けて交わす。

しかし、剣人はその突きの速さをみて、瞬時に顔を強張らせる。

こいつ、動きが早いぞ。

「今のを良く避けたな……」

影坊主はそう言うと、癩上を素早く懷に戻し、また地に打ち付けた。

「次は私たちから行くわよ！」

雫が大きな声で叫ぶと剣人は相槌をうち、影坊主に二人で突っ込んでいく。

オーラを右拳に溜めて、気合の声を発しながら、影坊主の間合いに入って、腹部にそれを勢いをつけて突き出した。

影坊主はその攻撃を少し後ろに引く事で交わすが、横合いから雫の薙刀の鋭い刃が迫っていた。首をかしげて何とかそれも交わす影坊主。

多少体を揺らめかせ、態勢が崩れると、後ろに下がって距離を取った。

「おい、雫、その武器なんだよ！」

剣人が雫が手に持つ薙刀を見て、思わず問いかけた。

「これは『神器』の力よ、霊体に関わらず、全てを切り裂ける武器を作り出す力、拳にオーラ溜めるよりよっぽど強いわよ！」

「ええ、知らなかった……教えてくれよな」

「ちよつとは自分で調べなさいよね」

剣人はそういえばそんな力の名称前も聞いたなと思ったが、今初めてその意味を知った。

確かに勉強不足だと、自分を戒めるが、この切羽詰った状態で暢気に構えてもいられず、携帯を出して発動させようとすると、

「隙あり！」

携帯のエフェクトが始まる前に、影坊主が癪上を剣人の腹部に突き出してきて、諸にその攻撃を受けてしまう。

ガキン！

しかし、剣人は鋭く突き出されたその一撃に、全く体を後ろにずらす事なく立ち尽くしていた。みると、癪上の先が守身の見えない壁で、完全に威力を相殺され止っていた。

それを見た剣人が、拍子抜けした顔で癪上を掴むと、

「なあ、お前つてもしかして弱い？」

「く……」

影坊主が初めて見せる焦りの色、表情からは読み取れないが、短く呟いた言葉から滲み出ていた。癪上を剣人の手から引き抜くと、胸元にそれを引き寄せ体を庇うように水平に持つ。

二対一の状況、しかも相手の力量は自分より少し上と判断すると、影坊主は大きなジャンプをして、二人を飛び越えると、お堂の中へ向けて低いが中まで通る声で誰かを呼んだ。

「兄貴、助けてくれ」

死闘。

「兄貴……いねーのか？」

影坊主は格子の扉を癩上で押し開けて、声を掛けるが中は静まり返っていた。

「そっぴゃ……猪狩つて来るとか言つてたな……く……」

「おい、なにしてるんだ？ 怖気づいたか！」

背中を向けて何か呟く影坊主に、剣人が強気に言い放った。

さっきの影坊主の一撃が、守身の壁に完全に阻まれるのを見て、剣人は影坊主の攻撃が大したことないと悟ってからは、完全に相手の方が弱いと思いこんでいた。

影坊主は剣人たちに向き直って、小さく跳ねると舞い降りて同じ地に両の足をつけた。

「確かに……お前たちは強い……しかし侮るなよ」

影坊主は癩上を頭の上に持ち上げると、くるくる回し始めた。

雫は後ろに距離を開けて、薙刀の切っ先を影坊主に向けて構える。剣人は神器を発動していなかった。それは相手が弱いと悟り、オーラをこめた拳でも倒せるだろうという判断からだった。

影坊主の両肩が下がったかと思うと、次の瞬間 雫と剣人のすぐ目の前にいた。

横から薙ぎ払ってきた癩上に、剣人は突っ伏したまま微動だにしない。

ガギーン

「ほら、やっぱり弱いよ、全然効かない」

剣人の守身の見えない壁の前に、癩上の威力がまたも相殺されて動きを止めていた。

それを見て影坊主は、慌てて後ろに小さく跳ね退く。

糞、……俺はスピードには自信があるが……

影坊主はF級妖怪の中ではスピードはずば抜けていたが、力の方は自信が無かった。

剣人は警戒心を多少緩めて、足取り軽く影坊主にすたすたと歩み寄る。

完全に舐めきっていた。だが、雫は何か嫌な予感が心の底で燦っていた。

相手は妖怪、しかも得体が全く知れない、そしてさっきの仲間を呼ぶ素振り……鋭く思考を研ぎ澄ませながら、神妙な面持で警戒を緩めていない。

雫の予想は間違っていなかった。突然鳥の鳴き声のようなものが闇の中に響き渡る

「剣人！ 後ろに避けて！」

雫は空を見上げると、月明かりに薄っすら浮ぶ黒い影をその目に捉えていた。

大声で叫ぶと、剣人は体をびくつかせ咄嗟に半歩後ろに下がる。

ドスン！

目の前を大きな鉄の固まりが掠めたかと思うと、足元の地が大きく振動した。

地震のような揺れと同時に、波紋のように広がる見えない風圧と砂煙が剣人を襲い、否応が無しに体が後ろへ弾き飛ばされる。

剣人は悲鳴のような声をあげると、数メートル後ろの岩畳の地面に背中から派手に打ちつけた。その衝撃は守身を通して剣人の体に伝わり、思わず小さく唸る。

「剣人大丈夫!？」

素早く剣人に駆け寄ると、雫は心配そうに見下ろして言った。

しかし、その間も影坊主ともう一つの影に、目配せしながら薙刀を構えて警戒を怠らない。

「だ、大丈夫、ビックリしただけだ」

雫の声に反応できたおかげで、剣人は敵の強烈な一撃を間一髪で交わし、背中を地面に打ち付けたダメージも大したことは無かった。剣人は右手で地面を強く押して、その反動ですぐに起き上がった。

「どうした? 影坊主」

「兄貴……! 帰ってきたか、こいつら急に襲ってきたんだよ、しかも二人で……助けてくれ……」

「なんだと!？」

お堂の前の広場の月明かりが差す一帯に、影坊主の後ろから何者かが姿を現す。

その姿を目にして二人が思わずぎょっとした。

鳥のような顔に人間のような体がくつついた、半鳥半人とも言うべきか。

上半身は裸で筋肉隆々、その逞しい右腕には金属の大きなハンマーのようなものが握られていた。体の2倍ほどあるうかと思われる大きな鉄の固まりに繋がる長い柄を右手で軽々しく持ち上げている。

「何者だ？ おまえ！」

剣人はその大きなハンマーを見て、圧倒されていた。しかし、それにびびって気圧されては負けだと思い、気合を入れなおし大きな声で妖怪たちに言った。

「わしか？ 金槌坊というもんだが、言った所でお前たち分かるのか？」

「いや、知らないけど……」

「なら、聞くなよ坊主」

金槌坊は饒舌に語る。影坊主と違い、流暢に話すさまには余裕さえ感じられる。

その言い知れぬ迫力に、剣人はどこか子供扱いされているような気さえしていた。

「それはそうと、影坊主は俺の弟分でな、何の恨みがあるか知らないが、こいつを苛める奴は見過す事はできないんだ」

金槌坊の雰囲気が変わった。幾分重々しくなったのを、剣人と雲は声から感じ取っていた。

緊張した面持で二人は足を少し開き気味にして構える。

「そこでお前たちに二択だ、このまま戦って死ぬか、大人しく去るか、どちらか決めてくれ」

金槌坊はハンマーの柄で自分の背中をぽんぽんと叩き、返答を待っていた。

剣人は生唾を飲み込んだ。答えは最初から決まっている。雫も同様の思いだ。

「既に決まってるさ、このまま戦いは続行だ、だが、やられるのはあんた達だけだな！」

剣人が右手を突き出して指差して、妖怪たちに言うと、金槌坊は一度俯いた後、

「馬鹿が！」

雄たけびのような大きな声をあげたかと思うと、影坊主もその後を追って二匹で襲い掛かってきた。

金槌坊はドスドス重い足音を立てながら、襲い掛かってくるがスビードはそれほどでもなかった。その金槌坊を追い越し、最初に二人の間合いに入ってきたのは影坊主だった。

癪上の先を連続して剣人に向って突き出してくる。

それはまったく効いていなかったが、ひつこくその先を剣人の胸を中心に当てていた。

剣人はそれを全く意に介せず、右拳にオーラを溜めた後、前に突き出そうとすると、突然影法師が横に素早く避ける。

「剣人上よ！」

剣人は雫の声に反応し見上げると、頭上に大きなハンマーの平面がすぐ近くまで迫っていた。咄嗟に後ろに素早く退く。少し遅れて、剣人が立っていた石畳が地響きをたてて、粉々に砕け散り、強烈な風圧とともに無数の石片が剣人に向って飛んでくる。剣人は前方に張っている守身の壁をオーラで瞬時に強化させた。

弾丸のように飛んでくる無数の石片がその壁に当たって弾かれる。隣にいた雫にも石片は容赦なく降り注ぐが、同じく守身で多数のそれを弾き、大きな石片は薙刀を鋭く振るって叩き落としていた。

「ふ……後ろが甘いぜ……」

突然二人の後ろから低い声が届いたかと思うと、鋭い痛みが連続して背中に走る。

思わず、二人は低く呻き前に体が弾かれた。

しかし、剣人は右足を前にふん張り、前に倒れる事を拒否すると、倒れかけた雫の袴の端を掴んで引つ張り持ち上げた。

「ありが……」

雫が剣人のほうを振り向いて、言葉を掛けようとしたとき、剣人の横から襲い来るハンマーを見て悲鳴を上げた。

「吹き飛ばせ！」

真横で聞こえた大きな声に剣人は瞬時に反応して肩を突き出し、オーラを左方に全力で溜めるが、ハンマーの平面が肩にあたると、物凄い衝撃と爆裂音とともに、体ごと宙に舞い隣にいた雫も巻き込んで、お堂の扉に向って弾き飛ばされた。

二人の体はピンポン玉のように弾かれ、木の扉を勢いよく突き破り、お堂の中の床に体をあちこち打ちつけながら、最後は壁に激し

く激突して、前に弾かれ床にごろりと転がった。

終焉

「雫……大丈夫か……？」

「う、うん、なんとか……」

剣人は半身を起こして雫に弱弱しい声で言った。先ほど受けた金槌坊のハンマーの衝撃で左腕は痺れていたが、全体的にはそれほどダメージは受けていなかった。それは体を覆う守身の堅牢な壁のおかげである事は言うまでもない。しかし、それとて、短い時間とはいえ、修行で得た陽の力のコントロールがうまく成し得てなければ、もっと深刻な怪我をしていてもおかしくは無かった。雫はふつとばされた剣人に巻き込まれたものの、直接攻撃を受けたわけではなく、格子扉を破り壁に激突したとは言え、それくらいの衝撃は、守身の壁を均等に体全体に張っているだけで防げるレベルだった。なので、ほぼ無傷と言っていい状態だった。

「しかし、どうするよ？」

「うーん……どうする？」

剣人は相手が強すぎるとは思っていないが、勝てる気も今の時点ではしなかった。影坊主だけなら、なんともなかったかもしれない。しかし予想外の敵が現れて、戦力的には拮抗……というよりは押されていった。雫も同様の気持ちで、剣人の質問に質問で返す事しかできず、打開策が見当たらなかった。二人はまだまだ未熟だと痛感していた。

『もう、あんまり無理しないほうが……』

突然床からにゅっと伸びてきた浩太の顔に、剣人は心臓が飛び出るかと思った。

「こら、浩太！ お前な、ちょっとは今の状況考えろよ！ びびったじゃねーか！」

剣人の心臓は早鐘を打っていた。胸を押さえながら息を整える。大きく息を吐いて目を半分細めて、浩太に軽く怒気をこめた言葉を浴びせかけた。浩太は頭を撫でながら、無言でお辞儀をした。

雫は既に体を起こして、その様子を近くで見ながら声を殺して笑っていた。

格子扉を破壊して、中へ激しく突っ込んだため、お堂の内部は木片が四散して床に転がっている。古いお堂だけに、床もあちこち痛んでいて、雑草も諸所に生えている。お堂の内部を外の月明かりが白々と照らしていた。剣人は外へ出て行こうか迷っていた。迷う事ができるほど、余裕があつた。それは直ぐに、追い討ちとばかりに襲ってくる雰囲気がないせいもあった。お堂の外では、影坊主と金槌坊が何やら話し込んでいる。それは本堂の中にいる二人の耳にも届いていた。

「なあ、影坊主、心当たりあんだろ？」

「はあ………そういや、俺が殺した受験生がどうたらこうたらって」

「おい！ てめえ！ 人間に手かけたのかよ！」

金槌坊は大きく怒鳴ると、影坊主を蹴り飛ばした。

影坊主は地面に横倒れて呻くと、左手をついてすぐ半身を起こし、金槌坊を見上げて、

「ご、ごめん、兄貴ついなんか、昔の恨み思い出してやっちまったんだ、許してくれ！」

と、震えた声で金槌坊の足元で土下座をしていた。

「馬鹿！ 俺に謝ってもしやーねーだろ！ ちょっと待ってる！」

金槌坊はお堂の前までやってくると、深く息を吸って、言葉と共に吐き出した。

「おい、陽の者達よ、生きてるだろ？ さっきの攻撃くらいじゃ大したことないのは分かってんだよ、ちょっと話あるんだ、出てきてくれねーか？」

お堂の中の剣人と雫は顔を見合わせた。二人は少しの間を空けた後、ほぼ同時に小さく頷くと、立ち上がってお堂の格子扉があった辺りからゆっくり外へ出て行く。浩太はまた床に潜ると、お堂の下の方からその様子をぼーっと眺めていた。

「よう、やつぱり余裕だな、全然ダメージも受けてないようだし、さすが陽の者だ」

「あんた、陽の者に詳しいのか？」

剣人は金槌坊たちから普通に出てくる、陽の者という言葉に違和感を感じていた。

二匹の口ぶりから前にも、他の陽の者と戦った事があるのではな

いかと考えていた。
溜め口で問いかける剣人を、雫は横目で内心ひやひやして見ている。

「そりゃ、詳しいさ、俺何年生きてると思ってるんだ？」

「300年くらい？」

「俺もいちいち数えてないから、正確なところは分からねえが
1000年以上は確か生きてるはずだ……」

鳥頭 of 金槌坊は額と思われる部分を、右人差し指で擦っていた。
放った言葉への確信は無いらしく曖昧さが漂っている。

それでも剣人は驚きを隠せないらしく、

「うへえ、漫画とかでよく見るけど、やっぱり妖怪って長生きなんだな
うすげえ！」

少し興奮気味に大きな声を漏らしていた。金槌坊はその反応に戸惑っているらしく、背中をハンマーの先で器用に掻いていた。影坊主は後ろで体を竦ませ、終始無言で縮こまっている。

「ところでよ」

金槌坊の雰囲気がまた変わった。重々しいプレッシャーが辺りに立ち込める。剣人は少し浮かれていた顔を改めて、多少体に力が入る。雫もいつでも後ろに引けるように、足の位置に気を払っていた。

「影法師から話は聞いたよ、お前たち、うちの影坊主が人を殺した事に腹を立てて、やってきたんだろ？」

「そうだ」

剣人は力強く言い放った。

「うむ、困ったな、だがよく、殺した者はもう生き返らないよな、でよく、そこで相談なんだがよ、俺はこいつの兄貴分でさ、一応こいつに言ってたんだよ、人間を殺めるなつてな。だけど、こいつは人間達を殺しちゃったようだ。だからよう、今更、罪償える訳じゃないんだけどさ、もう同じ事は絶対させないからよう、今回は見逃してくれないか？」

金槌坊は最初の饒舌ぶりから少し口調が変わっていた。声量を押しさえ気味に、途切れ途切れに言葉を繋ぐ様子から、どことなく後ろめたさのようなものが剣人達に伝わっていた。

剣人は考えていた。妖怪とは言え、それなりに仲間を思う気持ち、人間を殺す事への配慮や後悔の念、それはひしひしと伝わってきていた。しかし、死んだものは返ってこない。そして、影坊主が本当に人を殺す事をしなくなるのか、それを約束できるのか、そこをきっちり聞いておかないと駄目だと思い、重々しい口調で話し始めた。

「金槌坊、お前の話は分かった。ただ俺たちも、俄かにそれを鵜呑みにすることは出来ない。」

だから、影坊主と話をさせて欲しい、聞いておきたい事がある」

金槌坊はふーっと息を吐き、後ろを振り返ると影坊主に手を振り、前に呼び寄せる。影坊主は体をびくびくさせながら、前に重い足取りで出てきた。

それを見て影坊主の顔を睨みながら、剣人は口を開く。

「影坊主、あんたの親分の話、そして俺が今言った事なんだけど、もう人を殺めないと約束できるか？」

「ああ……二度と人を殺めねえよ……神様いやえーっと、閻魔様に誓って……」

どことなく頼りなく聞こえる。剣人は大丈夫かなっとは思いつつ、お堂の方を見て叫んだ。

「浩太こつちこい！」

「は……い……」

お堂の方に声をかけると、足元から浩太がにゅーっと現れた。剣人は思わず体をびくんとさせて、体を傾ける。

「まったく、お前って緊張感ないよな……しかも怖い出方ばかりするなよ」

「すみません……」

謝ってはいるが、表情は常にポーカーフェイスを保っていて、感情があるのかないのか 剣人は幽霊ってみんなこうなのかなっとなにに思うが、山道の幽霊達を見た限りじゃ浩太限定だと結論づけると、気を取り直して話し始める。

「こいつな、この幽霊な、影坊主、あんたに殺されたんだよ、最後にこいつに謝って欲しい、それで俺は一応気が済むんだ」

金槌坊が顎で影坊主に謝る事を促した。

しかし

「ケツ！ 何で幽霊ごときゴミに謝らなきゃならねーんだよ！ ふざけるな！」

影坊主は突然態度を変えた。剣人の顔が一瞬で強張る。拳にオーラを溜めて影坊主を殴ろうとしたその時

ドスン！ グチャ！

大きなハンマーが先に影坊主を叩き潰していた。悲鳴を上げる間もなく、この現世から命の火を消した影坊主。その横で金槌の柄を握る金槌坊が、沈鬱な空気を漂わせながら俯いていた。

その突然の出来事に、剣人も、雫も、浩太も声一つあげる事が出来なかった。

「ふ………こんなのを仲間だと思ってたとはな………」

金槌坊が大きなため息をつく、影坊主のペシャンコになった亡骸からハンマーを持ち上げ肩に担いだ。その亡骸はしばらくすると砂のように粉々になり、塵となって、吹き付ける冷たい夜風に浚われていった。

「じゃあな………」

金槌坊はそれを見届けた後、一言剣人たちに低い声で呟くと、鳥のような鳴き声をあげて、木々が生い茂る中へ姿を消した。剣人達はしばらくその場で、静寂の中に身を浸し無言で佇んでいた。

海

「剣人、行くわよ……」

「さっきまで寝てた？」

「おっせーよ、剣人ちゃん」

突然というよりは、鳴るべくして鳴ったチャイムに、剣人は顔を歪めながら、インターホンにでた。ホンを通して騒がしい声が聞こえる。そう、今日はもう7月25日、夏真っ盛り、4人で海に遊びに行く日がやってきたのだ。メンバーは親友の高木光一、雫の友達の木戸巴、雫、そして剣人。しかし、剣人は冴えない表情で応対していた。それも当然かもしれない。

昨日、妖怪と死闘を繰り広げた次の日に、海へ行くというハードスケジュールに体も心もついていけないようだ。当然、外にいる雫も、目のしたに隈を作っていた。インターホンのディスプレイに映る雫の姿にも生気が感じられなかった。

「ちょっと待ってな……」

低い声で剣人は言うと、ホンをいきなり切った。一応バッグに今日もって行くものは詰めてある。一週間前までは、浮かれていて、鼻歌口ずさみながら準備していたものだ。

しかし、今日は、昨日の影坊主達との戦いで、体中あちこち痛いし、打ち身擦り傷といった身体的なもの他に、精神的にもそれなりにダメージが残っていた。

倒したというよりは、仲間に殺された影坊主。自分たちの目の前であっという間にその命を散らした。妖怪とは言え、命を奪われる

所を目の辺りにしてしまった。剣人と雫の精神的ショックは計り知れない。海で楽しく　なんて気分には到底なれなかった。しかし、約束を今更破る事はできないし、もしかしたら海へ行く事によって癒されるかもしれないという淡い期待も抱いてた。

「さあ、行こうか……」

半そで半ズボン、麦藁帽子と行った、多少古風な姿で剣人は家から出てきた。

手を振って、合流すると4人は海へ向って歩き始める。ここから海水浴場は目と鼻の先だった。

雫と剣人は並んで歩く。二人の暗い様子にどことなく気をつかって、高木と巴は二人並んでぼそぼそ話していた。

「ね……なんか変じゃない……剣人君と雫……」

「そうだよなあ……なんか元気ないよな、これから海へ行くって言うのに……」

完全に雰囲気をぶち壊していた。とても今から海へ行く高校生の顔では無かった。

4人で来ているのに、2人に分かれて歩く。しかも距離を少し空けていた。

亡霊のように歩く二人の暗い雰囲気に、近付き難いものを感じていたからだ。

「巴ちゃんは、どんな水着持ってきたの？」

「え、あ、見てのお楽しみ」

突然高木が話題を変えた。というよりは方針を変更した。あの雰
囲気では剣人達に突っ込みをいれて明るくしようとすれば、逆に飲
み込まれて自分たちまで陰鬱になるのは目に見えている。ここは、
巴と楽しく話して、二人だけで明るく盛り上がりう。という高木
の機転のいい判断だった。

それが功を成したのか巴と高木の組みは、会話に花が咲いていた。
元々高木は巴と話すことが一番の目的だったので、それなりに楽し
んでいた。

そんな陽気な巴達とは対象的な陰気な二人組みは、とぼとぼ
と歩みを進めていた。

二人ともぼーとした様子で、暗い顔で力なく歩いている。

剣人は少しこの状況にも飽きてきたので、雫に顔を向けて低い声
で言った。

「なあ、俺たちも元気だそうぜ」

「え、そうね」

俯き加減で平坦な返事を、雫は返した。それを見て剣人はため息
をついた。しかし、気を取り直して、湿りきった雫の顔に火を灯そ
うと言葉を出鱈目に連ねる。

「雫さ、どんな水着持ってきた？」

「ビキニ……」

雫はまだ心ここにあらずといった表情で淡々と答えた。

しかし、剣人の心は揺れ動いていた。多感な高校生、しかも男で
ある剣人は、ビキニ姿の雫を想像していた。

ビキニか……雫スタイルいいから、ちょっと楽しみになって

きたな……

「どうしたの？」

「いや……」

剣人が顔を背けて歩いていたので、雫が不審に思って声をかけてきた。

低い声で返すものの、背けた剣人の顔は緩んでいた。鼻の下を伸ばしているのを雫に悟られないために、顔を反対に向けてごまかしていた。

#

「雫、胸大きいね」

「そ、そう？」

雫は顔を赤らめながら、白いビキニの紐を背中では結う。

さっきまでぼけーっとしていたが、よくよく見ると大胆な水着だなあっと、思いながら少し照れ臭い思いがしてきていた。

巴は、ごく普通に体を覆った、腰の辺りにヒラヒラがついた薄桃色の水着を着ていた。

露出度は雫の方が断然高い。その落差に雫は少し後悔を顔に表す。

「男子諸君、お待ちせ」

「うお～～～！」

巴が陽気に剣人達に言った。剣人の力ない目に光が宿り始める。浩浩と照りつける陽光を受けて輝く二人の白い肌、特に雫のプロポーションには目を見張るものがあつた。

ビキニから漏れる大きなバスト、きゅっとしまつたなだらかな曲線を描くウエスト、後ろに突き出たお尻、男性達は雫のビキニ姿に目を奪われていた。

嘗め回すように視線を這わせる二人に、雫は耐えられなくなり、巴の影に隠れて大きな声で、

「あんたたち！　じろじろ見るな〜！　変態！」

「じ、ごめん」

「ははは、女性は見られて美しくなるんだよん！」

剣人は思わず、顔を後ろに逸らして謝つた。これではおっさんだと自戒した。

そんな剣人とは対象的に、高木は笑いながら、おどけた口調で雫に軽口を叩く。

高木は鼻を伸ばしていたのも事実だが、場を明るくしようと努力もしていた。

巴は高木のそんな様子に微笑むものの、自分の水着姿が注目されない事に、多少女としては悲しいものがあつた。

く！　もっと露出度高いのにすれば良かった！　失敗！

海辺の少女。

4人はビニールシートを敷いて、パラソルを2本差して安息場所を確保していた。

巴は焼けたくないらしく、白い薄地のカーディガンを肩から懸けて、足を折りたたんで座っている。きつちりその姿はパラソルの影に収まっていた。

その隣に高木は座り、海で楽しそうに泳ぐ二人のことを巴と話していた。

「ちょっとあれ何？」

「だよな、何か気使っただけ馬鹿みたいというか……」

剣人と雫は来るまでは、周囲が心配するほど元気がなかった。だが、海に来てから二人の様子は一変した。青々と水を湛える海を目にして、最初に喜び勇んで走っていったのは剣人だった。さっきまでの様子が嘘のように、砂浜を駆けて海の中へ足を踏み入れていく。水中に潜ったり、クロールをしたりして、子供のように無邪気に遊んでいた。そして、その姿を目にした雫も、笑顔で剣人に手を振ってからは、同じように海へ走って行って、剣人と一緒にしゃぎ始める。水から出てきた剣人の頭を水中へ押し込んだり、押し込まれたり、水をお互いバシャバシャ掛け合って楽しそうにしていた。そのあまりの変わりようを、巴と高木は呆然とビーチから眺めていた。

「剣人、少しあそこの沖の岩まで競争よ！」

「望む所だ！ 3、2、1、スタート！」

剣人は泳ぎが得意だった。クロールでどんどん沖へと泳いでいく。冴え渡る手の回転、絶妙の息継ぎ、水泳の選手かと見間違ふほどのスピードで、雫を離しにかかる。

しかし、雫も負けていなかった。バタフライ泳法で、両手を大きく広げ、飛び魚のように水面を跳ねる。体のバネをうまく利用しながら、水面を掻き分け進んでいく。最初少し離されかけたが、今は剣人の直ぐ後ろまでやってきていた。

「ゴール！」

それでもやはり、最初に岩にタッチしたのは剣人だった。右拳を高々とあげ、勝利の雄たけびを上げていた。少し遅れて雫が岩に触る。悔しそうな顔で、右拳で水面を叩く。

「まあ、こんなもんさ」

「フライングよ、ずるい！」

「馬鹿！ どこがだ〜」

雫があまりの悔しさに、剣人に理不尽な絡み言葉を投げかけると、剣人はむきになって反論した。子供のけんかのような言い合いがその場で展開される。

その姿を砂浜で見っていた二人が、何やら冷めた目で話していた。

「あいつら、仲いいな〜」

「うん……」

#

雫と剣人は散々泳ぎ回った後、砂浜へ帰ってきた。二人とも爽やかな顔でシートの上に、ほぼ同時にドカッと音を立てて座った。

「おい、お前等、海きたのに泳がないのか？ もったいないな」

「剣人も竹下も楽しそうだな」

「そりゃー海久し振りだからな、な」雫？

「うんうん、やっぱり気持ちいいよね！ 巴も一緒に泳ごうよ！」

雫はカーディガンを羽織ると、巴の横に移動した。何か元気のない顔で座る巴を心配して、盛んに海に行こうと誘っている。

剣人は家から持ってきた黒のサングラスをかけて、頭の後ろで手を組み背中をシートにつけて寝転がる。

いつの間にか立場が逆転していた。なんだか冴えない顔を高木は浮かべていた。しかし、それも一時の事で、何か吹っ切れたように立ち上がると、

「巴ちゃん、行こう！」

「ええ！？」

「ほら！」

精悍な顔を巴に向けて大きな声を放ち、右手を巴に静かに差し伸

べる。巴は一瞬顔を赤らめ躊躇ったが、高木が白い歯を光らせにこりと笑うので、思わず微笑んで右手を握り返した。
そして、剣人と雫を置いて、二人で海へ駆けて行った。その様子をみていた雫は、少し呆気にとられていた。

「あの二人、仲いいわね……」

「ん？ そうみたいだな」

雫がそう呟くと、剣人は頭に載せていた麦藁帽子を指で少し上げて、浅瀬で遊ぶ二人を見て同調した。

#

「なんだあれ？」

「ん？」

剣人は砂浜を鋭い目つきで、練り歩く少女を見て言った。鋭い目つきだけなら、剣人は話題にも出さなかっただろう。しかし、その少女の服装が独特なため、目を奪われてしまった。

砂浜とあまりに場違いな巫女姿をした少女が、赤い袴の裾を上げながら、海岸で泳ぐ人々に何か怒鳴りたてている。

「うわ、海に巫女姿って何考えてるんだろ……」

「そついや、お前も巫女姿だったよな！」

剣人は守身を発動させた時の雫の姿が、少女と重なった。それを口にする、雫が少し罰の悪そうな顔で一言、

「私のは本物じゃないし、もし本物着る事あっても、場所選びます！」

強い口調で言い切った。変わった少女と一緒にされて怒っているようにも見える。

「まあそうだな」

剣人が間延びした口調で、少女を眺めながら言った。

#

「ほら、だから、あなた！ 見えないの？」

「はい？」

少女は海から上がってきた若い男性に、強い口調で捲くし立てた。男性はきょとんとした目で少女を見降ろす。少女は小柄だった。度のきつそうな茶褐色の眼鏡、その奥に光る円らな黒い瞳が、男性の肩の付近を食い入るように見つめていた。

「ふむふむ、あんた、去年ここで溺死したのか、悪さするつもりはないと、でもね」

少女は男性の肩の付近に顔を近づけて、ぶつぶつ一人で呟いてい

た。

「もう行っていていいかな？」

「あ、ちょっとまって、ああもう、面倒くさいから……」

少女は少し低い声で呟くと、男性の肩を何かを払うように優しく撫でた。その突然の奇行に男性は気味悪ながらも少し照れていた。少女が比較的可愛いせいもある。

「はい、どうもお世話様、ごゆっくりどうぞ」

少女は気が済んだらしく男性にぶっきらぼうに言うと、辺りに鋭い視線を流しながら練り歩き始めた。

自己紹介

剣人は泳ぎ疲れたのか、いつの間にか、まどろみの奥深く意識を沈め寝入っていた。

影坊主……金槌坊……ちよつと二人でよつてたかつて……

夢の中で剣人は、この間の妖怪たちと一人で戦っていた。暗闇の領域で、一人であの手ごわい二匹と戦闘を繰り広げていた。その強さは剣人の潜在意識に強く焼き付けられていて、今悪夢となつて剣人を苦しめていた。

ちよつとたんま……まつてつて……

『問答無用』

二人の妖怪が一斉に倒れた剣人に向つて武器を振り落としてくる。

「こら、二人がかりは反則だぞゝまてつてば！」

剣人は悪夢の妖怪にたんまの意味で手の平を強く突き出していた。その瞬間、不意に目が覚める。サングラスを通してパラソルの裏側が目映る。はつとして素早く半身を起こし前を見渡すも、砂浜は見えるが妖怪達の姿は無かった。剣人はこの時やつとさっきのが夢だと分かり、安堵の息を漏らす。

「剣人……」

「あゝ、ちよつと、あなた……」

剣人は雫の声を聞き取ると、首を左に振った。少し怪訝な目を雫は剣人に向けていた。

そして、右側からも声が届く。雫よりは幾分声色が高い。そちらへも振り向いてみると、さっきの袴姿の女の子が右膝についてこちらを睨んでいた。

「えーっと、何か用？」

女の子があまりに自分を強く睨むので、剣人は少し気後れを覚えながらも言葉を搾り出した。

尚も、女の子は睨み続けていたが、ふーっと深い息を吐くと低い声で言った。

「さっき、あなた、寝ぼけてたとは言え、私の胸三度揉みました……」

「ええ！ 知らねえよ……」

「まあ、そんな事はいいんです」

剣人は一瞬赤面したが、記憶に無い事なので、口を尖らせて首を横に振った

女の子は剣人の表情から、故意ではない事を悟るとゆっくり立ち上がった。

そして、剣人の直ぐ後ろの砂場を見て、人差し指をそれに向ける。剣人は体を振って向き直り、きょとんとした目でその場所を見つめたが何も見当たらなかった。

雫も何も見えないらしく、少し奇異な眼差しで女の子を眺めていた。

「ここです、見えますか？」

「はぁ？ 何にも……」

剣人は面倒くさそうに答える。変な女の子に絡まれて、少し不快な表情を浮かべていた。

女の子はそれを聞くと、だんだん顔つきが陰しくなり始める。

「ほら、ここにいるでしょ！ 間の抜けた顔の年若い高校生風の男が！ 顔だけだしてあなたたち見てますよ！」

「いや、見え無いんだけど、ん、ちよつと待てよ……」

剣人は女の子の指先の示す場所に、何も見えてはいなかった。だが、『間の抜けた年若い男性』が妙に頭の中で引っかかる。

えーつと、普通では見えない間の抜けた高校生風の男……
幽霊……間の抜けた……幽霊……高校生風の男……つてまさか！？

「ああ、ちよつと待ってね、今見るから……」

剣人は何か思い当たって、咄嗟にある能力を発動するため携帯を取り出そうとした。しかし、すぐに慌ててその発動を押さえ込む。周囲には他にも海水浴客がいるし、直ぐ横には女の子もいた。

愛想笑いを女の子に向けた後、きよるきよる辺りを忙しく見渡す。どこか力の発動を見られない場所が、無いものか探していた。雫は剣人の手の平に、一瞬携帯の端が浮ぶのを捉えていた。そのため、剣人がどうしたいのか分かったらしく、同じように辺りを見渡して

いた。

「剣人、トイレは？」

「おお、雫、ナイスだ、じゃちよっくら便所いつてくるわ」

「ちよっと、君も待つててな」

剣人は徐に立ち上がると、雫に笑顔で言った後、女の子に手の平を軽く二三度突き出した。

さつき胸を鷲づかみされた事もあり、女の子は少し後ろへ体を逸らす。剣人は身を翻すと、近くの砂浜にある仮設トイレへと駆けていった。

#

「お待たせ」

「おかえり、剣人！」

「長かったですね……」

女の子は待ちくたびれたといったかんじで目を細めて言った。

「悪い、便所混んでな、前の奴大してたんかなー長かったし、臭かったしよーたまんねーよ！」

女の子はそれを聞いて少し目を閉じて閉口していた。

雫も同じ気持ちなので、その態度は理解できた。剣人は初対面の女の子の前でデリカシー無さ過ぎる　と心で思っても、古い付き合いの雫からしたら許容できる範囲だった。

「で、どう？」

雫は雰囲気を変えるため、話題の転換を図る。

「あれ、いないじゃん、幽霊どこいった？」

剣人がさっきの砂場の辺りに目をやるも何もいなかった。首を傾げて辺りに視線を這わせる。目を閉じていた女の子がそれを聞くと、素早く体を浮かせさっきの場所を覗き込む。

しかし、そこにはさっき捉えていた者の姿が無かった。

「あれ、消えたのかな？」

「ふー、あの野郎……」

剣人は頭を掻きながら目を細めた。そして、面倒臭そうに深く息を吸うと、大きな声で叫んだ。

「浩太、出て来いー！」

怒声を孕んだ声が辺りを突き抜ける。

『はい、呼びましたか？』

すると、雫の背後からひよろりと顔をだし、その間の抜けた顔を剣人に振り向ける。

「また、とんでもないところから」

雫は剣人が自分を見下ろして話しているので、浩太が自分の近くにいる事に気づいていた。

女の子は剣人と浩太が淡々と言葉を交わすのを、呆然と眺めていた。

「なるほど、あなたは特殊の力を持っているってことですね」

剣人は詳しくは話さなかったが、女の子に軽く霊が見えること、霊と話せることを伝えた。

それを聞くと女の子は、表情をいくらか柔らかくして、口元を綻ばせる。

さっきの高圧的な態度とは打って変わって、人懐っこく剣人と話していた。

「良かった〜同じような能力ある人がいて〜！」

「ははは……」

まあ借り物だけだな　と剣人は苦笑いをした。

雫は話途中に抜け出していた。同じ力が使えるのに、自分だけ浩太を視認できないのが悔しかった。話混じりたさに更衣室へ向って、力を発動させに行っていた。

「ただいま〜」

雫が笑顔で二人に言った。

そして得意な顔で浩太に大きく手を振って、

「浩太ちゃん！ 久し振りね！」

と、女の子に分かるように大きな声で、自分も見えることをアピールした。

剣人は雫のわざとらしさを見て、声を押し殺して笑っていた。

「おお、あなたも見えるんですか？」

「はい！」

「わゝ奇遇だなあ。こんな場所で二人も、同じ能力もつ人と出会うなんて！」

女の子は感無量つと言った顔で胸元で手を合わせ、メガネの奥の黒い瞳を煌かせ二人を眺めていた。

「ああ、自己紹介まだでしたね！ 私は水小路瑠璃と言います」

「俺は斉藤剣人だ、よろしくな！」

「私は竹下雫です、よろしく」

三人は夏の太陽の日差しに負けないくらい、明るい笑顔で挨拶を交わしていた。

「俺……浩太です……よろしく……」

そんな中、忘れさられていた浩太が、和気藹々と話す三人の真ん中から、ぬぐっと下から青い顔をだして、インパクトのある自己紹介をした。

思わず、三人の表情に黒い影が走った。

陰陽師。

「ところで、水小路さんはここで何してるの？」

「あ、瑠璃でいいですよ、上の苗字堅苦しくて、あまり好きじゃないので」

眼鏡の真ん中付近を指で軽く持ち上げて雫に言った。

そして、背中まで伸びる黒檀のような黒髪に、手を入れて梳きながら、

「海のパトロールしてるんですよ、毎年、海での水難事故は多いですからね」

淡々と真顔で言った。それを聞いて雫は、気の抜けたような声を発した。

剣人もそれを聞いても、どこか納得がいかない顔をしていた。

溺れた人の救助をする海の監視員の人間なら、水着着用は必須。

だが、瑠璃は神社の巫女さんのような格好をしているし、とても救助側の人間には見えない。溺れている人間を発見するボランティアのようなものだとしても、その巫女特有の草履でこの砂浜を歩き回るには不便極まりないとさえ思う。

あまりに不可解な点が多いので、剣人は興味本位で瑠璃に少し尋ねてみる。

「あのさー、瑠璃……ちゃんでもいいかな」

「いいですよー！」

瑠璃は剣人ににこりと微笑んで言った。

「君はいつちゃんんだけど、水難事故を見張るにしても、なんていうの、あまりにほら、格好がなんていうかそれらしくないよね？だからその〜」

剣人は初対面の年下の女の子に、できるだけ棘のある言葉を排除して聞いてみた。

大雑把で口下手の剣人からすれば、かなり抑えた聞き方をしていた。

「分かりますよ、斉藤さんの言いたい事は。つまり、場違いな姿で海のパトロールとか可笑しいと思ってるんですよね？」

「いや、えーと、その〜……」

剣人は視線を下げて曖昧に呟く。

だが、瑠璃は朗らかに笑うと、

「あはは、そんなに気を遣わなくていいですよ！ どう見ても可笑しいですから！ 実はですね、私は普通の水難事故のパトロールをしているわけじゃないんですよ。どういふことかという、さつき私、あなたの傍に漂う浩太さんを発見しましたよね？」

「ああ、うん」

浩太は名前を出されると、それに呼応したかのように、瑠璃の後ろにすーっとシートの下から現れる。瑠璃の顔近くまで体を寄せてくると、苦笑いをしながら片手で押し返し、浩太の顔の接近を阻んだ。

「私は昔から霊や物の怪といった、普通の人気がつかない者達を見る事ができるんです。そして、私の家系はそういった不可思議な存在と関わる事を生業としてきた一族なんです」

ここまで説明した瑠璃は少し物思わし気な顔で、首を傾げて言葉を止めた。

雫と剣人は琴線に触れる言葉を聞いた途端、はっとして耳を欬てる。

瑠璃はしばらく腕を組んで黙っていたが、だんだんイライラした様子で体を揺すり始めた。

そして、頭を乱暴に掻き毟った後、人差し指を徐に立てて剣人達に向けると、

「難しくいうのだからなんです！ 簡単に言いますね！ 私の家系は陰陽道で霊を払ったり妖怪をなぎ倒す事を生業としています。所謂現代に息衝く陰陽師です。そして、私はひよっこ！ なので、今修行中の身でして、取りあえず、陰陽師としての腕を上げるために、人間に害をなす海の悪しき霊たちや妖怪達を探し出すため練り歩き、見つけたら祓うつなり、しばらくはなっています！」

瑠璃はハアハアと息を荒立たせ、最後まで言い切った後は、憑き物が落ちたみたいに平然とした顔を二人に向けて微笑んだ。

その捲くし立てるような口調に、二人は気圧され体を少し退いていた。

剣人はそれでも話は全て聞いていたらしく、冷静に今聞いた内容を分析していた。

『陰陽師』とか言われてピンと来ないが、結局、自分たちと似たようなもんだよね？

「まあ、よく分かんないけど、君は幽霊や妖怪が悪さしないように頑張っているんだね」

「そうです！　そうです！　その通りなんです。あゝ、この説明でこんな快く納得してもらったの初めてだゝ……」

何故か二人の前で胸元で手を組んで、感激の余り涙を流す瑠璃。
剣人は大袈裟だなあっと思いつつも、なんとなくその気持ちが分かる気もしていた。

雫も同様の気持ちだった。二人も借りているとは言え、特異な力の持ち主である。

その能力の話は、陽の力の関係者、つまり、雫、剣人、鬼塚、源信といった者の間でしかできない。それは、他の人に話したところで到底理解を得られないと思うからだ。

この瑠璃も普段から、似たような閉塞感や孤独感を味わっているのだろうと二人は思った。

和気藹々とその後も三人で話していたが、

『瑠璃ゝ！　大変だゝ！』

「ん？」

瑠璃は自分の名が呼ばれると、振り向いてそちらへ視線を向けた。剣人はその瑠璃の視線の先にいる者の姿をみて、瞬時に青褪める。砂浜を異形の姿をした者が、こちらにぴょんぴょん小高く飛び跳ねながら向ってきていた。

一本足、一つ目、大きな口、鋭い牙、大きな丸い体　どこからどうみても、妖怪と言って差し支えない姿をしている。

「きゃ〜剣人！ どうしよう、妖怪がやってくるよ！」

雫も明らかに狼狽していて、尻を地面につけたまま、ずる〜と砂浜まで後退って取り乱していた。

シートは斜めにずれて、雫の大きなお尻を引きずった跡が、砂浜に歪な直線を描いていた。

その妖怪が瑠璃の傍でやってくると、益々二人は落ち着きなく騒ぎ始める。

「どうしたんですか〜？」

後方の喧騒に気づいて、瑠璃はきょとんとした顔で剣人達に振り向いて言った。

「そ、その妖怪！ 何！？」

剣人も当等我慢できずに、雫がいる付近まで素早く逃げると、右人差指を手を目一杯伸ばしながら妖怪に突き出し、瑠璃に大きな声で尋ねた。

瑠璃は剣人の指差すだたらをぼーっと見つめた後、やっとその存在の異質さに気づいたのか、

「ああ！ ごめんなさい！ これ私が式神として扱っている妖怪なんですよ〜！ びっくりしますよね〜！ 私へばだから、一般的に陰陽師が使う十二天将とか強い霊体は使えないので、下級の妖怪を式神として使ってるんですよ〜！」

瑠璃は頭を拳でこつんと叩いて、舌を少し出すと苦笑いを浮かべる。

そして

「これ、一本だたらのだたらです。私の式神です！ よろしく！」

軽い口調で淡々と妖怪を二人に紹介した。

だたらは大きな口の両端を吊り上げて不気味に微笑む。剣人と雫は、瑠璃に笑顔でだたらの紹介を受けたものの、恐怖は拭い切れず、青褪めた顔は引きつっていた。

複雑な乙女心。

剣人達は瑠璃から物の怪の話や、陰陽道について色々話を聞かせてもらえた。

といっても、瑠璃が一人で話している状態ではあったが。

だたらずっと傍にいるが、二人は大分その異形の姿にも慣れてきていた。

雫などは、だたらの頭を平然と撫でてみたり、ゴツイだたらの手と握手を交わしたりしていた。

にやつと笑う愛想の良いだたらだが、剣人は傍にいる事に慣れたとは言え、どうも触る気にはなれなかった。その姿に生理的に受け付けないものがあつたようだ。

瑠璃は永延と自分語りを続けていたが、次第に話題が付き始める。そして、何か思い出した様子で、だたらを見つめて、

「そーいや、だたら、何か言ってたっけ？」

「えーっと、なんだっけ、うーん、あーそーだ！ 海岸に磯女と濡れ女見ましたよ」

「なんですって！」

瑠璃はそれを聞くや、途端に表情を強張らせた。

剣人はさっきまでとは明らかに、様子が一変した瑠璃の顔を見つめて、

「どうしたん？」

「えーっと、あ、ちょっと見てきまーす！」

急に立ち上がると焦った様子で、瑠璃はだたらを連れて猛然と砂浜の向こうへ駆けて行った。

「なんなんだ？」

剣人は雫と顔を見合わせて首を傾げる。

「さあ……？」

よく分からないと言った表情で呆ける二人。

「ただいま」

そんな時、高木と巴が泳ぎつかれたのか、少し疲れた顔で戻ってきた。

「お！ おかえり〜ご兩人！」

剣人はぶつきらぼうに言うと、二人の座る場所を空けてやった。その場所へお尻からどかっと座り込む巴。疲れた顔でタオルで身体を拭いて一息ついた。

「よく泳いだね、高木君」

「まあ遊びにきたんだし、これくらい泳がないとね！」

高木は疲れてはいたが、つとめて笑顔を作って快活に巴に返事をした。

そして、立ったままシートに腰下ろす三人に向かって、

「飲み物買ってくるけど、なにがほしい？」

「俺サイダー」

喉が渴いていたのか、即答の剣人。

「私は温かいのがいいなあ」

巴は海につかりっぱなしで冷えていたので、暖かいミルクティを頼んだ。

あるかは不明だが……

「私はいらない」

雫は飲み物自体いらないうた。

全員の注文を聞いた高木は、一声みんなにかけて、海の家に向かって走っていった。

#

巴は海から上がってくる時、巫女姿の女の子が二人と話しているのを目にしていた。

あまりに場違いな格好をした女の子と二人が、何を話していたのかが気になり、それとなく尋ねてみる。

「ね、ここで巫女姿の女の子いたよね？」

「ああ、いたよ」

「なに話してたの？」

巴が興味深深と言った眼を向けて、剣人を覗きこんできた。

「えーっと……」

返答に困って言葉に詰まる剣人。

素直に聞いた話を巴に伝えるわけにもいかず…… 雫に目配せしてみる。

「あ、その～えーっと」

雫は剣人の目配せを受けて、何か良い言い訳は無いか思案したのち、

「ああ、そそ、海でコスプレ写真とらせてるらしくって一枚どうですか？って聞いてきたけど、ほら生憎ね、私たちそういうの興味ないし、カメラ持っていないしね！」

「コスプレ……この暑いのにわざわざ海で？」

「ちょっと変わった人みたい！　なんか……そう、目立ちたかりやなのかもね！」

雫はすぐに良い言い訳が浮ばなくて、出鱈目をつらつらと巴に聞かせた。

隣で肘をつきながら剣人が、片目を瞑って目端を痙攣させていた。苦しいとは言え瑠璃を変人扱いで纏めた雫の妄言に、それはない

だろうつといった表情である。

「へー、変わった人もいるもんね」

「ただいまゝみんな！ 買って来たぜ！」

高木の声を聞くと、巴の思考から一瞬にして瑠璃の話題が離れる。

「ありがとー高木君！」

高木に気持ちを込めた労いの言葉を巴はかけた。

「サンキュー高木！」

剣人はサイダーを受け取ると、プシューッと音を立ててぐいぐい飲み干していく。

雫は巴の態度がいつになく愛想よく見えていた。

普段自分と話す時の、ぼんやりした口調と比べると違和感を感じていた。

とはいえ、高らかに声を張り上げて、楽しそうに話す巴と高木を見て、そういうことかと納得はしていた。

何気に二人から視線を外して剣人を見つめる。

剣人は雫のどこか物言いたげな視線に気づくと、飲み干そうとしていたサイダーを雫の顔に近づけて、

「欲しい？」

「いえ……」

「ふーん、何か元気ないな？」

「そんな事ないよ……」

まあ、別にね……

どこか浮かない顔で二人の楽しそうな横顔を、雫は瞼を伏せ気味に眺めていた。

嵐の予感。

妖怪はある一定の人間に己の意志で、自分の姿が見えるように実体を現すことができる。

だが、それは本当に稀な場合で、普通は人間の目にその姿が触れる事はまずない。

幽霊と同じで一部の特異な能力を持つ者以外には、その姿は見る事ができなかった。

よって、普段は大気のような存在で、だたらが密集する場所を飛び回っても、人間に接触したりする事はなかった。

ただし、先にも述べたとおり、己の意志で人間の前に姿を現す妖怪は別である。

そういった妖怪は、霊能力のない多数の人間が見る事もでき、接触する事もできる。

今、瑠璃が目の前に寝そべる女性二人も、周囲の人間の目に自然に映っていた。

「こら、その妖怪二人組！」

瑠璃はパラソルの影にシートを敷いて、横たわる年若い女性二人に怒鳴った。

カラフルなビキニで身を覆い、サングラスをつけて寝そべっていた。

どちらも太陽の日差しに肌が焼けた様子がなく、青白い肌が際立って見える。

一方の女性が瑠璃の声に気づいて、顔だけ瑠璃に傾けた。

「どなた？」

「妖怪に名乗る名などないわ！」

瑠璃は眉を吊り上げて女性を睨んだ後、指を差して猛々しく言い切った。

「へー分かるんだ、私たちの正体！」

「もちろんよ！ これでも陰陽道を生業とする一族の娘よ！」

「お……」

瑠璃が放った言葉に、瞬時に二人の穏やかな様子が一変した。もう一方の赤茶色の短髪の女性が、半身を起こして瑠璃に顔を向けた。

「あんた……陰陽師……？」

「そうよ！」

瑠璃がそう強く言い切ると、二人の女性は顔を見合わせた後、瑠璃に素早く視線を注いだ。

そして

「ふ……せつかくの海水浴を人間たちに紛れてのんびり楽しんでたんだけど……そうもいかなかったわね……」

と、低い声で呟くと赤茶色の髪の女は立ち上がって、サングラスの縁を指で摘んで持ち上げた。

瑠璃はその女のサングラスの影の瞳に見据えられると、顔を強張らせて右足を後ろに引き踏ん張った。死んだ魚のような白濁色の眼

が、サングラスの影から瑠璃を鋭く睨んでいた。

「小娘！ 面貸しな……！」

赤茶色の髪の女はサングラスの縁を下げて眼を覆うと、ぶっきらぼうに瑠璃に言い放った。それを聞いていた隣の青黒い髪をした長髪の女性は、面倒くさそうに濡れた髪を掻き毟って立ち上がる。

「どこ行こうっていの？」

瑠璃は強気に二人に言った。

二人に蔑むような笑みを向けている。

「ふん！ ついてくれば分かるよ」

赤茶色の髪の女は瑠璃に振り向かず、不機嫌な様子で言う海水浴場のはずれへと歩いていく。青黒い髪の女もすーっと砂浜を滑るようにつき添う。

瑠璃はその二人の後を慎重な足取りで、少し間を空けながら追跡した。

#

剣人と雫は高木と巴が帰ってきて少し談笑した後、入れ替わるようにして、また海で一緒に泳いでいた。沖にある岩場まで一緒に泳いでやってくると、雫が不意に剣人に呟く。

「ねえ、剣人……」

「ん？」

「瑠璃ちゃん、あの後どこ行っただろうね？ あれから姿見せてないけど……」

「さあな、そーいや、なんか言っただけ？」

雫は剣人にそう言われ、瑠璃と別れる前の様子を思い浮かべてみる。

宙空を見つめながら、その時の情景を頭に描いていると、だたらが話していた内容に聞きなれない名称があった事を思い出した。

「うーん、そう言えば、だたらが磯女とか濡れタオルとか言ってたような……」

雫はうる覚えだったため、顔を傾けて曖昧なかんじで剣人に言った。

「はあ……？ なんじゃそりゃ……」

「何だろうね……」

「ん……待てよ……磯女ってなんか聞いた事あるな……」

剣人は磯女の名称を聞いてから、頭の端に何かひっかかるものを感じていた。首を傾げてその記憶の片隅に埋もれる何かを、思い出そうと頭を捻る。

しばらくして、眼を見開き、弾いたように顔を上げると、

「ああ、なんかの昔話で読んだ気がするぞ、確か……海に出る女の妖怪だよ！」

「ええ……！ 妖怪？」

「うん……確かさあ、男を騙して海に沈めるみたいな悪い妖怪だった気がするなあ」

雫は剣人から聞いた話が、だたらが言った磯女と、微妙に接点があるような気がしてならなかった。

実際に出あって戦った事のある雫にとって、もう妖怪は昔話に現れる非現実的な存在ではない。実際にこの世に存在する者たちである。

磯女が実際にいるとして……だたらからその名前を聞いた後、血相掻いて駆けて行った瑠璃ちゃん……うーん……ああ！？

「剣人分かったわ！ 瑠璃ちゃんその磯女って妖怪を退治しに行ったのよ！」

「ええ、まじ？ それも一人でか……？」

剣人達は前の妖怪との戦いで、その尋常でない強さを身に刻んで分かっていた。

顔を見合わせ、二人は時間が止まったように一時黙っていた。

だが、そのうち言い知れぬ嫌な予感が、体に寄せる波の冷たさに紛れて、背筋を冷ややかに走る。

「おい、雫！ 浜辺に戻るぞ！ 瑠璃ちゃんが心配だ！」

「うん……幾ら陰陽師だからって、妖怪二人相手とかさすがに……
急ごー!」

二人は勢いをつけて水に潜ると、水面を掻き分け浜辺に向かって泳ぎ始めた。

新たな闇の影。(前書き)

覚えていないかもしれませんが……
ぽつりぽつり書いていこうかと思えます。

新たな闇の影。

海水浴場のはずれに瑠璃と妖怪達はやってきた。ごつごつとした身の丈ほどの岩が瑠璃たちの周りを取り囲み、人氣は皆無に等しい。相等、接近してこないと、人の目につく事は無さそうな場所だったが、瑠璃は念には念を入れて、陰陽師の使う手印を交えながら、何かを口ずさむと、

「結界を張っておいたわ、人間はこの一帯に近付く事はないから、思う存分やれるわよ！」

瑠璃は不敵な笑みを浮かべ、強気な口調で妖怪達に指差して言った。人を寄せ付けない見えない結界を、瑠璃はこの辺り一帯に蜘蛛の巣のように張り巡らした。

この結界は、近づく人間に自然と遠ざかる意思を、植えつける陰陽師の呪い（まじない）の一種だ。

「ふーん、お前、最初っから話合う気はないって態度だね」

「いるんだよね、こういう血の気の多さだけで、突っ走る世間知らずな小娘がね」

「まあ、私たちもそのつもりだから良いけどな……」

赤茶色の髪の女はサングラスを投げ捨てると、白濁色の瞳を瑠璃に向けて両足をそろえた。

すると、足の境が融合し始め、一つの胴体のようなものに姿を変えた。しばらくすると、その胴体は後ろに長く伸び始め、蛇のような長い体躯へと変わっていった。青黒い髪の女はその変化に乗じるように、同じく姿を変えていた。

白装束に身を包み、褪せた紫色の帯を腰に巻いている。青白い顔はそのままだに、濡れたような青黒い髪だけが異様に長く伸び、足元までだらりと垂れて、砂地にべっとりと張り付いている。

「我が名は磯女……この海岸で800年の時を生きてきた水妖だ……そして、そいつは、濡れ女、同じくここに棲みつく水妖の仲間……」

「知ってる……」

妖怪達が厳然として正体を語ると、瑠璃はにべもなく呟いた。

だが、妖怪達は特に驚く様子も見せず、気に入らないと言った様子で眉を潜め、口を大きく開けて、威嚇の声と伴に鋭い牙を剥いた。磯女の赤黒い口腔から蛇の細長い先分かれした舌が、シュ〜と乾いた音を立てて伸びている。

「陰陽師の小娘！ 戦う前に先に聞いておく事がある……」

「はあ？ まだなんかあるの、どうぞどうぞ」

臨戦態勢に入ろうとしていた瑠璃に、磯女がまだ話があるらしく声をかけてくる。

それに面倒くさそうに片目を閉じて舌打ちすると、瑠璃は妖怪達に呆れた様に言を促した。

「お前は陰陽師と言ったが、本物か？」

「……………！？」

瑠璃はそれを聞かぬや、瞳に強い輝きを宿して、足を開け気味に深く息を吸い込む。

「もつつちろんよ！ 私はここより少し離れた場所に居を構える陰

陽師の一族……水小路家の13代目の孫娘にして、闇で暗躍する陰の者の監視と退治を生業とする稀代の美少女陰陽師！ 水小路瑠璃よ！」

瑠璃は長い台詞を舌を噛まずにさらりと言った。この台詞は妖怪達の前で格好つけれるように何度も鏡を見ながら練習したものだ。言い切った後は鼻を擦りながら、頬を少し赤くして妖怪達に睨みをきかしていた。

やっと、詰まる事なくさらりと言えたわ……長かった……

瑠璃はしばらく、右拳を胸元で握り締め、今の台詞を噛まずに言えた余韻に浸っていた。

だが、妖怪達の反応は極めて冷やかなものだ。寧ろ長い台詞に間を空けられ、更に不機嫌そうな顔を力チ力チ言わせていた。

「ふ……まあいいわ……」

磯女はぷつと赤茶けた唾を砂地にはき捨てた後、少し落ち着きを取り戻すと、背の黒い鱗から何か紙片のようなものを取り出し瑠璃に向けた。

「小娘、この写真に載っている男、知らないかい？」

不意に写真を突き出され、きょとんとした目でそれを眺める瑠璃。それには黒っぽい外套のようなものに、すっぽり身を包んだ男が映っていた。

「うーん、見た事ないわね……」

「その子格好いいでしょ！　なんか世に恨みでもありそうな拗ねた瞳が最高〜よね！」

濡れ女が横合いから、何やら浮ついた発言を挟んでくる。緊張感ぶち壊す濡れ女の言葉に、磯女はしゅ〜と長い呼気を吐き出し、怒気を孕んだ視線を濡れ女に向けた。

それを受けて、濡れ女は消え入るような声で、ハハと薄っすら笑うと、少し後ろにす〜と滑り縮こまっていた。

その間も、じ〜と瑠璃は食い入るように写真を見つめていたが、やはり、身に覚えがないらしい。目を閉じて首を横に振った後、さつと後ろにステップして妖怪達と距離を空けた。

「こいつ陰陽師だね……、こいつが……この一帯を治める牛鬼様を浚っていったんだよ。私たちの親的存在である牛鬼様をね……」

悔しさを噛み締めるように、顔に影を刻ませ、磯女は歯軋りを響かせた。

濡れ女もどこか冴えなく表情を曇らせていた。だが、そんな二人の様子を意に介する事無く、瑠璃は淡々と思った事を口にした。

「あら、陰陽師！？　へえ、牛鬼なんかどうするんだろ？　式にでも使うのかしら？」

「ふ……さあね、だけど、話はこれまでだ……」

妖怪達が目に見えて殺気立つ。その体から発する妖気に、瑠璃も凜と表情を引き締め、距離を保ちながら相手を睨みつける。

「あんたに恨みはないけど、牛鬼様を浚った同じ陰陽師の一族、少しいたぶらせてもらっよう！」

死闘。

磯女は海の中に頭から勢い良く飛び込んだ。水面下に長い体躯がすっぱり治まると、顔ただけだして瑠璃を睨みつけた。口から相変わらず細い蛇の舌のようなものが、忙しく出入りしている。水際で突っ立っていた濡れ女だったが、磯女の殺気に刺激され、自らも長い髪を逆立たせて空に浮かせた。髪の本一本が宙で蛇のように蠢いている。その毛髪の先は研ぎ澄まされた、刃の先のように黒光りしていた。

「行くよ！」

磯女は海の中でとぐろを巻いていた。尻尾の先の強靱な筋肉で海底を押し潰し、その反動を利用して、水中から空へ、水しぶきを伴い高く飛び立った。長い体は宙で弧を描き、瑠璃のいる場所へ頭から落下していく。白い尖った歯をむき出しにし、両の手の鋭い爪を瑠璃に向けて突き出していた。地上では濡れ女が髪を逆立たせたまま、砂埃をあげ突進してきている。

「ふふん……」

二匹が瑠璃の位置で交わろうとした瞬間、瑠璃はふわりと後ろへ飛んだ。突然、的を失った二匹の妖怪は慌てた。磯女は咄嗟の機転で、片方の長い手を突き出し、左方に長い体を横倒して着地するこゝとで、濡れ女との接触を回避した。それを見て取り、濡れ女は急いで裸足の白い踵で砂浜を削りながらも、勢いを殺し立ち止まった。その間にも長い蛇の体は砂浜を滑っていく。落下したぶん勢いがついてすぐには止まらない。だが、蛇特有の全身のしなやかな筋肉を

巧みに使って体勢を整え、片手をついて上半身を起こした。

「小娘！？ どこへ消えた？」

妖怪達は瑠璃の姿を探していた。今のごたごたで、砂埃が舞って視界が白く濁っている。

「あんたたち、とろいわね」

「何を！？」

砂埃の中、突然どこからか聞こえた瑠璃の言葉に、磯女はしゅっと呼気を吐き出し殺気立っていた。

次第に砂煙が晴れて視界がはっきりし始める。妖怪達は目を細めながら辺りを探る。が、瑠璃の姿はどこにも見当たらなかった。

「糞、どこ行きやがった！？」

磯女が苛立たしげに大きな声を張り上げた。しかし、瑠璃の声は返って来ない。そればかりか、妖怪達の殺気だった鋭敏な感覚を持つてしても、気配すら感じる事ができないでいた。

濡れ女は砂浜を裸足で駆け回り、右往左往して瑠璃の姿を探していた。

潮が満ちてきたのか、打ち寄せる波は浜を少しずつ侵食していた。妖怪達は散々瑠璃の姿を追い求め、辺りを散策したが、どうしても見つけることができない。もしか、逃げたのではという憶測も浮んで、二匹の緊張の糸は次第に張りを失い、砂浜に静寂さえ漂い始め

ていた。

「逃げたのか？」

憶測を磯女が口にした。

「そうかもね……なんか、馬鹿らしいし帰ろうか……？」

濡れ女もやや呆れた様子で同調した。

砂浜に突き出た小岩に腰を下ろす濡れ女。逆立った黒髪を一旦だらりと地に落して、どこからか出した赤い櫛で一本一本、丁寧に梳き始める。

ズ……ズ……

「なんだ……この音は……？」

「さあ……」

砂浜に長い体躯を横たえていた磯女が鎌首をもたげる。どこからか聞こえる奇怪な音に敏感に反応していた。濡れ女はそれに生返事をした。風か潮の音だと思い、気に留める様子もない。ただ、髪の手入れに没頭していた。

ズ……ズ……

しかし 先程からの不可解な音は、断続的に聞こえてくる。磯女はさすがに気になり始めて、細い漆黒の瞳を見開いて、辺りをなぞるように探り始めた。

ズ……ズ……

尚も不思議な音は途絶える事無く、寧ろ最初より幾分大きく響いていた。磯女は体を起こして更に神経を尖らせ、周りに緊迫した視線を運んでいく。濡れ女も異変に気づいたのか、髪を梳く櫛を懷にしまいこみ、一緒に奇怪な音の出所を探り始めた。

そのうち 磯女の黒い瞳が、突然、一箇所でぴたっと止まった。

「おい……！」

磯女は濡れ女に声をかけると、顎先を振ってある場所を示唆した。

「ん……？ あ……」

濡れ女がその箇所を目を凝らすと、砂浜の中に一点、微かに隆起した場所があった。ただ、それだけだと何の変哲もない小さな砂山に過ぎない。だが、突起した砂山は微かに動いていた。その異変を濡れ女も捉えていた。

「フフン……そういうことか、濡れ女！」

磯女がにやりと悪意に満ちた笑みを濡れ女に向けると、その意を汲み取ったらしく、

「ヒューヒュー！」

と、怖気の走るような金切り声を濡れ女はあげた。すると、濡れ女の逆立たせた髪のがピンと鋭さを増し、次の瞬間 恐ろしい速さで伸びて砂山に突き刺さった。

「ざまあみる！ 小生意気な陰陽師のガキはこの濡れ女が討ち取った！」

「ふふふ……」

濡れ女が大口を開けて、勝利宣言を口にした。妖怪達は砂山の下に、十中八九瑠璃が潜んでいると確信していた。黒髪の鋭い刃が何本も砂山に突き刺さっている。髪の上にまで感覚をもつ濡れ女は、肉を貫いた手ごたえを確かに感じていた。

「ふーしかし、殺しちまったな……声を立てないところを見ると即死だろうね……」

濡れ女は頭を後方にふることで、刺さった黒髪を砂山から抜き取り元の長さに戻した。

「ま、仕方ないだろ、陰陽師と妖怪、戦えばどちらかが死ぬ、それくらいガキといえど覚悟はできてるだろうよ」

「うん……」

濡れ女は興奮が冷めてくると、一転して気まずそうに俯いた。それを見て、磯女は戦いの厳しさを語る事で、正当性を示して慰めているようでもある。二匹は後味の悪そうな顔で、しばらく砂浜の盛り上がりを眺めていた。

「まあ、やつちゃったものは仕方がない、牛鬼様のことも心配だし

取りあえず、海の底でこの後どうするか考えるか！」

磯女は元の姿に戻ると、海と一緒に帰ることを促す。

「ほら、帰るよ」

動こうとしない濡れ女の肩を触るが、どうも様子がおかしい。触れた肩の筋肉が、妙に強張っていて微かに震えていた。触

「姉さん！ ちょっとあれみて！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4511e/>

JUSTICE BOY

2010年11月24日06時08分発行